

諏訪市埋蔵文化財報告第27集

ジャコッパラⅡ

——平成4年度長野県黒耀石原産地遺跡分布調査概報——
(諏訪市霧ヶ峰ジャコッパラ遺跡群遺跡分布予備調査1)

1993.3

諏訪市教育委員会

諏訪市埋蔵文化財報告第27集

ジャコッパラⅡ

——平成4年度長野県黒耀石原産地遺跡分布調査概報——
(諏訪市霧ヶ峰ジャコッパラ遺跡群遺跡分布予備調査1)

1993.3

諏訪市教育委員会

JAKOPPARA vol. II

AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY
ON JAKOPPARA SITES AT KIRIGAMINE,
NAGANO-PREFECTURE, JAPAN

1993. 3

THE BOARD OF EDUCATION
OF SUWA CITY

序

霧ヶ峰高原は、私達にとって日頃から最も馴染み親しんでいる山の一つであると言えるでしょう。その豊かな自然のなかに昔の人々が残した生活の跡が埋もれていることは、過去に行われた発掘調査などで部分的にわかっていましたが、ほとんどが山林や草原であったためにその実態を詳しく知ることはできませんでした。今回の分布予備調査は、これまで遺跡の存在を確認することが困難であった山間部で遺跡がどのように分布しているのかを調べるためのものです。

霧ヶ峰南麓に位置するジャコッパラ遺跡群では、今回の調査で旧石器時代の遺跡が新たに何か所も発見されました。この付近には全国的にも有名な和田峠など黒耀石の露頭がいくつも知られており、ここで産出された黒耀石は遙か関東一円まで運び出されて石器の材料とされていたことがわかっていいますが、ジャコッパラ遺跡群はこの黒耀石搬出ルートのいわば要にあたり、重要な位置を占めています。また、No.8 遺跡で発見された石器群は、2 万年以上前のものと考えられ、現在のところ市内で最古の大変貴重なものです。これらの他に、縄文時代の人々の生活を支えていた、陥し穴を使った狩りの場も発見されるなど、この遺跡群の重要性が判明しつつあります。調査はまだ中途の段階にありますが、今後も継続されてゆく中で遺跡群の学術的な位置付けが行われ、その成果が文化財の保護に役立つことを願いたいと思います。

本調査は、国庫および県費補助事業として実施したものであり、文化庁・長野県教育委員会と関係者・担当者の方々には特にお世話になりました。また、調査に際して全面的に御協力をいただいた地権者・関係者の方々に心からお礼を申し上げますと共に、山間部という困難な状況の中で献身的に調査に携わられた調査団および調査関係者各位の御努力に対し、深く感謝申し上げます次第です。

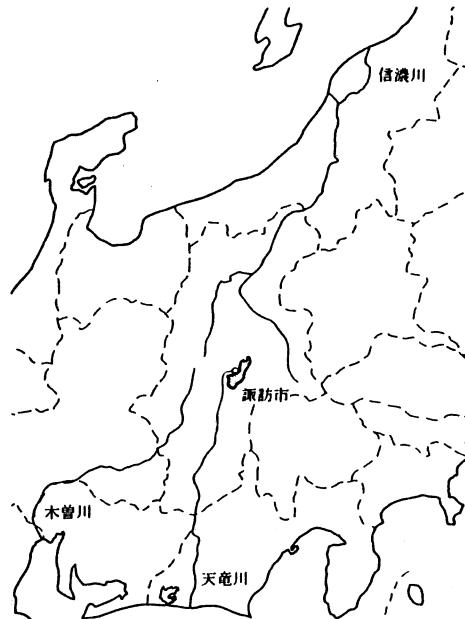
平成 5 年 3 月 25 日

諏訪市教育委員会

教育長 吉田 守

例 言

1. 本書は、長野県諏訪市霧ヶ峰南麓地域の平成4年度遺跡分布予備調査概要報告書である。
本分布予備調査は平成4年度国庫・県費補助事業市内遺跡発掘調査事業の一部として行われたものである。また、長野県黒曜石原産地遺跡分布調査（諏訪市）を兼ねている。
2. 本調査は、諏訪市教育委員会が調査主体者となり、諏訪市教委の編成するジャコッパラ遺跡群調査団が調査を担当した。
3. 現場における発掘調査は、平成4年8月3日から9月21日まで実施した。報告書作成作業は平成4年12月から平成5年3月まで、諏訪市考古資料館において行った。
4. 本文中の水糸レベルは標高の絶対値で示した。
5. 現場における記録と整理作業の分担は次の通りである。
遺構等実測……五味裕史・青木正洋・関 喜子・原 敏江・矢崎つな子・両角南子・赤羽真由美・茅野嘉雄、遺物水洗・注記作業……関・原・矢崎・両角・小島良一・宮坂茂子・赤羽・太田 努・茅野、遺物実測及びトレース……高見俊樹・田中総・青木・五味、図面写真整理・遺構トレース……青木・五味
6. 執筆分担はI 事務局、II 五味、III 青木（石器 高見）、IV-1～3 五味・4 高見、5 青木（石器 高見）、V 河西学、VI 青木である。
7. 各試掘グリッドの平面図及び土層断面図中のドットは下記の通りである。
凡 例 ●……黒曜石（TOOL以外） ▲……土器片
○……黒曜石製石器（TOOL類） □……黒曜石以外の石器類（TOOL類）
8. 調査の諸記録は、諏訪市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成に際し、調査・整理参加者の他に下記の方々をはじめ多くの方々に御指導・御教示を得た。記して感謝申し上げる。
戸沢充則・安蒜政雄・酒井潤一・岡村道雄・勅使河原彰・河西学・辻本崇夫・大竹憲昭・宮坂清・田中総・山梨文化財研究所
上桑原牧野農業協同組合・上桑原共有地組合・大建工業株式会社・浜崎建設・長野県教育委員会文化課



目 次

序	
例 言	
目 次	
図版目次	
表 目 次	
I 調査の経過	
1. これまでの経過と調査の方法	1
2. 調査組織	3
3. 調査日誌 (抄)	3
II 位置と環境	
1. 遺跡の位置と環境	4
III 過去における調査	
1. 分布予備調査以前	6
2. 平成3年度遺跡分布予備調査の概要	6
IV 平成4年度遺跡分布予備調査の概要	
1. 調査区域の位置と基本層序	15
2. ジャコッパラNo.6 遺跡	15
3. ジャコッパラNo.7 遺跡	18
4. ジャコッパラNo.8 遺跡	20
5. KRC地区	38
V ジャコッパラ遺跡群のテフラ	
1. はじめに	59
2. 地質	59
3. 試料・分析法	59
4. 分析結果	61
5. 石器群とテフラ層位	62
VI 調査のまとめ	
1. 検出された遺構・遺物について	65
写真図版	

図版目次

第0図	(諏訪市の位置)	
第1図	遺跡群の位置と周辺の主要な旧石器時代遺跡群	4
第2図	霧ヶ峰南麓A～F地区の位置	4
第3図	平成4年度調査区域の位置	5
第4図	平成3年度分布予備調査試掘グリッド分布図	7
第5図	B-40グリッド陥し穴状遺構	11
第6図	B-23グリッド	12
第7図	B-60グリッド	12
第8図	B地区試掘グリッド出土遺物その1	12
第9図	B地区試掘グリッド出土遺物その2	13
第10図	B地区試掘グリッド出土遺物その3 (土器)	14
第11図	B-37グリッド北壁土層柱状図	14
第12図	ジャコッパラNo.6～8遺跡の位置	16
第13図	ジャコッパラNo.6遺跡平成4年度調査区の位置	17
第14図	ジャコッパラNo.6遺跡表面採集遺物	17
第15図	ジャコッパラNo.6遺跡遺構分布図	17

第16図	ジャコッバラNo. 6 遺跡陥し穴状遺構その1	17	
第17図	ジャコッバラNo. 6 遺跡陥し穴状遺構その2	19	
第18図	ジャコッバラNo. 7 及びNo. 8 遺跡平成4年度調査区的位置	20	
第19図	ジャコッバラNo. 8 遺跡平成4年度調査区全体図	22	
第20図	ジャコッバラNo. 8 遺跡遺物分布図・土層断面図及び遺物レベル投影図東壁その1	23	
第21図	同上	東壁その2・その3	24
第22図	同上	東壁その4・その5	25
第23図	同上	西壁その1	26
第24図	同上	西壁その2	27
第25図	ジャコッバラNo. 8 遺跡出土石器遺構別組成表	28	
第26図	ジャコッバラNo. 8 遺跡出土遺物その1	29	
第27図	ジャコッバラNo. 8 遺跡出土遺物その2	31	
第28図	ジャコッバラNo. 8 遺跡出土遺物その3	33	
第29図	ジャコッバラNo. 8 遺跡出土遺物その4	35	
第30図	ジャコッバラNo. 8 遺跡出土遺物その5	36	
第31図	C-4 グリッド平面・セクション図	38	
第32図	平成4年度分布予備調査(KR-C地区) 試掘グリッド分布図	39	
第33図	C-6 グリッド平面・セクション図	42	
第34図	C-10 グリッド平面・セクション図	42	
第35図	C-18 グリッド平面・セクション図	43	
第36図	C-18 グリッド平面・セクション図	44	
第37図	C-22 グリッド平面・セクション図	44	
第38図	C-23 グリッド平面・セクション図	45	
第39図	C-26 グリッド平面・セクション図	45	
第40図	C-27 グリッド土層柱状図	46	
第41図	C-37 グリッド平面・セクション図	46	
第42図	C-40 グリッド平面・セクション図	46	
第43図	C-44 グリッド平面・セクション図	47	
第44図	C-53 グリッド平面・セクション図	48	
第45図	C-59 グリッド平面・セクション図	48	
第46図	C-46 グリッド平面・セクション図	49	
第47図	C-72 グリッド平面・セクション図	49	
第48図	KR-C地区出土遺物(石器) その1	51	
第49図	KR-C地区出土遺物(石器) その2	52	
第50図	KR-C地区出土遺物(土器)	54	
第51図	ジャコッバラ遺跡群遺跡分布図	57	
第52図	ジャコッバラ遺跡群試料の含水率、粒径組成、火山ガラス含有率	60	
第53図	No. 7 遺跡試料採取層位	62	
第54図	ジャコッバラNo. 8 遺跡の遺物分布と火山ガラス含有率	62	

表 目 次

第1表	ジャコッバラNo. 8 遺跡出土の石器一覧表	28
第2表	KR-C地区試掘坑一覧表	40
第3表	KRC地区遺跡別データ	58
第4表	テフラの屈折率測定値と対比	59
第5表	計数火山ガラス粒数	61

I 調査の経過

1. これまでの経過と調査の方法

霧ヶ峰高原および周辺部には火山性ガラスである黒耀石の露頭が多く存在しているが、この黒耀石は、産地である中部高地はもちろん関東地方などを含む広い範囲にわたり、石器時代における石器材料として多用されていたことが知られている。黒耀石の各地域に見られる消費のあり方からは当時の社会組織や生活形態を探る試みが進められており、霧ヶ峰周辺で石器や石器素材を集中的に制作したと考えられる遺跡が発見されていることと合わせ、石器時代における原産地と消費地との関係を明らかにすることは、当時の経済活動のみならず文化全体を知るための手掛かりとして非常に重要である。しかし、これまで原産地周辺では遺跡群の分布や各遺跡の性格が部分的に明らかになっていたにすぎず、国内でも類例をあまりみない石器素材の一大原産地の実態は不明な点が多かった。

こういった状況をふまえて県教育委員会および関係市町村による長野県黒耀石原産地遺跡分布調査が計画され、和田峠・男女倉遺跡群、鷹山遺跡群などにおける調査が進められてきた。一方霧ヶ峰南麓を含む一帯には従来旧石器時代を中心とする数多くの遺跡の存在が知られていたが、それらは湿地周辺部や道路沿いなど、地面の露出がある程度認められる地点で遺物が表面採集されたために発見されたものが多かった。また、付近一帯は林地・牧草地・原野が大半を占めていることから遺跡分布の実態は不明な点が多く、遺跡の有無および立地状況を把握する必要があった。折から、霧ヶ峰南麓地域一帯を覆う形で大規模なリゾート開発計画が持ち上がったこともあり、遺跡群を保護するための基本データとなる遺跡分布図の再整備が急務とされたため、市教委は昭和63年より協議・検討を重ね、文化庁・県教委の指導を受けながら試掘を伴う分布調査を行っていくことになった。しかし、当面の対象地域となる霧ヶ峰南麓は全体で数100万㎡を越える領域であるため、まず分布予備調査として、平成3年度から、任意の地点に試掘坑を設けて遺構・遺物の確認と土層堆積状況の把握を行い、遺跡立地および分布のあり方のパターンを把握することになった。試掘坑は現地踏査と地形図の読み取りをもとに設定した。平成3年度の調査では新たにジャコッパNo.3・4・5の3遺跡の存在が明らかになり、この地区周辺においてもかなりの数の遺跡の存在が予想された。平成3年度の分布予備調査については市の単独事業として行ったが、広い区域にわたり遺跡が分布することが明らかになってきた点・山間部の調査であるため予想以上に調査が難航している点などを考慮する中で、平成4年度からは国庫および県費補助事業として継続していくことになり、平成4年度国庫および県費補助事業である「市内遺跡発掘調査事業」の一部として行うため、調査団を編成して準備を行った。また、霧ヶ峰はその一部に黒耀

石露頭を有し、平成3年度の調査結果などからも、今回の調査の対象地域がこの黒耀石原産地からの石器素材搬出ルートの中で重要な位置を占めていることが予想されたため、周辺町村でも進行中であった長野県黒耀石原産地遺跡分布調査の一環としての位置付けも行われることが決定された。平成4年度の調査では新たに3か所の遺跡が確認されたが、スケジュールの変更もあり、本年度調査予定区域すべてをカバーすることができなかった。

B・C地区の北側部分についても、その地形や池のくみ遺跡群に隣接している点などから遺跡の分布が予想されていたが、この区域はダイケンホーム・大建工業所有の別荘地造成予定地であり、平成3年より急遽具体的な工事に着手することになったため、平成4年7月28日、県教委・市教委担当者等が道路造成中の現地立会を行った際、造成地内の一部に黒耀石製石器類等の散布が認められ、造成断面のローム層中からも石器が20点ほど採集されたことからここが旧石器時代の遺跡であることが判明した。そこで協議を設け、石器が表面採集された他の2地点と共に、8月3日から開始予定であった分布予備調査のスケジュールに急遽組み込むこととし、この3地点の遺物出土層位および遺構確認のための確認調査を行うことになった。これら3地点にはジャコッパラNo.6～8遺跡の名称が付けられた。

来年度以降も引き続き遺跡分布予備調査を行っていく予定であるが、これまで得られた調査結果や諸機関の指導などから、いくつかの課題も残されている。

- ・これまで確認された遺跡についても遺跡の有無の確認と基本土層についてのデータが得られたのみであり、遺跡群の分布パターンが明らかになりつつあるものの、各遺跡の具体的な性格および範囲については不明であり、今後さらに詳細な確認調査を行う必要がある。
- ・旧石器時代については、複数の文化層の存在を反映していると思われる層位的出土が見られ、これらの在り方をより明確にしていく必要がある。
- ・これまでに判明した遺跡分布パターン外における遺跡分布が不明である。

調査はまだ途中段階であり、来年度以降も上記の点などに注意しながら調査を進め、最終的に遺跡群の一定段階の位置づけを行っていきたい。

補助事業決定の経過（抄）

平成2年4月18日付2教社第25号平成2年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申磨書

同第29号文化財保護事業補助金交付申請書（県費）

平成2年7月24日付2教文第1—18号国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書

平成2年10月12日付長野県教育委員会教育長指令元教文第2—12号（県費）

2. 調査組織

ジャコッパラ遺跡群調査団（平成4年度）

- 団長 吉田 守（諏訪市教育委員会 教育長）
副団長 牛山源一郎（諏訪市教育委員会 教育次長）
調査主幹 宮坂光昭（諏訪市文化財審議委員・日本考古学協会会員）
調査員 高見俊樹・五味裕史・青木正洋（諏訪市教育委員会学芸員）
調査団員 小松とよみ・関 喜子・原 敏江・平林和子・両角南子・矢崎つな子・河内利義・
小島良一・宮坂毅・宮坂茂子・石田恒富・岩波政吉・小松保義・増沢清久・矢崎久
之・矢崎恒明・矢崎重司・矢崎市蔵・矢崎策郎・関野学（以上一般）
赤羽真由美・茅野嘉雄・太田努（以上大学生）

事務局

- 事務主幹 牛山 孝（諏訪市教育委員会 社会教育課長）
事務局長 小松勇次（諏訪市教育委員会 社会教育係長）
事務局員 高見俊樹・有賀静江・五味裕史・青木正洋（諏訪市教育委員会 社会教育係）

3. 調査日誌（抄）

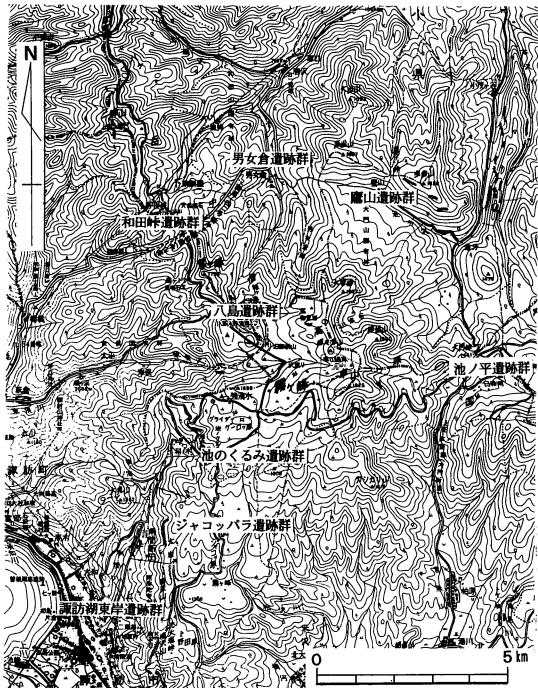
- 8月3日 C地区およびNo.8遺跡器材搬入、調査開始。KRC地区では試掘坑を6ヶ所設定して掘り下げを開始したが、各グリッドより土器片・石器類の出土をみる。No.8遺跡では道路造成断面の精査を開始し、ローム層中より数十点の石器を検出した。
- 8月7日 本日よりNo.6遺跡の確認調査開始。試掘坑を11ヶ所設定して掘り下げを行い、試掘3グリッドローム上面にて落込みを検出。KRC地区では試掘10グリッドまで掘り下げ、試掘9グリッドまで調査終了。
- 8月11日 No.6遺跡では遺構の性格と分布状況確認のため、重機による表土剥ぎを行い、新たに数基の陥し穴状遺構を検出した。KRC地区では試掘20グリッドまでを調査中。
- 8月13日～16日お盆のため休み。
- 8月17日 No.6遺跡で遺構確認作業続きを行うと共にNo.8遺跡の確認調査を再開。KRC地区試掘18グリッドで落込みを検出。陥し穴状遺構らしい。
- 8月20日 KRC地区試掘22グリッドローム層中より石器3点検出。
- 8月26日 No.6遺跡調査終了。
- 9月1日 KRC地区では本日までに50ヶ所の試掘坑を設定。タキオメーターで試掘坑の分布図作成を開始する。
- 9月3日 No.8遺跡で道路西側断面の調査開始、石器類数十点を検出。No.7遺跡に試掘グリッド設定、重機による表土剥ぎを行い、確認調査を開始。遺構検出されず。
- 9月4日 No.8遺跡道路西側で陥し穴状遺構1基を確認、掘り下げる。覆土上層から石鏃1点を検出。
- 9月8日 No.7および8遺跡本日にて調査ほぼ終了。
- 9月9日 KRC地区本日までに試掘63グリッドまで設定、各グリッド調査中。
- 9月18日 本日までに試掘74グリッドまで設定。試掘72グリッド黒色土中から縄文中期土器片数点検出したため、南東に1メートルづつ拡張する。
- 9月21日 試掘77グリッドまでの調査ほぼ終了。なお、10～11月にかけて随時深堀を行った試掘グリッドの土層サンプリングと埋め戻しを実施した。

II 位置と環境

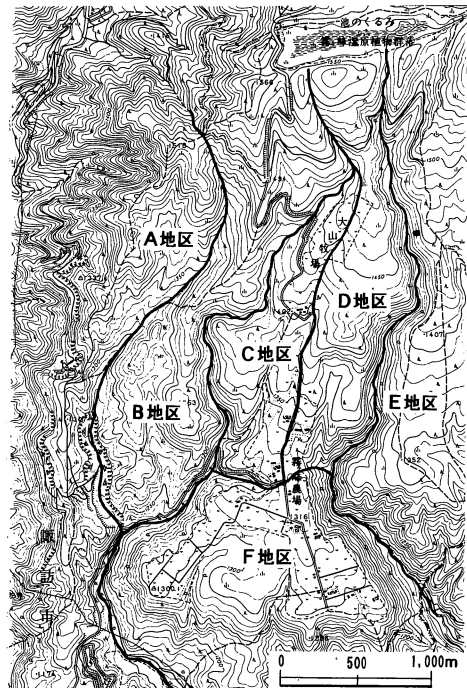
1. 遺跡の位置と環境

ジャコッバラ遺跡群は、霧ヶ峰南麓の標高約1,300~1,580mの山間部に位置する。霧ヶ峰は標高1,925mの車山を中心として広がる広大な溶岩台地群より構成される。ジャコッバラ遺跡群の北側には、国の天然記念物である踊場湿原の周縁に展開する池のくろみ遺跡群が隣接するほか、この周辺には和田峠等をはじめとする黒耀石露頭群と深い関係を有すると思われる、旧石器時代の遺跡群が濃密に分布することが知られている。さらに、過去の調査では縄文時代の陥し穴状遺構も検出され、黒耀石原産地関係遺跡群の他に狩猟関係遺跡の存在も確認されている。旧石器時代のみならず縄文時代以降の人々にとってもこの山麓はさまざまな資源の確保に利用されていたであろう。

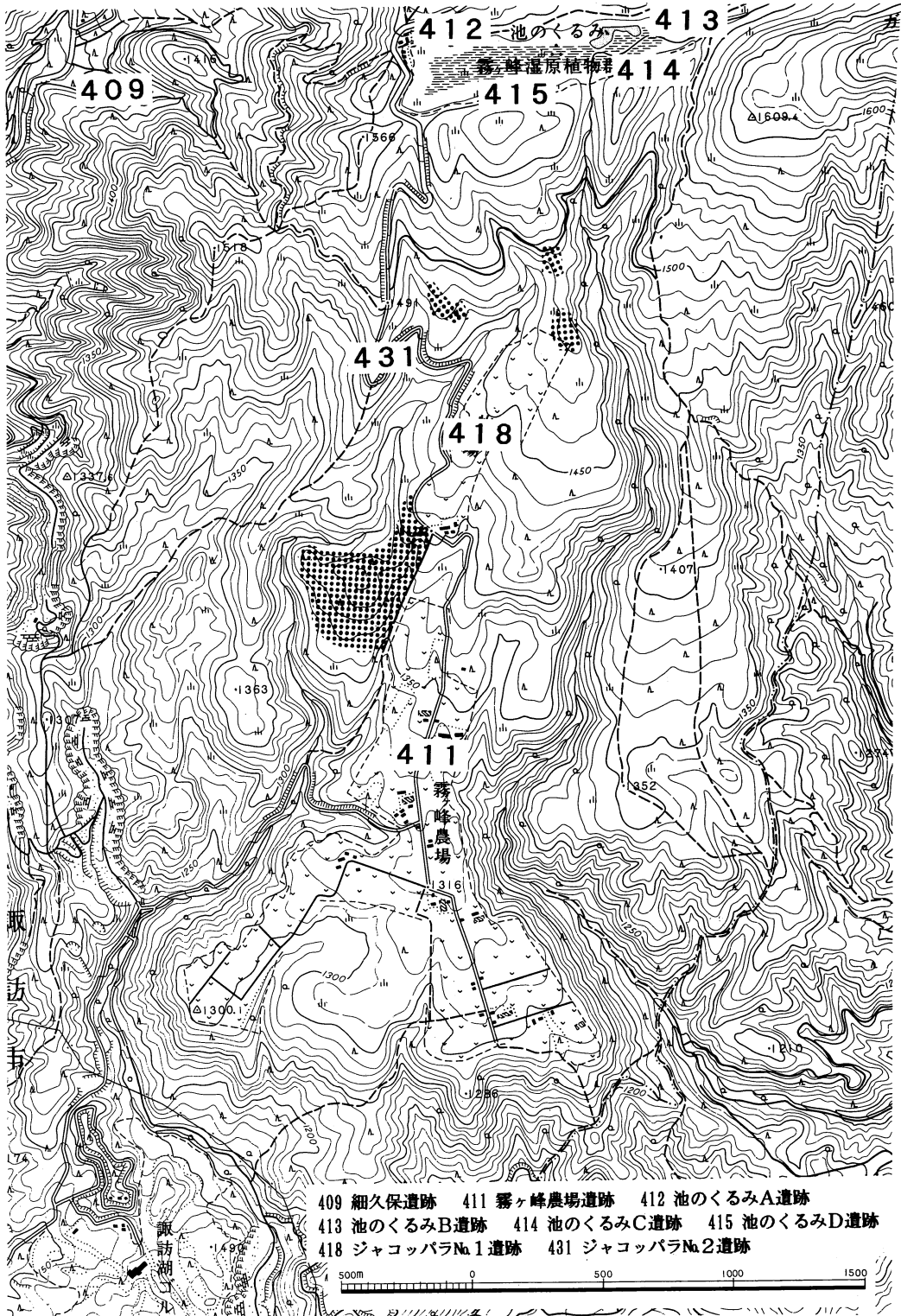
ジャコッバラ遺跡群付近の地形は、溶岩台地とそれを南北方向に区切る谷によって幾つかのまとまりに分割することが可能であり、調査にあたっては谷などを境界としてA~E地区を設定した。この区域一帯はかつて牧草地だったが、戦後カラマツなどの植林が行われたため現在は大半が林地となっている。なお、これまでに調査区内に数ヶ所の湿地が存在することが判っている。



第1図 遺跡群の位置と周辺の主要な旧石器時代遺跡群 (S=1/200,000)



第2図 霧ヶ峰南麓A~F地区の位置 (S=1/50,000)



第3図 平成4年度調査区域の位置(トーン部分)と周辺遺跡

III 過去における調査

1. 分布予備調査以前

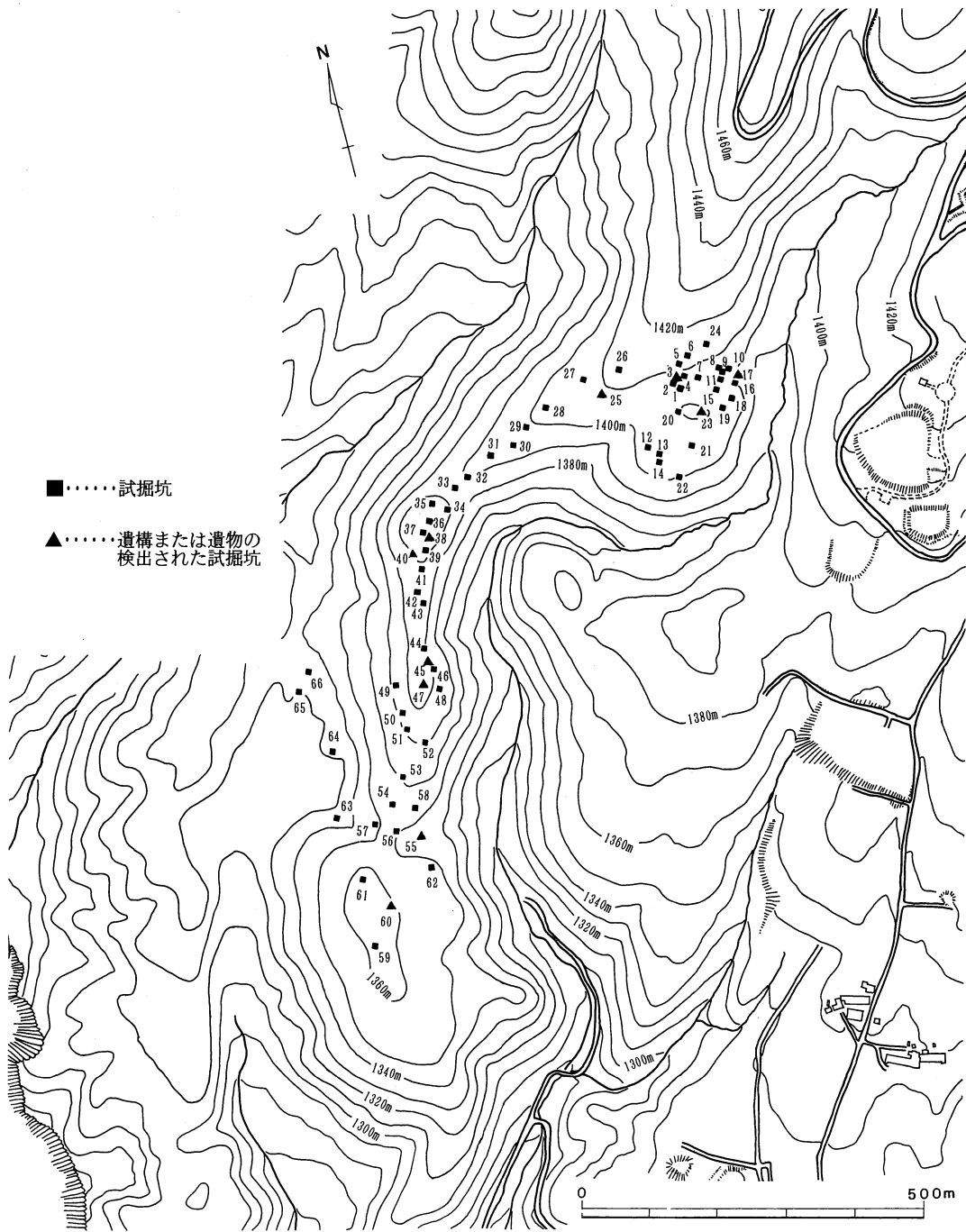
遺跡群周辺は山間部にあり、近年まで牧草地・林地・草原であったために遺跡分布のあり方が不明な点が多かった。昭和52年から行われた市内遺跡分布調査で黒耀石・特殊磨石・縄文土器片等が表面採集された地点が蛇行原・蛇行原上遺跡および霧ヶ峰農場遺跡として登録されており、旧石器～縄文時代の遺跡が存在することがわかっていたが、遺跡の内容がある程度明確になったのは昭和62～63年度にかけて行われた宗教法人の研修道場建設に先立つ緊急発掘調査後である。この調査では1区・2区から縄文時代の陥し穴状遺構が14基検出されたほか、旧石器時代の石器等が出土しているが、市内では陥し穴状遺構が確認されたのはじめての例となり、中でもこれらのうち数基から検出された炭化した植物質は、陥し穴状遺構の機能を復元する上でも貴重な資料として学界でも注目されている。この調査の結果、蛇行原・蛇行原上両遺跡は同一遺跡の範囲に含まれることが判り、あわせてジャコッパラ遺跡として再登録された。また、遺構・遺物が確認された地点の地形などから判断してこの周辺に同様の遺跡が存在することが予想された。折からこのジャコッパラ遺跡周辺で大規模な開発計画が持ち上がったためこの地区内における遺跡の所在確認が急務として必要になったこともあり、市教委では文化庁および県教育委員会の指導を受けながら平成3年度より分布予備調査を進めることになった。

2. 平成3年度遺跡分布予備調査の概要

平成3年度に行われた調査は市単独事業として行われたが、実質上現在継続されている調査と同じ性格を有するものであり、平成4年度の調査とも深く関わる内容をもつため、ここで平成3年度調査の概要を示しておきたい。

平成3年度はB地区の、主として尾根沿いを対象として66箇所の試掘坑を設定した。調査は遺跡の有無と土層の堆積状況の確認を行って遺跡群の立地パターンおよび分布状況のデータを得ることを目的とし、地形などを考慮しながら2×2m・1×2mないしは1×3mの試掘坑を任意の地点に設けて掘り下げる方法で行い、調査の結果10箇所の試掘坑から遺構・遺物が検出されている。B地区には独立丘状の地形などもあって旧石器時代の遺構（ブロック）が確認されたほか、かなり痩せた尾根上においても予想外にロームの堆積が良好であり、旧石器時代の石器類や縄文時代の陥し穴状遺構が検出されている。

調査の結果、ジャコッパラ周辺にはかなりの遺跡が集中することが判ったためこれらをジャ



※ 番号は試掘グリッドNo. (各地区毎に通し番号を付したため、例えばB地区ならば「KRBOO」とするのが正しい-KRは霧ヶ峰の略-が、この図では「KRB」を省略してある。)

第4図 平成3年度分布予備調査試掘グリッド分布図 (S=1/10,000)

コッパラ遺跡群として捉え、従来のジャコッパラ遺跡をジャコッパラNo.1遺跡、平成元年にドリル等が表面採集された地点をジャコッパラNo.2遺跡とした。平成3年度の調査では新たに数ヶ所の遺構・遺物のまとまりが捉えられている。以下に主要な試掘坑の概要を示す。

[B-3グリッド] (第9図6)

本試掘坑はジャコッパラNo.2遺跡より本沢沿いに南西に下る尾根と独立丘の間に形成された浅い谷状地形(暗部)に位置する。標高は1,408mであった。層序は1層が黒色土で40cm、2層が暗褐色土(漸移層)で20cm、3層が白黄褐色ロームで30cm、4層は3層よりやや暗いロームで20cmほど堆積しており、3層と4層がいわゆるソフトロームにあたる。5層は硬質な黄褐色ローム(ハードローム)である。

遺物は2層暗褐色土より黒曜石剥片が2点出土した。図示した6は、長さ4.0cmのややすづまりの縦長剥片である。背面構成には、同様形態の剥片が連続的に剥離された痕跡が認められる。打面には、入念な打面調整が見られる。縁辺の一部に連続的な小剥離痕跡が見られる。二次加工もしくは使用痕の一種であろう。他の1点は薄い縦長剥片で、打面側を一部欠損している。

[B-23グリッド] (第6図、第8図3~4)

本沢に沿った尾根がやや緩やかになったところに中規模の独立丘が形成されている。その独立丘の頂部平坦部、標高1,411mに本試掘坑を設定した。層序は図示したとおりであるが4層に該当する層が確認できなかった。

遺物は2層、3層より黒曜石製石器4点、水晶製石器2点の6点が出土した。出土レベルの差から複数の文化層に分離される可能性もあるが、ブロックとして把えることができよう。出土した石器は3が長さ2.3cm・幅1.0cmの水晶製の石器で、薄い縦長剥片を素材とし、上下を折断して折断面の一部(図おもて面の右側縁)に二次的調整加工を加えたものである。全体形状はいわゆる切出し形に近く、一種のナイフ形石器とも考えられる。水晶製の石器としては、他に小剥片の破片1点がある。4は黒曜石製の分厚い横長剥片で、長さ3.5cm・幅5.6cm・厚さ1.5cmである。主要剥離面はやや通常でない面構成となっているが、これは節理面やこの剥片の剥離に先立つ失敗打撃によるひび割れの影響によるものと考えられる。打面は広い単剥離打面であり、パンチ痕が2ヶ所に残っている。黒曜石製の石器としては、他に縦長剥片の破損品1点と石核2点があり石核はいずれも残骸の状況に近いものであるが、残存する剥離面構成に見る限り両者ともに横長剥片を連続的に剥離した痕跡が認められる。内1点は1面の作業面に対し上下両端からの剥離が見られる。他の1点は少なくとも3回の打面転移を行ないながら、いずれの打面からも横長剥片を1回以上剥離している。数少ない出土点数の中ではあるが、横長剥片を連続的に剥離するような技術の存在を反映する剥片・石核が複数点認められることは注目に値する。

[B-25グリッド] (第8図2)

本沢右岸の尾根は独立丘わきで、ややたるみ裾野状に広がる平坦部を形成している。その平坦部のやや西より出根筋上に本試掘坑は位置する。標高は1,409mであった。層序は1層黒色土が50cmと厚く、2層暗褐色土20cm、3層白黄褐色土が40cm、4層がなく5層は黒褐色の火山砂のブロックを多量に含む黄褐色ハードローム層となる。

遺物は2層より棒状形態の黒耀石原石破片1点と、3層下部より黒耀石製石器1点(2)が出土した。2は現在長3.7cm・幅3.1cmとやや幅広な剥片で末端をわずかに欠損する。打面は自然面でその幅は剥片の幅に対して狭小である。背面を構成する剥離面は多方向からの剥離の痕跡を残しており、求心的な連続剥離が行われた可能性がある。

[B-38グリッド] (第9図5)

本試掘坑は、本沢右岸の尾根が徐々に細くなりながら下っていく途中、標高1,395m付近に形成されたやや広めの平坦地に位置する。この平坦地には計5ヶ所の試掘坑を設定したが、遺物の出土が見られたのは本試掘坑のみであった。層序は1層黒色土が40cm、2層は10cmと薄く、3層はソフトロームで35cm、4層がなく5層ハードロームとなる。ただし5層上部がやや軟質であるため、4層として把握できるかもしれない。

遺物はこの5層(ハードローム)の上部と中程から黒耀石製石器が4点出土した。5は現在長6.1cm・幅3.5cmの縦長剥片で、上半を欠損する。背面は全面が自然面である。他に長さ2.9cmの縦長剥片と小剥片2点があり、小剥片の内の1点には折断や細かい二次調整が認められる。

[B-40グリッド] (第5図、第9図7)

38グリッドが位置する平坦部からさらに尾根が南方向に下るが、その平坦部の西側の落ち始め(本沢側と反対方向)のかなり傾斜の厳しい斜面に位置する本試掘坑では調査中に西壁断面にて黒色土の落ち込みを確認したため、拡張した結果、陥し穴と考えられる小堅穴を検出した。なお、標高は1,390mであった。

小堅穴(陥し穴)は確認面で長さ約2.8m、幅0.8mの長楕円形で、長軸方向は北から東へ60°で、斜面の傾斜に沿って構築されている。底部は長さ約2.4m、幅約0.5mとやや幅狭になっており、直径5cm~10cm、深さ10cm~20cmの対を成すと思われる小Pitが3本づつ計6本検出された。確認面から底面までの深さは約0.5mとやや浅く、断面形はやや上部にむかって開く台形状をしており、覆土の堆積状況は自然の堆積状況を示す。以上の状況から遺構の所属時期は縄文時代と思われる。

遺物は遺構外の黒色土から黒耀石剥片が1点出土している。7は長さ1.2cm・幅2.7cmの、上面観が、くの字状となる薄い横長剥片である。背面は本剥片と同様の剥離痕と自然面により構成されている。打面は線状打面として残っているにすぎない。

[B-45グリッド] (第8図1, 第10図11)

本試掘坑は本沢右岸の尾根が貧弱になりながら馬の背状の細い台地(頂部)を形成する標高1,380m付近に設定された。土層堆積状況は他の試掘坑と変らないが、風倒木痕と思われるロームマウンドが確認され、その覆土中より黒耀石製のスクレイパーと縄文土器片が出土した。

スクレイパー(1)は平面形がほぼ四角形で、刃部を下においた場合の長さ2.2cm、幅は2.5cmである。おもて面は刃部加工以外は概ね自然面で占められ、うら面はほとんど二次加工の大形剝離に覆われている。片面が自然面となるような剝片もしくは石核を素材とし、三辺を折断によって整形したうえで、残る一辺に連続的な二次加工を加えて外湾する分厚い刃部を作り出したものである。

縄文土器(11)は押型文土器の部小破片で、縦長の山形文が菱形状に施文されている。胎土には長石粒や雲母粒が含まれ、焼成は良好である。

[B-47グリッド] (第10図12)

45グリッドと同じ台地上の南側突端付近に位置する。層序は1層が40cm~50cmと厚く2層は20cm、3層20cmで、4層が10cmと薄く部分的に欠如しており、5層ハードロームとなる。

遺物は黒色土から黒耀石製の小剝片が2点と土器片が1点出土している。12は押型文土器の口縁部破片でやや外反する器形に部分的に楕円文が施文されている。やや薄手の土器で、色調は黒褐色を呈し、胎土には長石粒と雲母粒を含む。焼成はやや不良である。

[B-55グリッド] (第9図8)

ジャコッパラNo.2遺跡から連綿とつながる尾根筋が一応の終結をみて独立地形の台地にぶつかる、いわゆる鞍部の本沢側に下る斜面に本試掘坑は位置する。標高は1,347mであった。谷地形のため土層堆積状況は他の試掘坑とは若干異なり、1層黒色土が80cmと非常に厚く、2層漸移層が20cm、3層は灰黄褐色土(ソフトローム)で1mと厚く、人頭大の礫(流れ込みか)を多量に含むようになる。また全体的に水のついたような土質で非常に粘性が強くなっている。

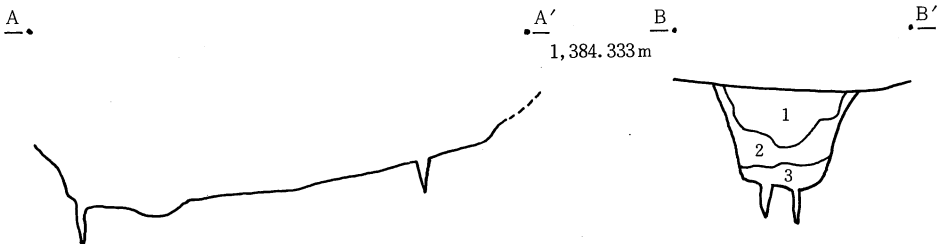
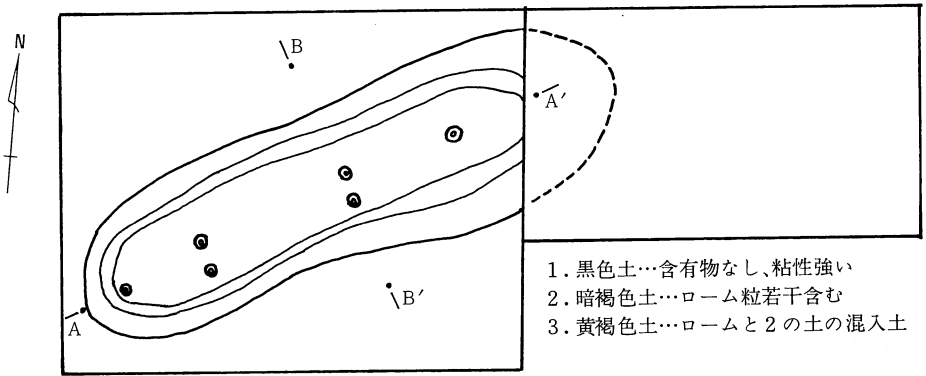
遺物は黒耀石製の剝片1点と多数の微小原石塊が黒色土下部から漸移層、ソフトローム上部に集中して出土している。図示した8が剝片である。長さ3.6cm・幅2.6cmの腹面側に内湾する剝片で、側辺の一部を欠損する。背面には自然面と上方・右方からの剝離面が見られ、また打面付近には細かい調整剝離もある。打面は単剝離打面だが、打点付近は剝離時に破碎しているとみられる。

[B-60グリッド] (第9図9~10)

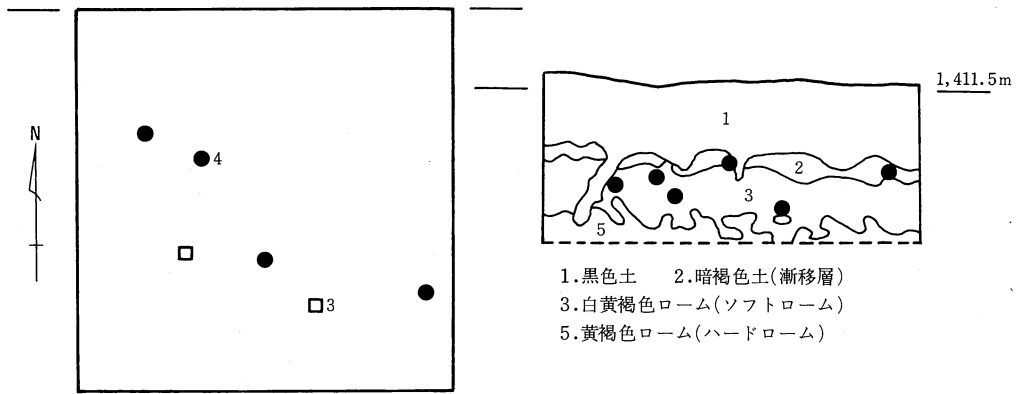
本試掘坑はB地区南方において、本沢と湿地帯に囲まれる状況で形成された広大な独立台地の頂上、平坦部やや東寄りに位置する。標高は1,360mであった。層序は図示したとおりであるが、

4層は他の試掘坑に比べてやや硬く赤みがかったソフトロームで、5層は暗褐色の火山砂ブロックを多量に含むハードロームである。

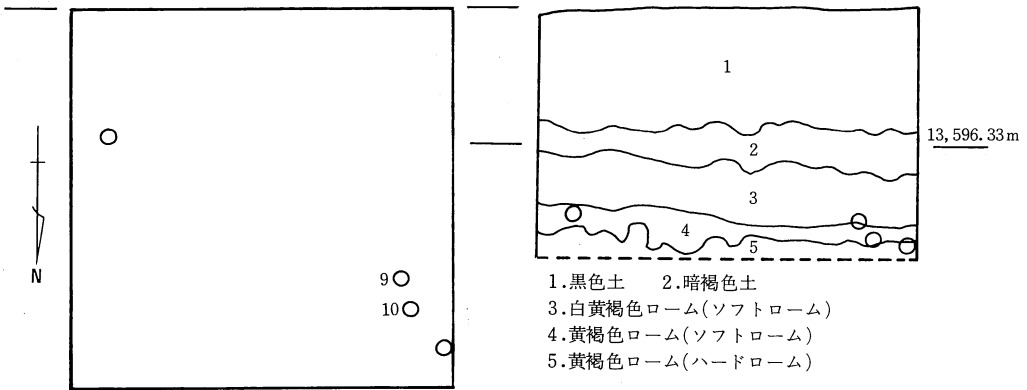
遺物は3層ソフトローム下部から、4層、5層ハードローム上部に食い込む状況で黒耀石製の剥片3点と石核1点の計4点が出土しており、ブロックとして把えることができよう。9は3層下部から出土した長さ7.0cm・幅4.5cm・厚さ1.3cmのやや大形の縦長剥片である。背面に残る剥離面の内2面は剥片と同一方向のものだが、他は別方向からの剥離であり、底面には自然面も残存している。打面は単剥離打面である。右側辺と末端にわずかな二次加工と刃こぼれの微細剥離痕が認められる。10は4層下部から出土した長さ4.5cm・幅5.4cm・厚さ2.5cmの石核で、一部に自然面を残している。この石核は、母材となった原石もしくは元の石核に対し、直交方向の2回の分割を加えることによって得られている。この2回の分割はいずれも台石を利用した両極打法により行われているとみられる。石核からは、2つの分割面を打面として、それぞれ少なくとも1回は縦長剥片が剥離されている。打面調整や作業面に対する調整は認められない。2回目の分割及びその後の剥片剥離に際してはパンチが使用されており、それぞれの打面にはこれらを含む複数のパンチ痕が明瞭に残っている。図示した遺物の他に4層から小剥片が1点、5層上部から幅広の楕円形状を呈する剥片1点が出土している。



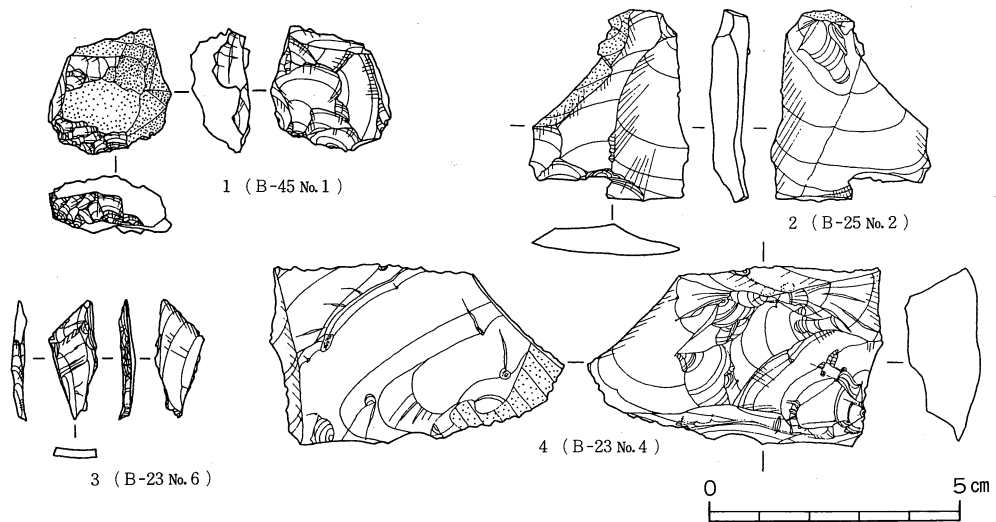
第5図 B-40グリッド陥し穴状遺構 (S=1/40)



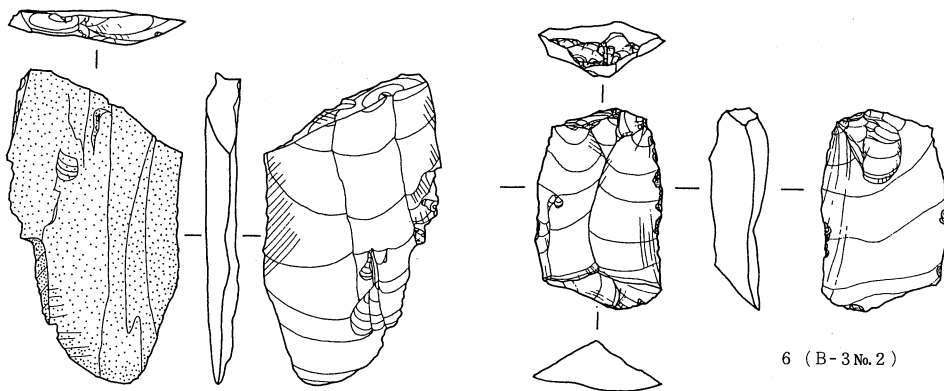
第 6 図 B-23グリッド平面・セクション図 (S=1/40)



第 7 図 B-60グリッド平面・セクション図 (S=1/40)

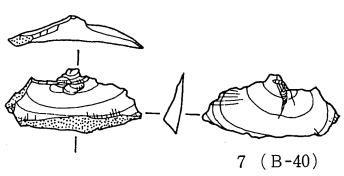


第 8 図 B 地区試掘グリッド出土遺物 その 1 (S=2/3)

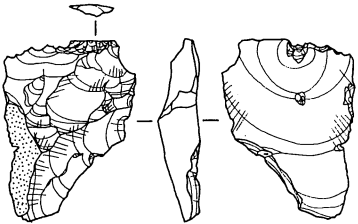


5 (B-38No.1)

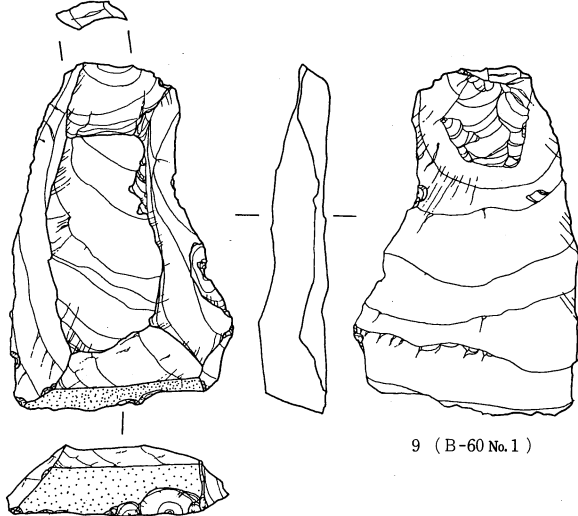
6 (B-3No.2)



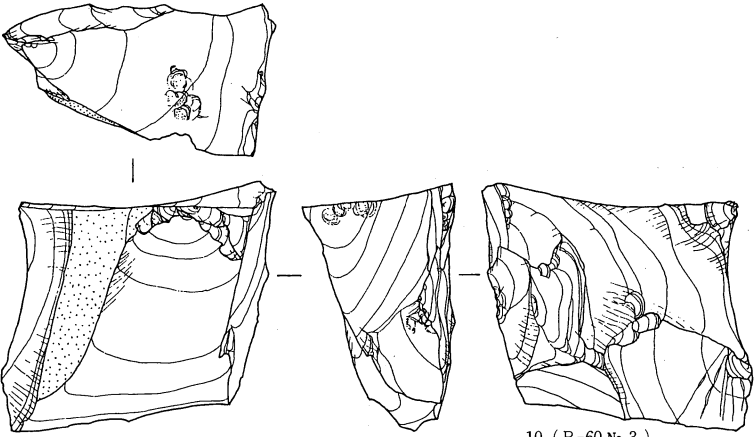
7 (B-40)



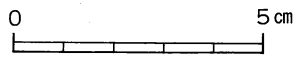
8 (B-55No.36)



9 (B-60No.1)



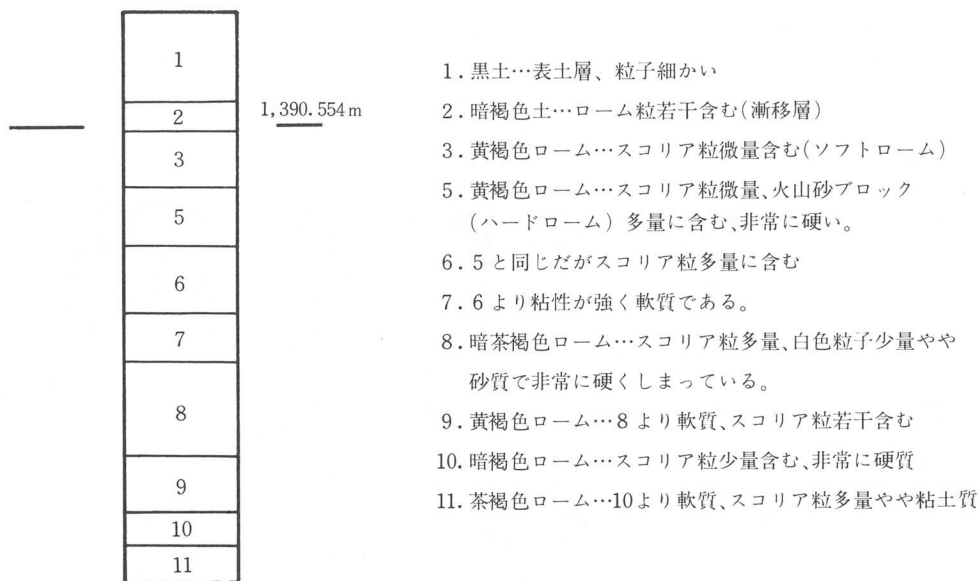
10 (B-60No.3)



第9図 B地区試掘グリッド出土遺物 その2 (S=2/3)



第10図 B地区試掘グリッド出土遺物 その3 (土器) (S=2/3)



第11図 B-37グリッド北壁土層柱状図 (S=1/40)

以上が平成3年度B地区の各試掘坑の概要である。遺物が出土した試掘坑を中心に記述したが対象地域が広大なわりに各試掘坑とも土層堆積状況などはかなり似通った状況を示しており、予想以上に良好なロームの堆積状況と複数の時代における文化層を確認することができた。遺物としては黒曜石製の石器および剥片が22点、水晶製の石器・剥片が2点、土器片が2点と調査できた面積から考えても多大な成果が挙げられたものと考えられる。

以上の結果から平成3年度の調査では新たに3ヶ所の遺跡が発見され、ジャコッパラ遺跡群に加えることになった。B-3・23グリッドの設定された独立丘や鞍部を中心とした広大なジャコッパラNo.3遺跡、B-38・40・45・47グリッドの馬の背状の尾根づたいのNo.4遺跡、B-60グリッドのある独立台地を中心としたNo.5遺跡の3遺跡である。データ的にはまだまだ小面積のデータであるが逆に予想以上の内容の遺跡の存在を感じさせる資料であろう。今回の遺跡のあり方は、八島遺跡群や池のくすみ遺跡群等の湿地の周辺における遺跡のあり方と比較検討を考えさせる貴重な資料であるといえよう。

IV 平成4年度遺跡分布予備調査の概要

1. 調査区域の位置と基本層序

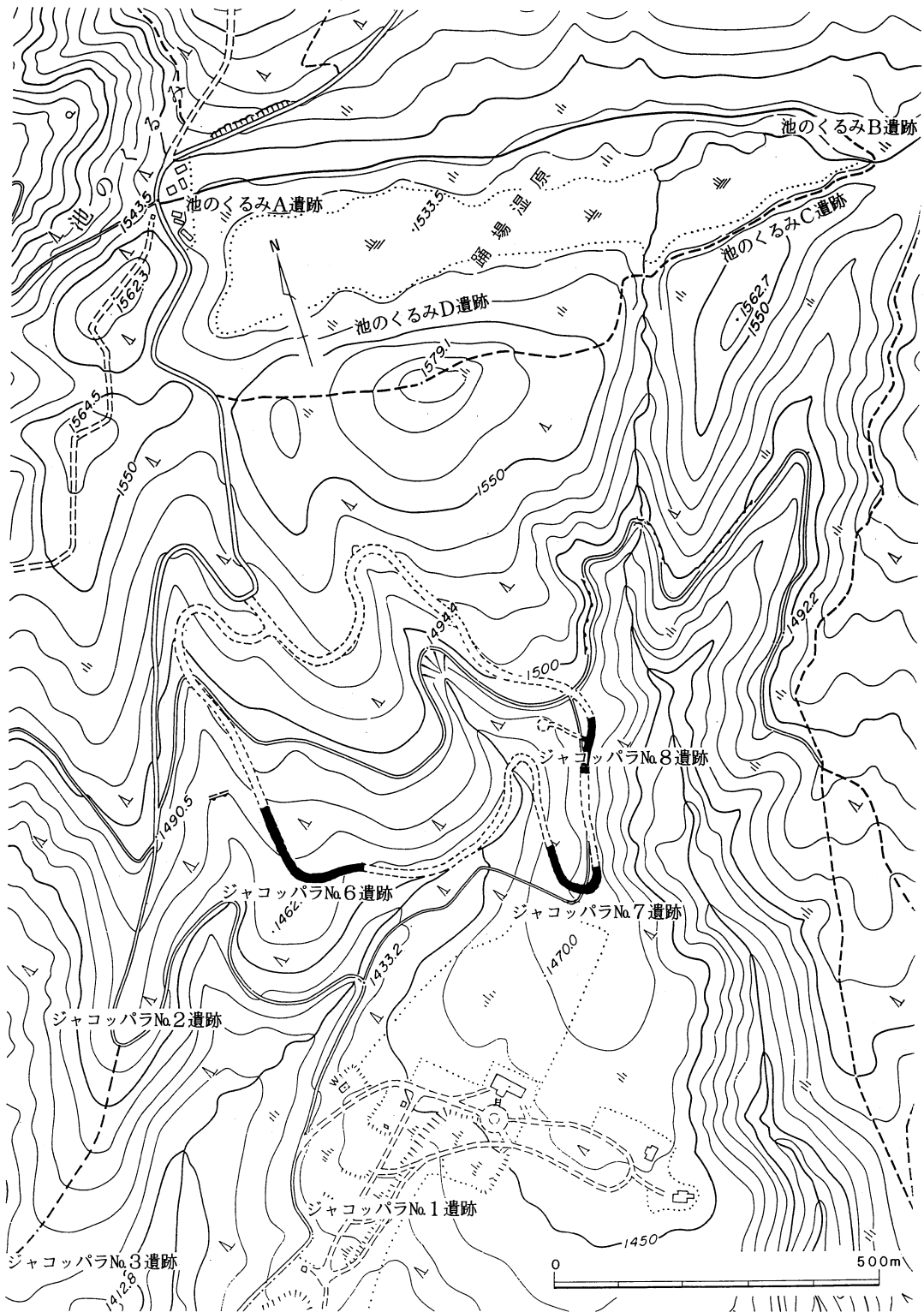
平成4年度の調査は、C地区南側尾根部分（ジャコッバラNo.1遺跡の南側）と、工事中に立会で発見されたジャコッバラNo.6～8遺跡付近を行った。C地区はジャコッバラNo.1遺跡の位置する尾根で、今年度の調査区域は同遺跡と地形的に連続しているが、南半部分は独立丘状の地形となっている。また、この尾根の西側には、やや比高差があるものの沢があって横河川が流れている。No.6遺跡はB地区の東端付近に位置する。No.7・8遺跡はNo.1遺跡と同じ尾根筋にある（この尾根はNo.1遺跡付近で2筋に分かれているため、No.7・8遺跡はD地区にあたる）。C区の一部とNo.6遺跡の一部が谷状の地形となっているが、基本的には地形図の読み取りと踏査時の状況をもとに尾根上（台地上）または斜面上に試掘坑を設定した。試掘坑の規模は2×2mを基本に地形や状況に応じて1×2ないしは1×3mも随時設けた（1×3mの試掘坑は主として陥し穴状遺構の検出を目的に設定した）。また、遺構等が検出された試掘坑では必要に応じ拡張も行っている。

2. ジャコッバラNo.6遺跡（第12～17図）

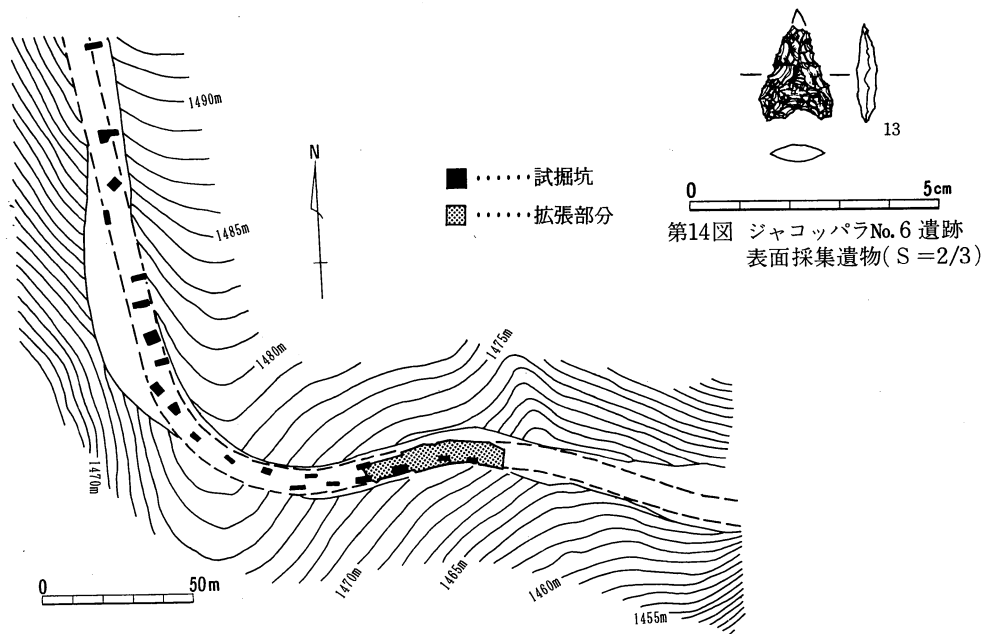
ジャコッバラNo.6遺跡は標高約1,480m付近の南北に延びる緩やかな広い尾根筋に存在する。平成4年8月の工事立会で黒耀石製石鏃と剥片が表面採集されたため遺跡の存在が明らかになり、遺跡の時代・性格等を確認するために試掘を伴う分布調査を行った結果、6基の陥し穴状遺構が検出された。この地点では尾根を2筋に分けるように南北方向に小支谷が入り込んでおり、この谷の西側のやや緩やかな斜面部分で遺構が検出されている。本遺跡における陥し穴状遺構群の立地は、ジャコッバラNo.1遺跡2区での遺構群のあり方と共通する。

調査は、まず試掘坑を十数箇所設定し、バックホーで表土（黒色土）をローム上面まで掘り下げた後、ジョレンがけによる遺構確認作業を行った（一部の試掘坑は土層堆積状況および旧石器時代の遺構確認のためにいわゆるハードローム上面まで掘り下げを行ったが、遺構遺物ともに未検出であった）。その結果楕円形の落込みが1基検出されたので、落ち込みの性格および分布状況把握のためにさらに周囲の表土剥ぎを行い、縄文時代の陥し穴状遺構6基といわゆるロームマウンド1基が確認された。

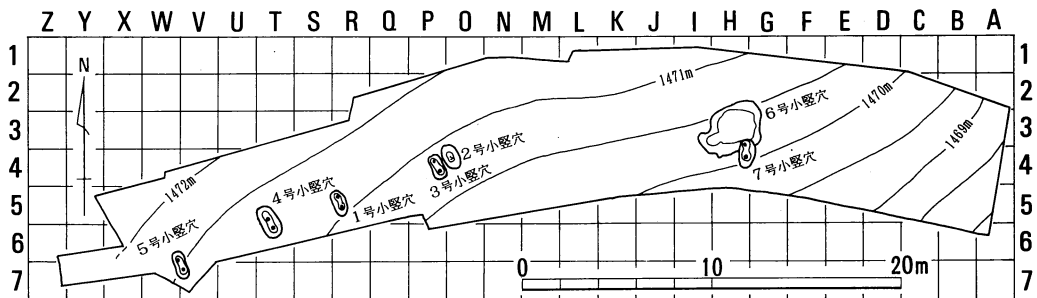
土層堆積は良好で、厚さ数10cmの黒色土下にはローム土の堆積が認められ、ローム層は上面付近のいわゆるソフトロームとその下層のハードロームに分層することができる。



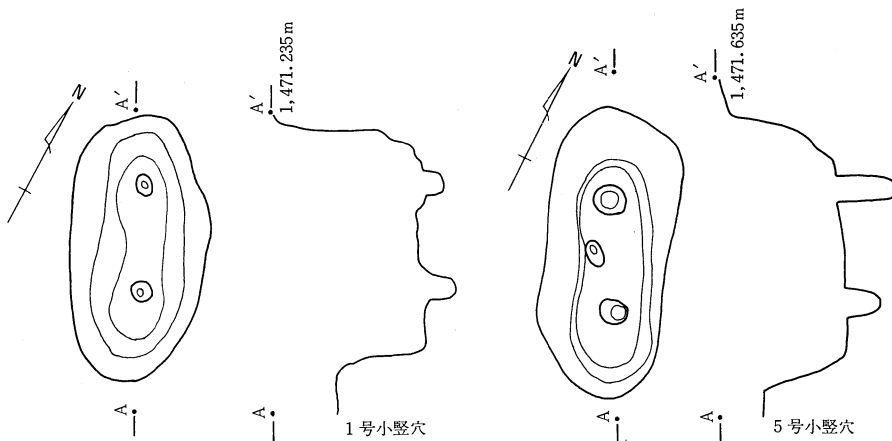
第12図 ジャコッバラNo.6～8遺跡の位置 (S=1/10,000)



第13図 ジャコッパNo.6 遺跡平成4年度調査区の位置 (S=1/2,500)



第15図 ジャコッパNo.6 遺跡遺構分布図 (S=1/400)



第16図 ジャコッパNo.6 遺跡陥し穴状遺構 その1 (S=1/40)

小竪穴7基のうち6号小竪穴はロームマウンドで、7号小竪穴を切っている。長径が約3.7m、短径が約2.4mであり、平面規模は大きい。いわゆる風倒木痕であろう。

6基の陥し穴状遺構は、それぞれ長楕円形を呈し底面に2基ないしは3基の小ピットを有するもの(1・3～5・7号小竪穴)と楕円形を呈し底部中央に数基の小ピットを有するもの(2号小竪穴)に形態的分類が可能であった。底面に2・3基の小ピットを有するものの中では4号小竪穴がもっとも規模が大きく、検出面で長径約1.8m、短径約0.9mを測る。1・3～5・7号小竪穴は形態的に類似していること、主軸方向を谷側に向けて一列に配置されていることなどから、ほぼ同じ時期に構築されたものであろう。2号小竪穴は他の陥し穴状遺構とは形態が異なり、玉子形に近い楕円形を呈する。また、底部に認められる4基の小ピットは直径3cmほどの細いもので、他の陥し穴状遺構の小ピットが杭状のものを立てるために予め掘られたと考えられるのに対し、2号小竪穴の小ピットは小ピットとほぼ同じ直径の棒を直接杭底に打ち込んだ結果できた穴であると考えられる。

陥し穴状遺構覆土は基本的に最下層に黒色土混じりのローム土が薄く堆積しており、その上にローム土を主体とする暗黄褐色土が堆積し、さらに覆土上半は周囲からの流れ込みと考えられる黒色土で埋没している。

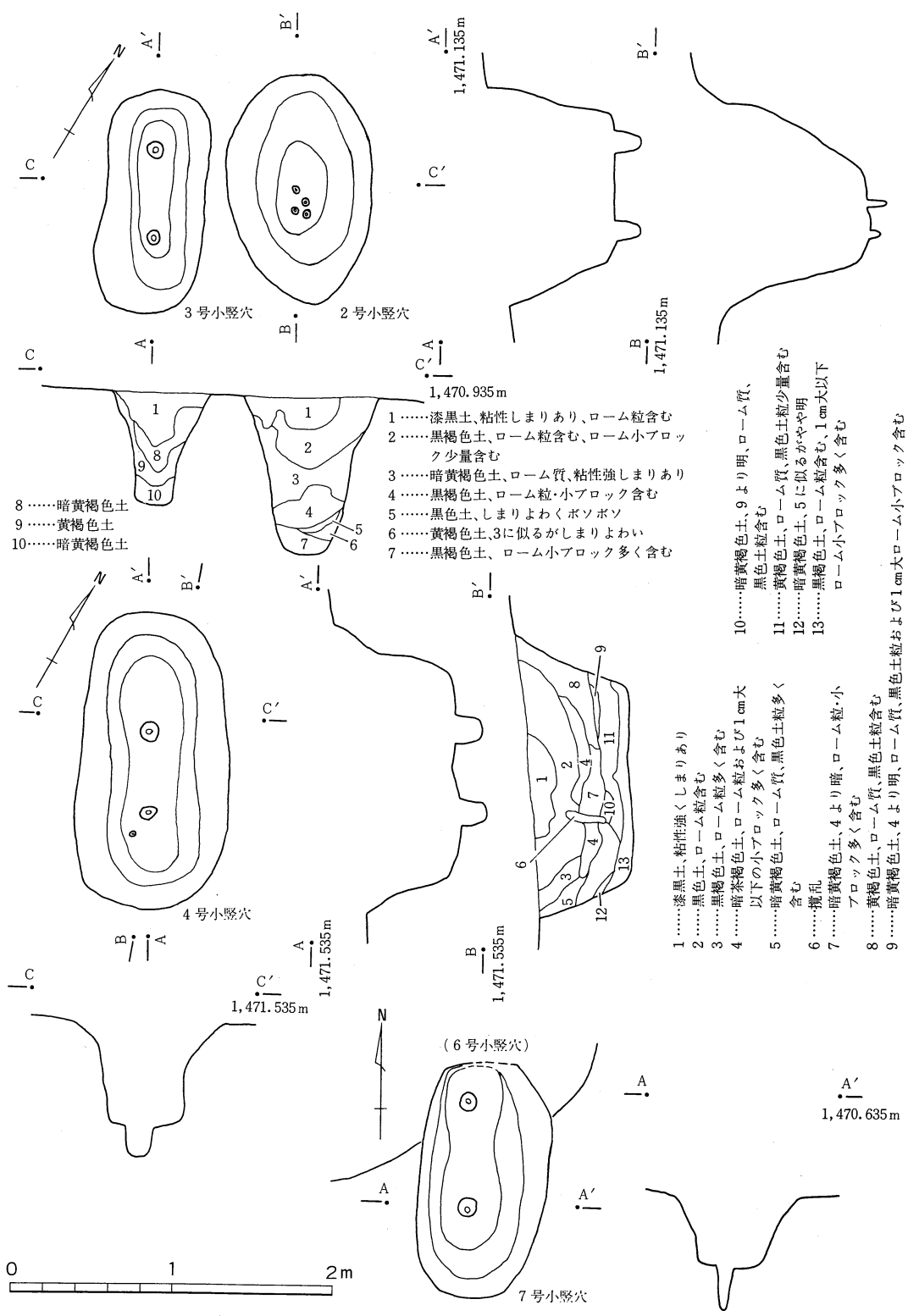
遺物は表面採集による石器類2点以外に検出されていない。11は石鏃で、先端部を欠損する。このほかに黒耀石の剥片1点が採集されている。

今回の調査地点は谷部を含んでいることもあり、本遺跡が縄文時代の狩猟場の一部であることが判明したが、今回の調査地点の北側は広く緩やかな南向き斜面に、また、南側は台地状に張り出した平坦地になっていることから、これらの地点では旧石器時代の遺構の存在も予想される。今後周辺部の調査や開発事業にあたっては十分な注意が必要であろう。

3. ジャコッパラNo.7 遺跡 (第18図)

ジャコッパラNo.7 遺跡はNo.1 遺跡とNo.8 遺跡の中間に位置する。ちょうどNo.8 遺跡付近のやや狭い尾根筋からNo.1 遺跡の位置する広い斜面への変換点にあたり、遺跡立地としては良好であると予想されたため、任意の地点に試掘坑を設定して重機による掘り下げを行ったが遺構は検出されなかった。土層堆積はおおむね良好だが、過去に牧草地の一部であったためかローム土が露出している箇所があるほか、ソフトローム上半部分が流失した上に黒色土の堆積が認められる箇所もあり、必ずしも均一ではない。

No.7 遺跡はNo.1 遺跡とNo.8 遺跡に隣接するが、両遺跡との関係が不明な点も多く、遺跡範囲も含めて今後の検討が必要であろう。遺物は表面採集品の黒耀石製石核と小原石各1点のみであり、所属時期は不明である。



8暗黄褐色土
 9黄褐色土
 10暗黄褐色土

1漆黒土、粘性しまりあり、ローム粒含む
 2黒褐色土、ローム粒含む、ローム小ブロック少量含む
 3暗黄褐色土、ローム質、粘性強しまりあり
 4黒褐色土、ローム粒・小ブロック含む
 5黒褐色土、しまりよわくボソボソ
 6黄褐色土、3に似るがしまりよわい
 7黒褐色土、ローム小ブロック多く含む

10暗黄褐色土、9より明、ローム質、黒色土粒含む
 11黄褐色土、ローム質、黒色土粒少量含む
 12暗黄褐色土、5に似るがやや明
 13黒褐色土、ローム粒含む、1cm大以下ローム小ブロック多く含む

1漆黒土、粘性強くしまりあり
 2黒褐色土、ローム粒含む
 3黒褐色土、ローム粒多く含む
 4暗茶褐色土、ローム粒および1cm大以下の小ブロック多く含む
 5暗黄褐色土、ローム質、黒色土粒多く含む
 6攪乱
 7暗黄褐色土、4より暗、ローム粒・小ブロック多く含む
 8黄褐色土、ローム質、黒色土粒含む
 9暗黄褐色土、4より明、ローム質、黒色土粒および1cm大ローム小ブロック含む

第17図 ジャコッパラNo.6 遺跡陥し穴状遺構 その2 (S=1/40)

4. ジャコッパラNo. 8 遺跡 (第18～30図)

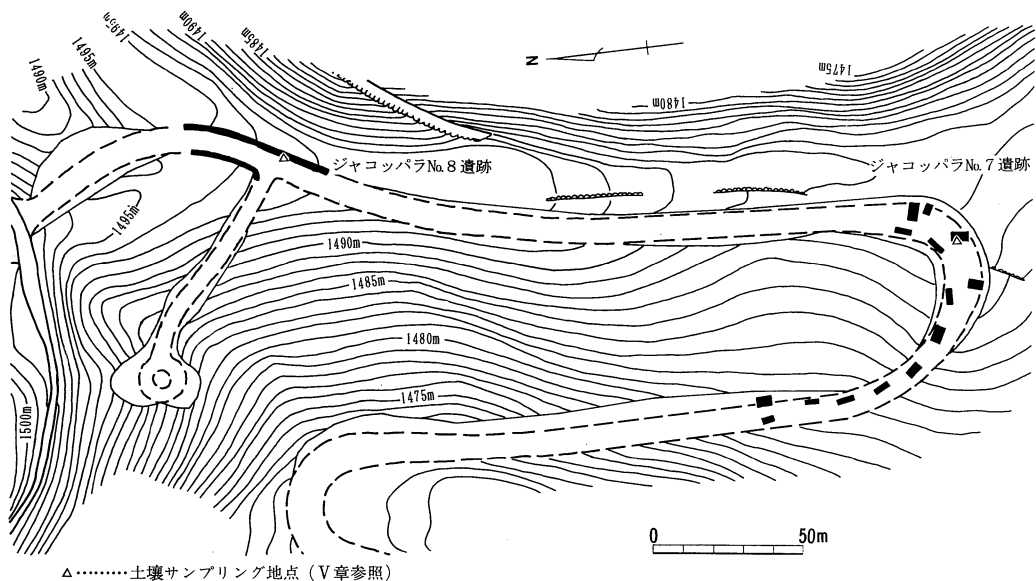
ジャコッパラNo. 8 遺跡はNo. 7 遺跡の北側に隣接する。尾根筋が最も括れ、なおかつ平坦となった地点にあたる。7月31日の工事立会時、道路造成部分のローム層断面にかなりの数の黒曜石製石器類が認められたため遺跡の所在が明かになった。事業者との協議の結果、市教委では遺物分布範囲と出土層序確認のためにこの断面部分の調査を行うこととした。

道路造成断面は斜めにカッティングされていたが、側溝を設置するためさらに垂直にカッティングを行うということであったので、この削平予定部分について手堀りによる遺物・遺構の検出を試み、記録を行った。ごく限られた範囲内での調査ではあったが遺物の出土点数は多く、石器類約390点に及ぶ。基本土層は、黒色土下に漸移層・ローム層と一般的ではあるが、ローム層以下については他遺跡と確実に対比し得るか明かでない。しかし、部分的に対比される土層も検出されているようである (V章参照)。

(1) 遺構と遺物の出土状況 (第19図～第24図)

今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構 1 基及び旧石器時代の石器類多数などが検出された。石器類は I 層 (表土) ～いわゆるハードローム上層部分で検出され、数ヶ所の集中部分が認められる。遺物集中部分には位置関係及び出土層位から 4 つのブロックが設定された。

道路敷東側では 2 箇所遺物集中が検出された。1 ブロックは今回検出された 4 箇所の遺物集中のうちで遺物の点数が最も多いブロックである。ブロックの北側限界は明確だが、南側に向けては徐々に散漫になりながらも遺物が連続して検出されており、限界がはっきりとしない。



第 18 図 ジャコッパラNo. 7 及びNo. 8 遺跡平成 4 年度調査区の位置 (S=1/2, 500)

「線」的な調査のためブロック全体の面的拡がりや把握しかねるが、あるいは別のブロックの拡がりとの関係も考慮すべきかもしれない。遺物の最も集中している辺りからハンマーストーン・石核等が検出されている。ブロック中の遺物検出レベルにはかなり上下幅があり、出土層位もⅡ～Ⅴ層に及ぶが、垂直分布の中心はⅢ層下半～Ⅳ層上面付近におけそうである。

2ブロックは1ブロックの北側で検出された。遺物の検出層位は1ブロック同様Ⅱ～Ⅴ層であり、垂直分布の中心もⅢ層下半～Ⅳ層上面付近である。

西壁部分では、表土（Ⅰ層）から漸移層（Ⅱ層）にかけての遺物集中箇所が1箇所認められた。遺物はやはり黒耀石製であり、大半が小剥片・破片で1・2ブロックに比べて遺物の検出密度が高い。出土層位および石器群のあり方などから、1・2ブロックとは時間的な差がかなりあるものと考えられる。後述の3ブロックと平面的に重複しており、3ブロックと本遺物集中を区別するため、本遺物集中を「上層ブロック」と呼ぶことにした。

西壁でⅢ層～Ⅳ層において検出された遺物群を3ブロックとして扱った（但し、上層ブロックと平面的に重複していない部分の検出遺物については、Ⅱ層出土でも3ブロックとして扱っている。）。遺物分布は他のブロックに比べかなり散漫だが、ブロック自体が本来このような遺物分布を示すのか、たまたまブロックの周縁部に当たったために見かけ上遺物分布が散漫になっているのかは不明である。出土層位は1・2ブロックとほぼ同じであると考えられるため、これらのブロックと本ブロックが何らかの有機的関係を有している可能性が高い。

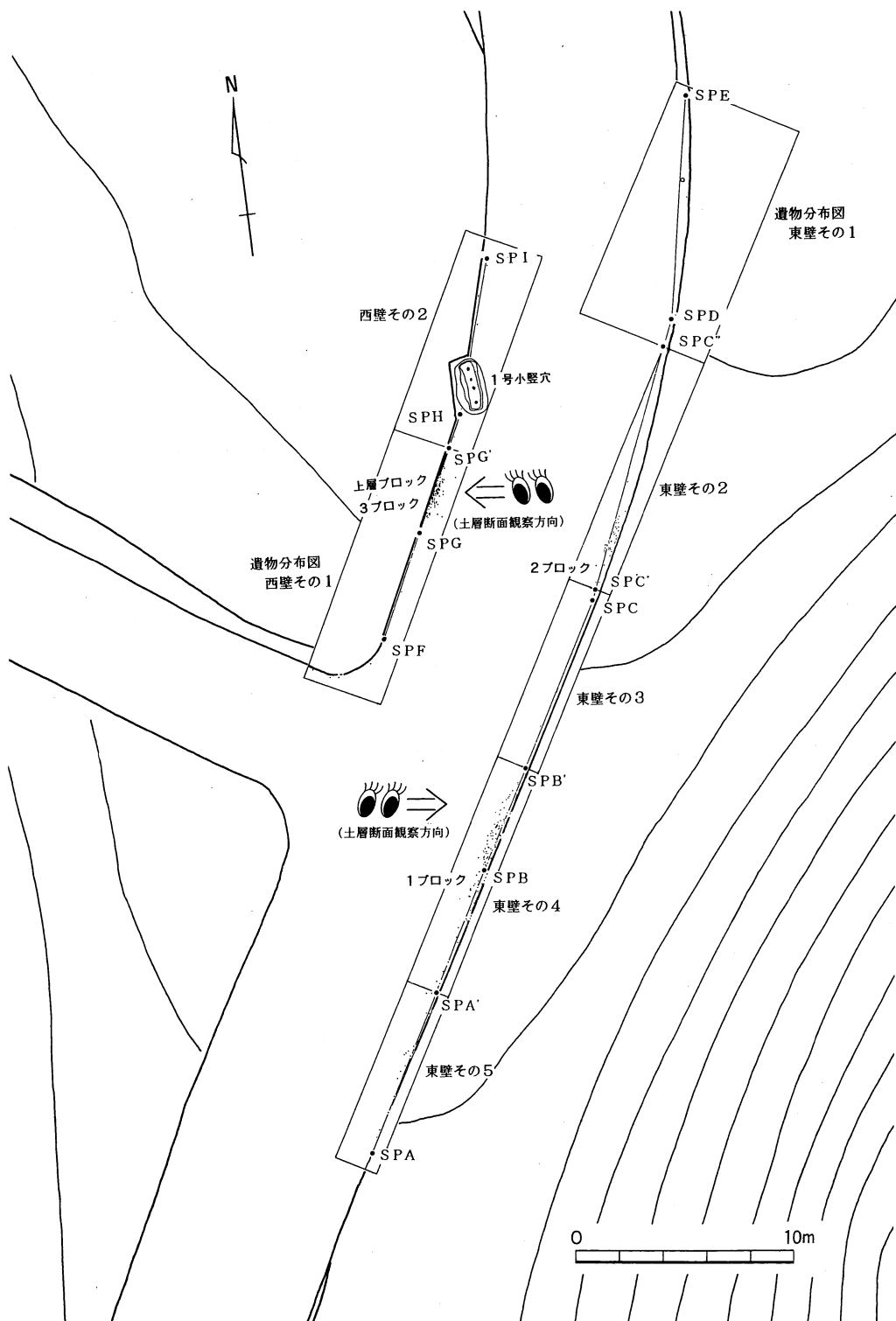
なお、これらの出土遺物の他に工事排土中などから80点近い遺物が採集されている。今回の断面発掘調査による遺物検出状況などから、本遺跡はジャコッパラ遺跡群における旧石器時代の主要遺跡の一つであることが窺われる。遺物道路敷部分については道路掘削の為、既に遺構のほとんどが破壊されたと思われるが、道路敷の両側部分は良好に残存しているものとみられ、今後の開発計画等にあたり注意が必要である。

他に、縄文時代の陥し穴状遺構が1基検出されており（1号小竪穴）、覆土の中位から石鏃1点が出土している点が注目される。

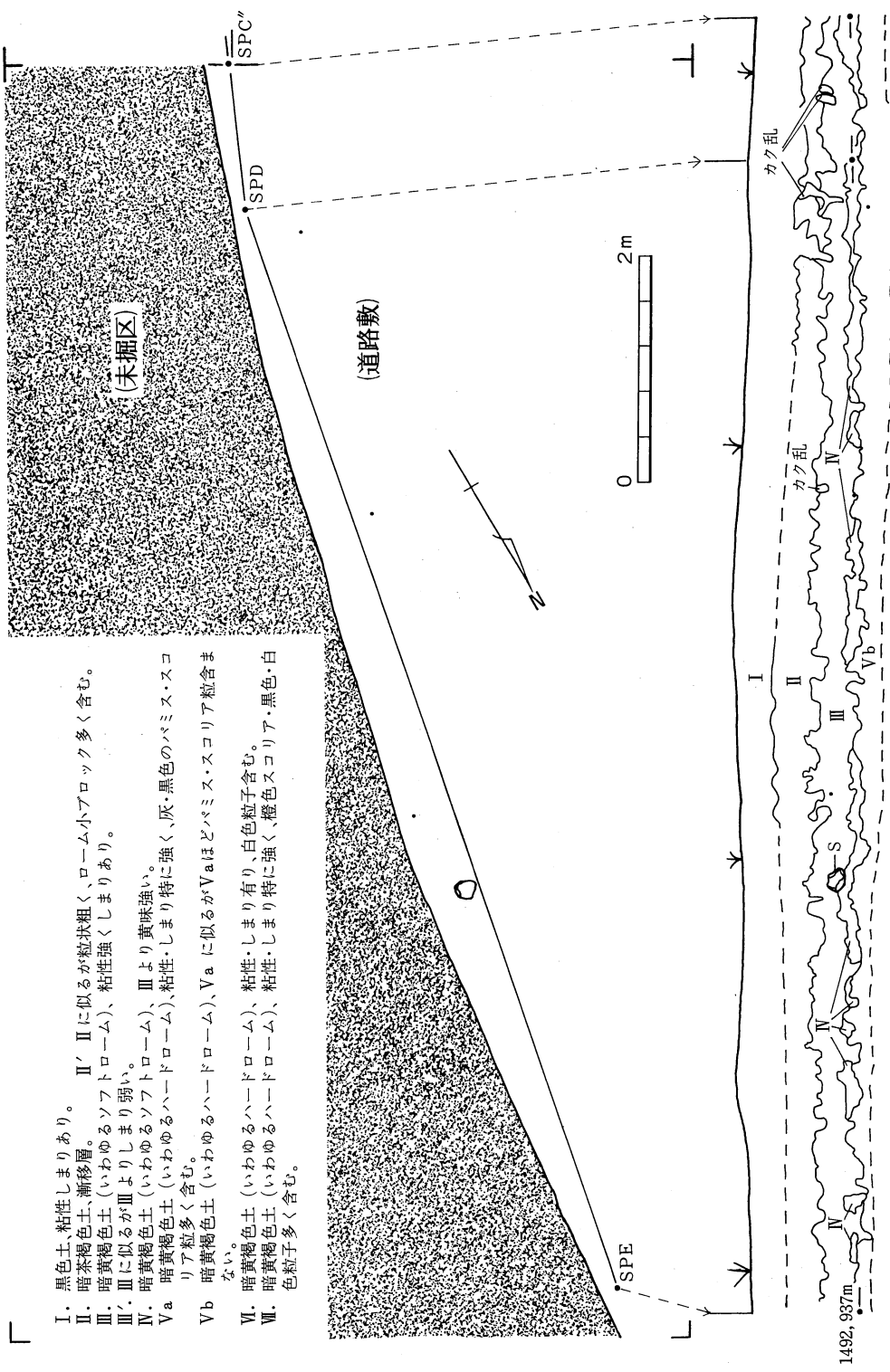
今回の調査では、石器群の所属年代を明らかにすることを目的として1ブロック中心部付近で土壌サンプリングを行い、河西学氏にてテフラ分析をお願いした（Ⅴ章参照）。

（2）出土遺物（第1表・第25図～第30図）

ジャコッパラNo.8遺跡からは、386点の石器が出土した。前述のように本遺跡は道路削平工事によって破壊された状態で発見されたため、出土石器は道路両側の断面部分からプライマリーな状態で発掘された資料と、破壊された部分から採集された石器からなっている。ブロックおよび出土地点別の石器内訳は第1表のとおりである。小剥片を主体とする上層ブロックと、陥穴遺構付近の出土品は他のブロックより高い層位的位置にあり、時期を異にしている。

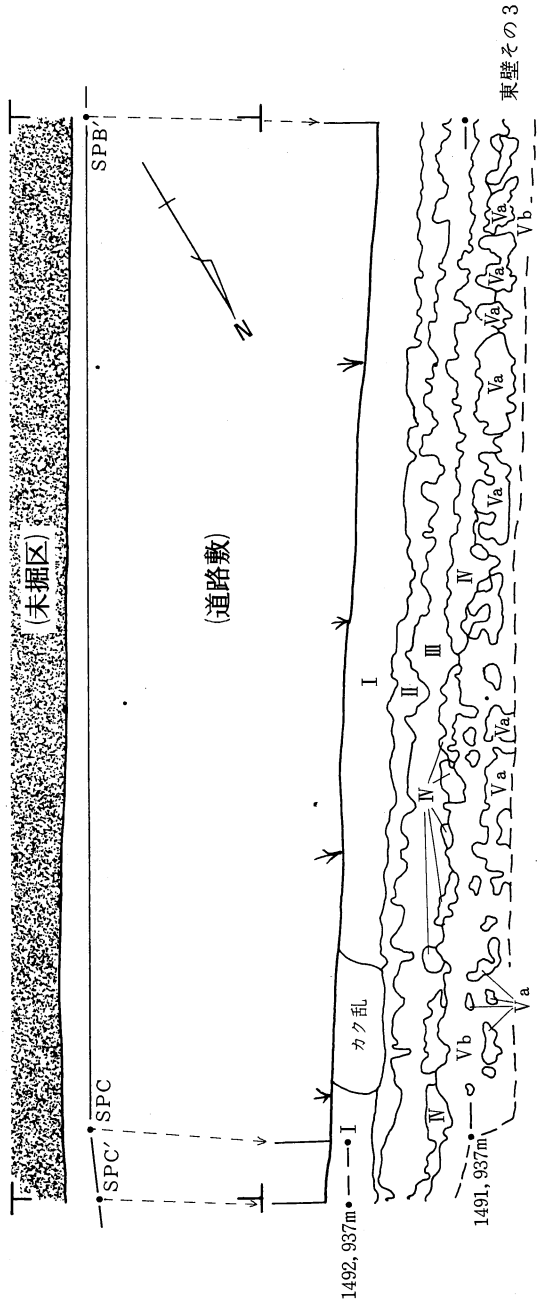
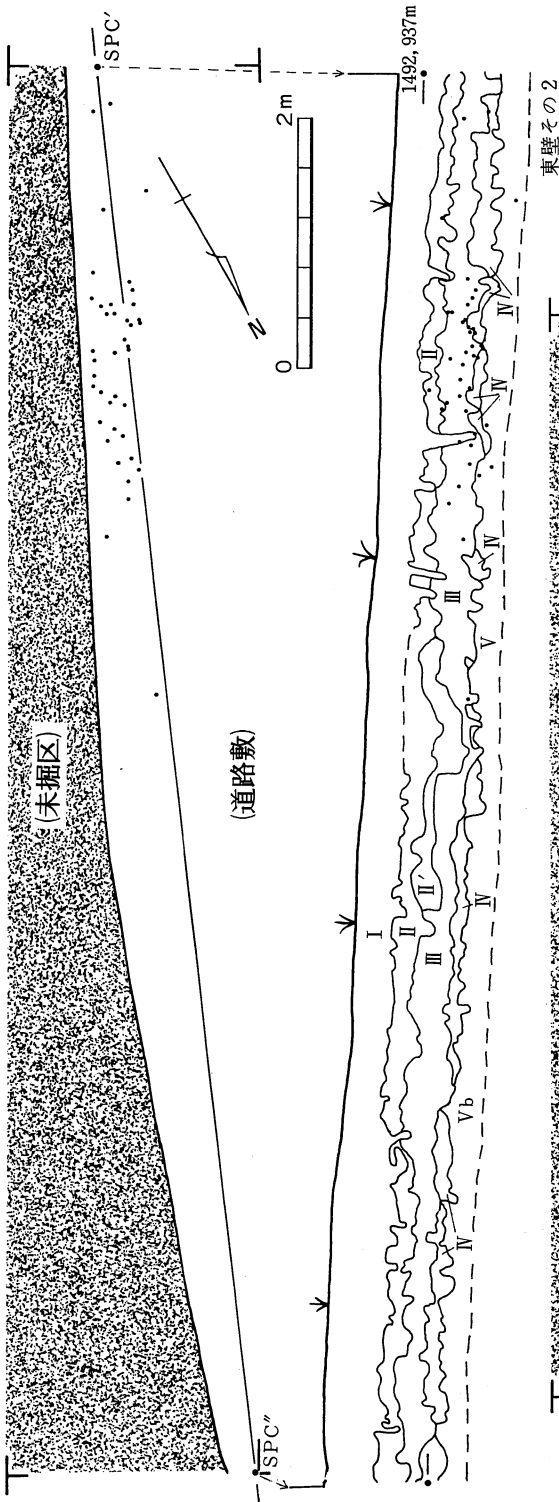


第19図 ジャコッパラNo.8 遺跡平成4年度調査区全体図 (S=1/300)

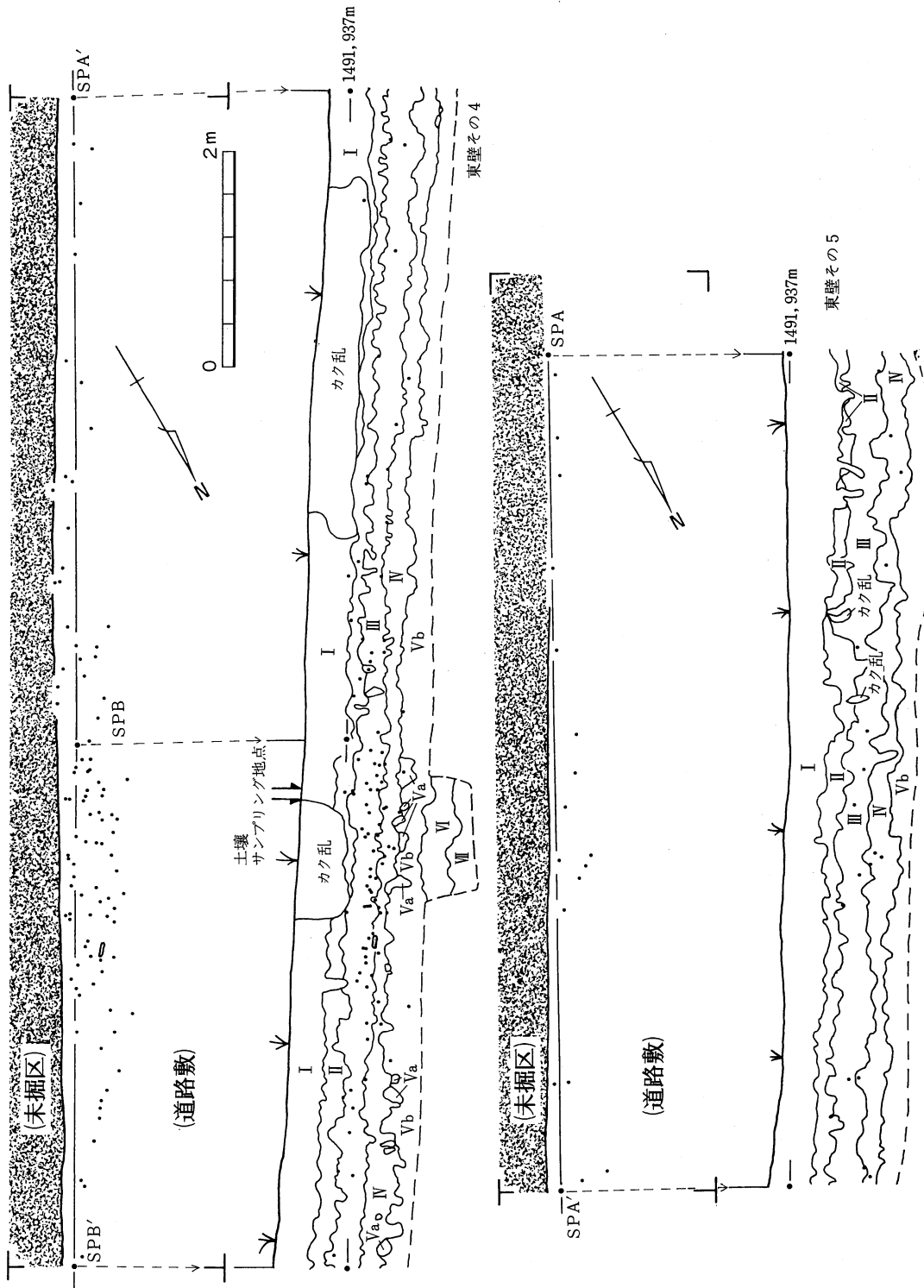


- I. 黒色土、粘性しまりあり。
- II. 暗茶褐色土、漸移層。
- II' IIに似るが粒状粗く、ローム小ブロック多く含む。
- III. 暗黄褐色土（いわゆるソフトローム）、粘性強くしまりあり。
- III' IIIに似るがIIIよりしまり弱い。
- IV. 暗黄褐色土（いわゆるソフトローム）、IIIより黄味強い。
- Va 暗黄褐色土（いわゆるハードローム）、粘性・しまり特に強く、灰・黒色のパミスコリア粒多く含む。
- Vb 暗黄褐色土（いわゆるハードローム）、Vaに似るがVaほどパミスコリア粒含まない。
- VI. 暗黄褐色土（いわゆるハードローム）、粘性・しまり有り、白色粒子含む。
- VII. 暗黄褐色土（いわゆるハードローム）、粘性・しまり特に強く、橙色パミスコリア・黒色・白色粒子多く含む。

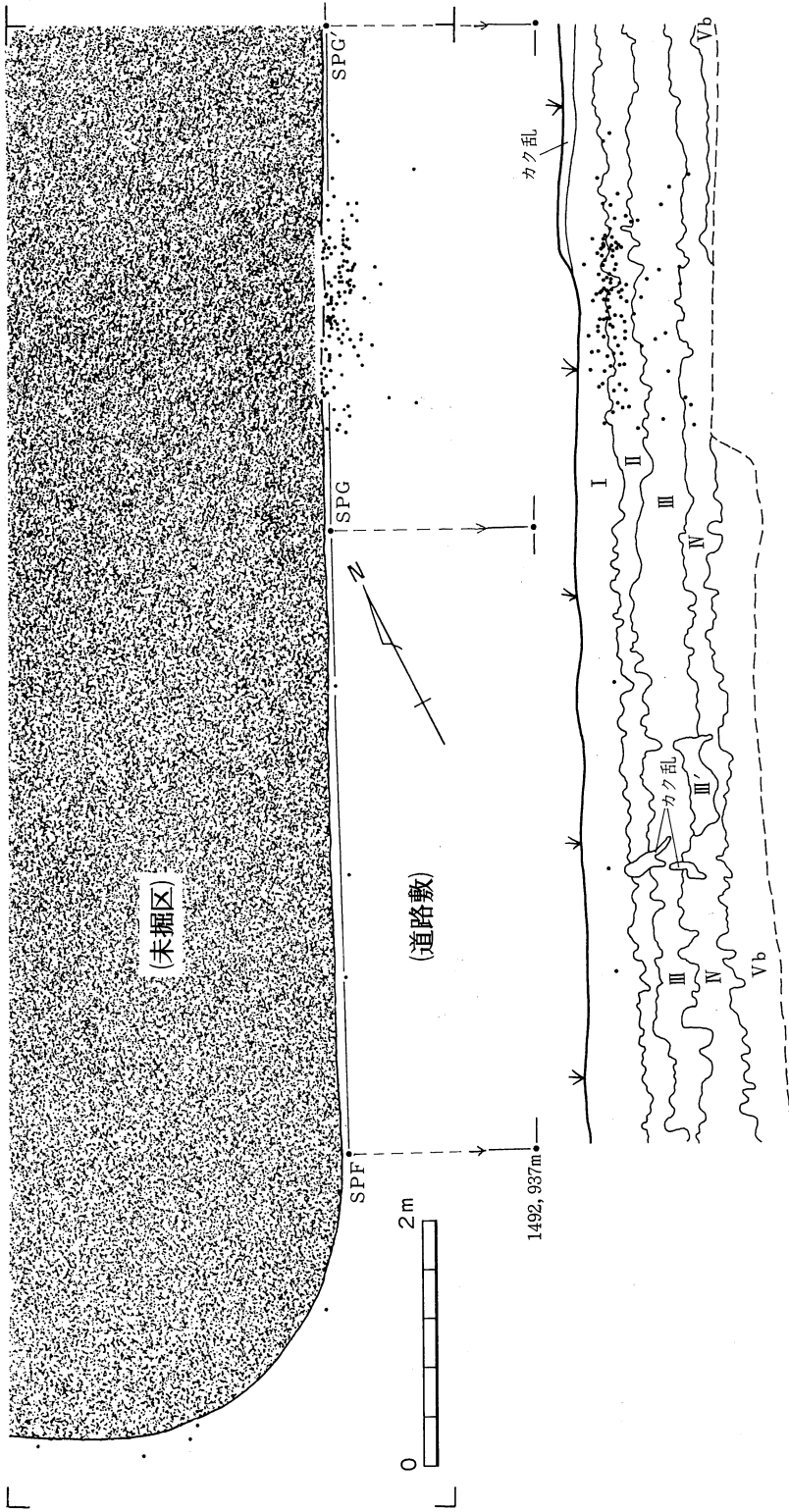
第20図 ジャコババラNo.8遺跡平面図・土層断面図および遺物レベル投影図 東壁その1 (S=1/60)



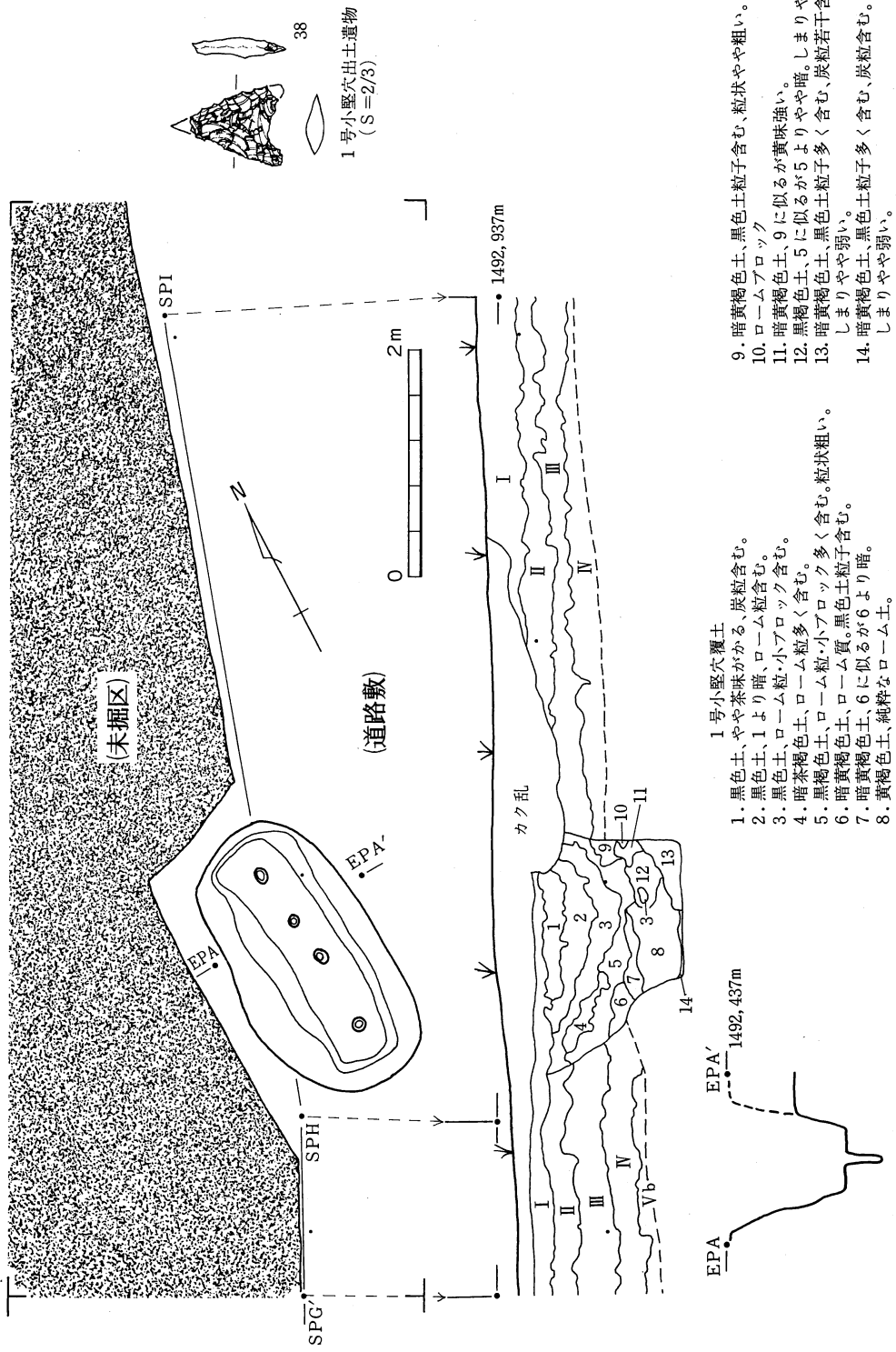
第21図 ジャコッパツラNo.8 遺跡平面図・土層断面図および遺物レベル投影図 東壁その2・その3 (S=1/60)



第22図 ジャコッパNo.8 遺跡平面図・土層断面図および遺物レベル投影図 東壁その4・その5 (S=1/60)



第23図 ジャコッパNo.8 遺跡平面図・土層断面図および遺物レベル投影図 西壁その1 (S=1/60)



第24図 ジャコッパパラNo.8遺跡平面図・土層断面図および遺物レベル投影図・西壁その2 (S=1/60)

第1ブロックの石器（第26図～第28図）

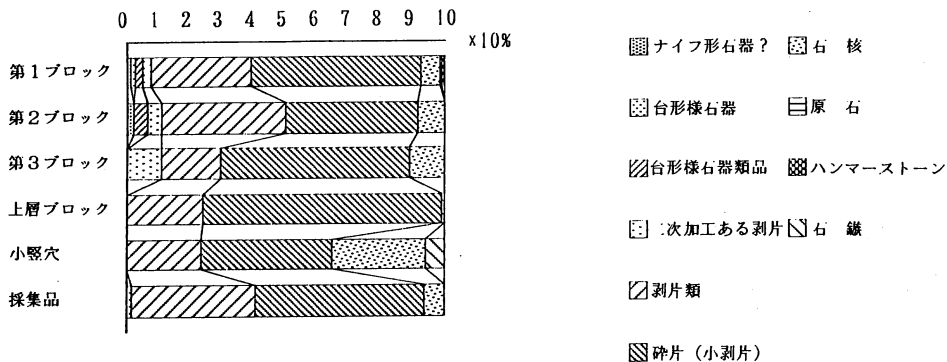
推定される第1ブロックのうち、道路壁面の残存部分から118点の石器が出土した。石器はハンマーストーン1点を除きすべて黒耀石製である。出土品の大部分は剥片類であり、その中でも碎片に近い小剥片が多い。また、二次加工を施された石器は9点、石核は7点、原石が1点ある。これらの内、接合資料としては2例が得られている。以下主な石器について述べる。

14はいわゆる台形様石器である。小形の横長剥片を素材とし、二次加工によって銀杏葉形に近い台形の器体を作り出している。未加工の剥片縁辺が外湾の刃部とみられる。両側辺および基部は平坦剥離と急角度調整により入念に整形されている。またうら面には、素材剥片の主要剥離面および打面がひろく残存している。この種の石器は、関東地方の後期旧石器時代前半期の石器群に類例が知られている。

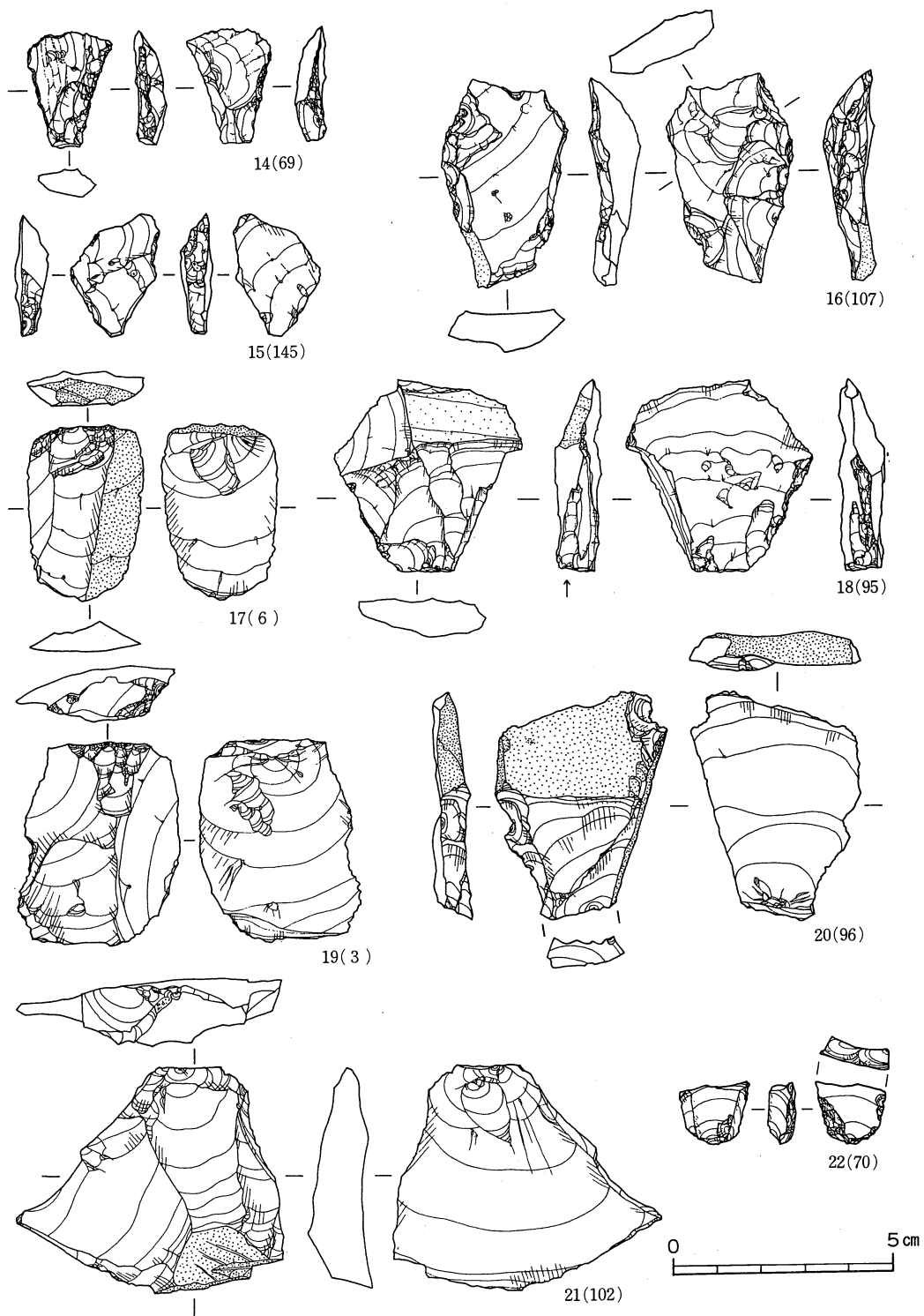
15は、14のような精製品ではないが、表中では便宜上一応台形様石器とした。横長剥片を素材

出土地点 器種等	第1 ブロック	第2 ブロック	第3 ブロック	上層 ブロック	陥穴遺構 付近	採集品 (雑)	合計
ナイフ形石器?	1	1					2
台形様石器	2						2
台形様石器の類品	3	2					5
二次加工ある剥片	3	2	3			1	9
剥片類	37	18	5	24	4	30	118
碎片(小剥片)	63	19	16	76	7	41	222
石核	7	4	3	1	5	5	25
原石	1						1
ハンマーストーン	1						1
石鏃					1		1
合計	118	46	27	101	17	77	386

第1表 ジャコッパラNo.8 遺跡出土の石器一覧表



第25図 ジャコッパラNo.8 遺跡出土石器遺構別組成表



第26図 ジャコップアラNo.8 遺跡出土遺物 その1 (S=2/3)
 カッコ内の数字は遺物取り上げ時の番号(注記No.)

とし、素材の主要剥離面・打面を残すこと、側面観が主要剥離面側に張り出すことなどは14と共通する特徴である。全体形状は先端のやや狭まる杓子形で、先端には剥片の未加工部が刃部として残されている。側面および基部加工は、おもて面からみた右側辺は折断とわずかな調整剥離、左側辺は両面にやや粗い平坦剥離が連続的に施されている。

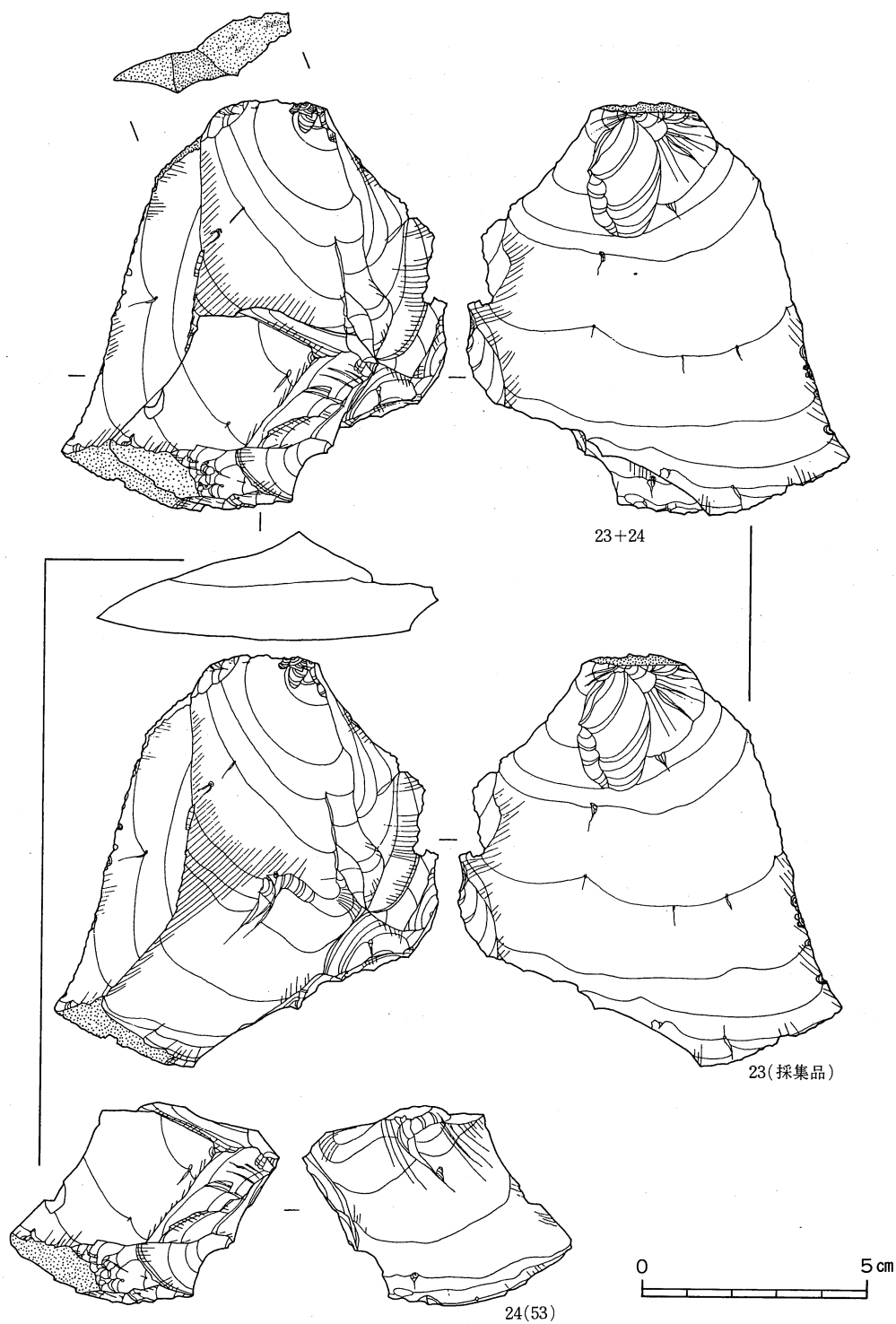
15・18・20の3点は、二次加工ある剥片であるが、平面形が先端側を開く台形に近いので、表中では台形様石器の類品として算入してある。ただし台形様石器・台形様石器の類品などの分類はあくまで便宜的なものであり大きな意味はない。特にここで言う台形様石器の類品はその在り方があまりにも多様で、「二次加工ある剥片」の中から明確な差異をもって独立性が保証されるようなグループではないことを予め断っておきたい。15は縦長剥片を素材とし、両端を折断して切り出し形に近い形状に整えた石器である。右側辺については折断面に対する細かい二次調整も見られる。18は五角形に近い平面形で、先端部は未加工の縁辺二辺によって山形を呈している。おもて面から見た右側辺および基部端は折断で整形され、右側辺は折断後に基部端の折断面を打面とする槌状剥離類似の調整が加えられている。一方左側辺はうら面側に急角度の二次調整が連続的に施されており、全体の二次加工は極めて多様である。20は元々台形を呈する縦長剥片を素材とし、その打面を基部として、先端にはほぼ未加工の刃部を残している。ただし先端の一部には剥片末端のヒンジフラクチャー部分の除去が目的とも考えられるわずかな二次調整が見られる。自然面の残る左右側辺には、左は中央に、右は上部に粗い二次加工が部分的に施されている。

22は小形の縦長剥片の打面側破片であるが、主要剥離面側に細かい調整加工が加えられている石器である。小破片であり不明確だが、一種のナイフ形石器の基部である可能性もあるので、表中では「ナイフ形石器？」としてある。

19はやや寸づまりの縦長剥片で、左側に縁辺をえぐるようなわずかな二次調整が認められる。背面に見られる先行剥離の打撃方向は様々である。細かい剥離による打面調整および打縁調整が見られる。

21は幅広の剥片で一部に自然面を残している。背面の剥離面構成から、やや求心的な剥片剥離が連続して行われたものと考えられる。打面は無調整で打撃時のパンチ痕が見られる。

23と24は互いに接合する剥片である。24は第1ブロックの出土だが、23は道路による破壊部分からの採集資料であり元の所属ブロックは不明である。23は大形の幅広剥片である。打面は自然面で、背面にも一部自然面が残る。剥片縁辺の一部に微細な剥離痕が認められる。背面を構成する剥離面の中央下半に24が接合する。23背面のうち中央および右半は複雑な面構成が見られるが、この接合によって中央と右半の大部分の面が24の剥離時に、節理面や先行の失敗打撃の影響により同時にはじけとんだものであることが分かる。24上半の欠損もその時点のものである。23の剥離に先立って、24を含む剥離と、23左半と24左半に残る剥離面に相当する剥離の、少なくとも2回の23同様の大型剥離が行われている。この3回の打撃方向は左回りに移動しており、求心的な剥離を反映する可能性もある。なお接合資料としては他に、二つに折れた剥片が接合して元の剥



第 27 図 ジャコッバラNo.8 遺跡出土遺物 その2 (S=2/3)
 カッコ内の数字は遺物取上げ時の番号(注記No.)

片に復元できる資料がある。

第1ブロックからはこれら以外に多くの剥片が出土している。全体の傾向としては、縦長の剥片は存在するが石刃のような整った形状のものはなく背面構成も多様なものが多いこと、寸づまりのやや縦長の剥片・求心的な剥離で得られた剥片・横長の剥片など多彩な剥片が生産されていること、折れ面を有する剥片があること、などが指摘できる。

25は石核である。図のおもて面には上方向からの剥離剥離痕跡が、うら面には下方向からのものが見られ、両設打面の石核である。上の打面は湾曲してうら面の自然面に連続しており少なくとも2回の調整剥離がなされている。下の打面には打面調整と見られる細かい剥離が加えられている。石核の現状形態は縦長だが、整った縦長剥片が連続剥離されたという確証はない。

26も石核である。立方体に近い形態の原石を石核素材とし、自然面の一面を唯一の打面として2面の作業面から寸づまりの剥片をある程度連続的に剥離している。

石核としてはこれら以外に、単設打面でやや小形の縦長剥片を剥離したもの、打面と作業面を交互に入れ替えるチョッピングツール状のもの、横長剥片を剥離した痕跡の見られるもの、残核形態が賽子状に近いものなどがあり、きわめて多様である。また石核素材の一種になったと思われるのと同様な拳大の原石が1点ある。

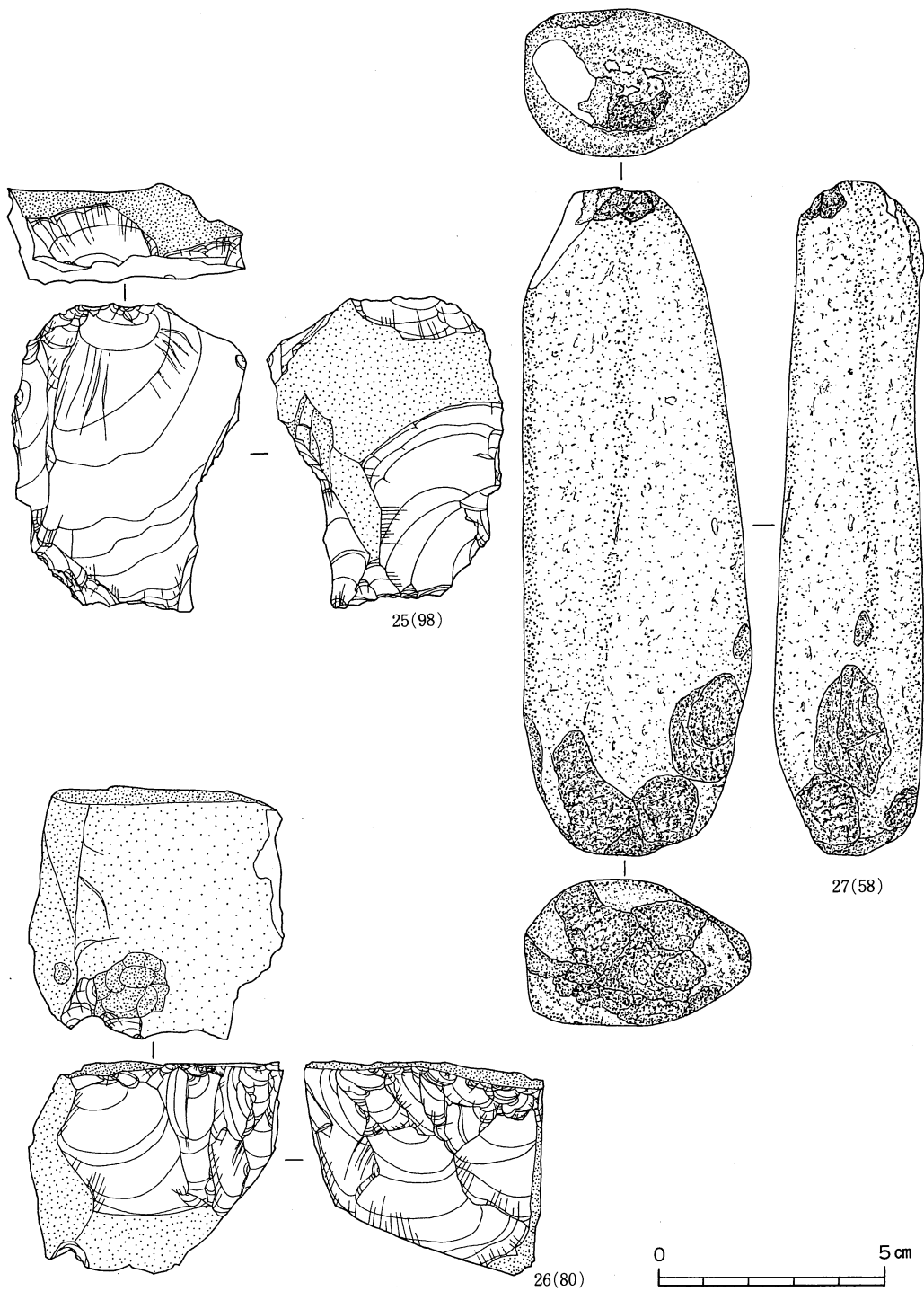
27は、出土石器中唯一の非黒耀石製材である安山岩製のハンマーストーンである。細長い自然礫を素材としたもので、上下両端に打撃作業の痕跡としての剥落と潰れが見られる。

第2ブロックの石器（第29図・第30図上半）

推定される第2ブロックのうち、道路壁面の残存部分から46点の石器が出土した。石器はすべて黒耀石製である。出土品の大部分は剥片類であり、碎片に近い小剥片も多い。二次加工を施された石器は5点、石核は4点で、接合資料としては2例が得られている。以下主な石器について述べる。

28は独特な二次加工の見られる石器である。幅広な大形剥片を縦に折断した上で、素材剥片の打面相当部に主に腹面側から急角度な細かい二次調整を施している。先端部にも折れが見られる。また縦の折断面に対応する左側縁は未加工の鋭い縁辺となっており、使用痕ともみられる微細な剥離痕がほぼ全面に認められる。この石器は未加工の刃部と急角度調整の存在から一種のナイフ形石器と考えることもできるが、表中では「ナイフ形石器？」に算入してある。

31と32は二次加工ある剥片で、結果的に台形に近い平面形となっているため第1ブロックと同じく表では便宜的に「台形様石器の類品」と扱っている。31の素材は横長剥片で打面と主要剥離面を残している。おもて面左側辺に二次加工的剥離が連続しているが、剥片剥離以前のいわゆる打縁調整との分別ができない。これを二次加工と見た場合、器体に対して斜めになる未加工の縁辺が刃部とも考えられる。32は銀杏葉様の幅広剥片に、折断や細かい二次加工が見られる石器である。



第28図 ジャコッバラNo.8 遺跡出土遺物その3 (S=2/3)
 カッコ内の数字は遺物取上げ時の番号(注記No.)

29はやや厚手の縦長剥片である。背面は自然面および右上方・右方・下方からの剥離面で構成されている。狭雑物の多い石質であるため判然としないが、剥片剥離後に背面側から打面部分を除去するような大きい剥離が加えられているのではないかと考えられる。

30は本石器群中では珍しく、左右縁辺がほぼ平行する縦長剥片である。ただし背面を構成する剥離面の打点は上方・右上方・右下方と多様である。打面は点状打面として残っている。背面の打面付近に見られる細かい調整は、剥片剥離前の打縁調整とみられる。また剥片末端は折れ面となっている。

33と34は互いに接合する剥片である。両者はほぼ同様の形態の幅広剥片でいずれも自然面を打点とするが、その打撃方向はほぼ45°異なる。背面も自然面であるため十分に明らかではないが、連続する求心状の剥離を意図したものと考えられる。

このほか第2ブロックからは、多様な形態の縦長や横長の剥片が出土している。また石核4点はいずれも形状が整っておらず、また石質が良くないこともあって、剥離意図は明確に復元できないが、おそらく得られた剥片には様々な形態のものがあつたと考えられる。これらの内2点は同一の原石を分割したもので、分割面において互いに接合する。さらにその一方には、分割面を打面とする横長剥片1点が接合している。

第3ブロックの石器（第30図下半）

推定される第3ブロックのうち、道路壁面の残存部分から27点の石器が出土した。石器はすべて黒耀石製である。出土品の大部分は剥片類であり、碎片に近い小剥片が多い。二次加工を施された剥片が3点、石核3点が得られている。以下主な石器について述べる。

35は横断面が山形を呈する小形の三角形状剥片の腹面側に二次加工を加えた石器である。剥片の背面はほとんど自然面である。二次加工は連続するやや細かい平坦剥離となっている。

37は寸づまりの剥片である。背面には多方向からの剥離痕がみられ、自然面も残存する。打面にははわずかながら調整が見られる。おもて面左側辺は若干の二次加工があつて鋸歯状を呈している。右側辺には使用痕とみられる微細剥離痕が認められる。

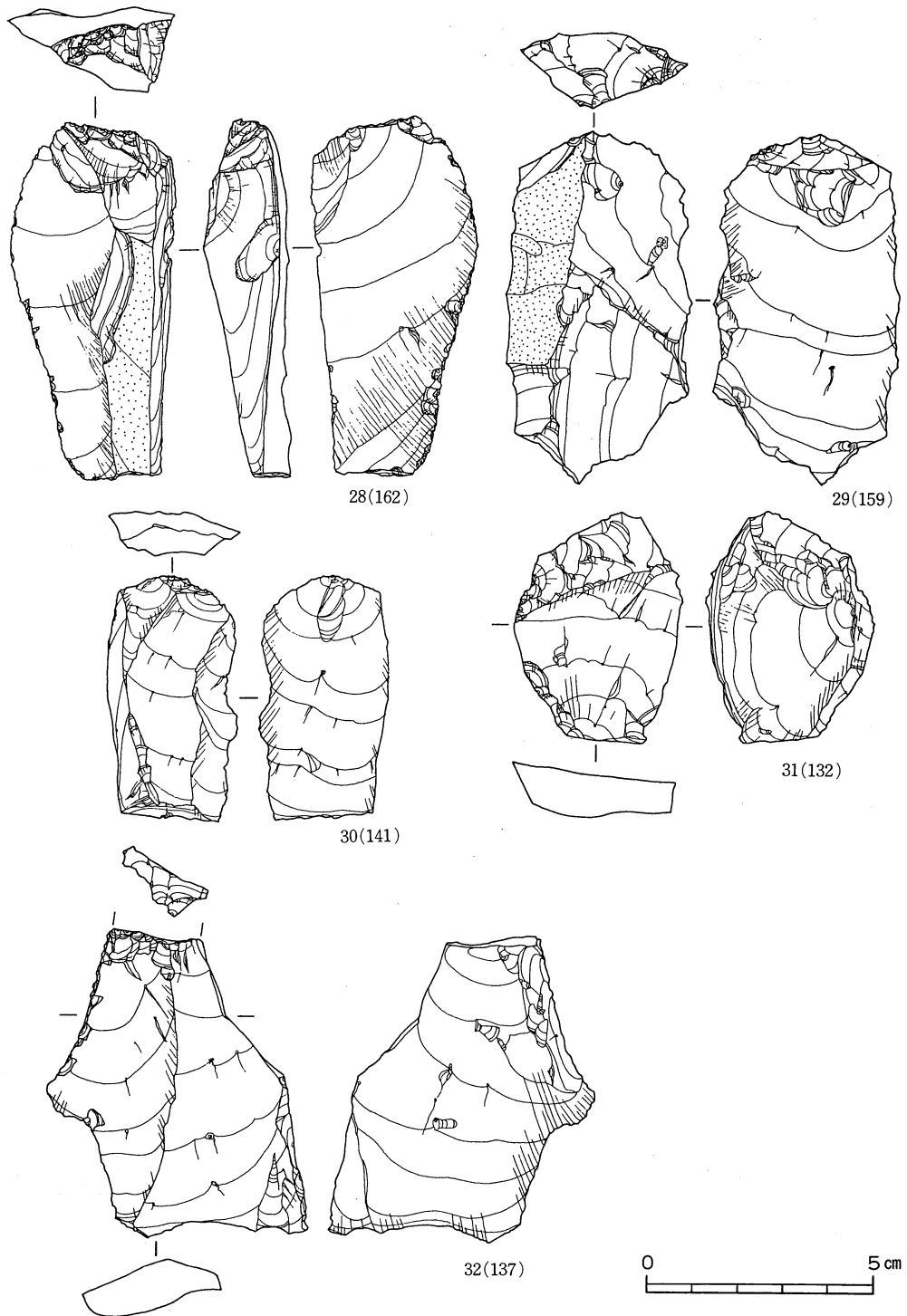
この他の剥片としては縦長の小形剥片や寸づまりの剥片があるが、多くは碎片である。

36は横断面が山形の分厚い剥片に対して、おもて面左側に見られるような大形剥離を腹面側から施した上で、剥片の下半を背面側からの打撃により折断した石器である。これらの調整は二次加工であるとも考えられるが、ここでは一応剥片を素材とする石核としておくことにする。

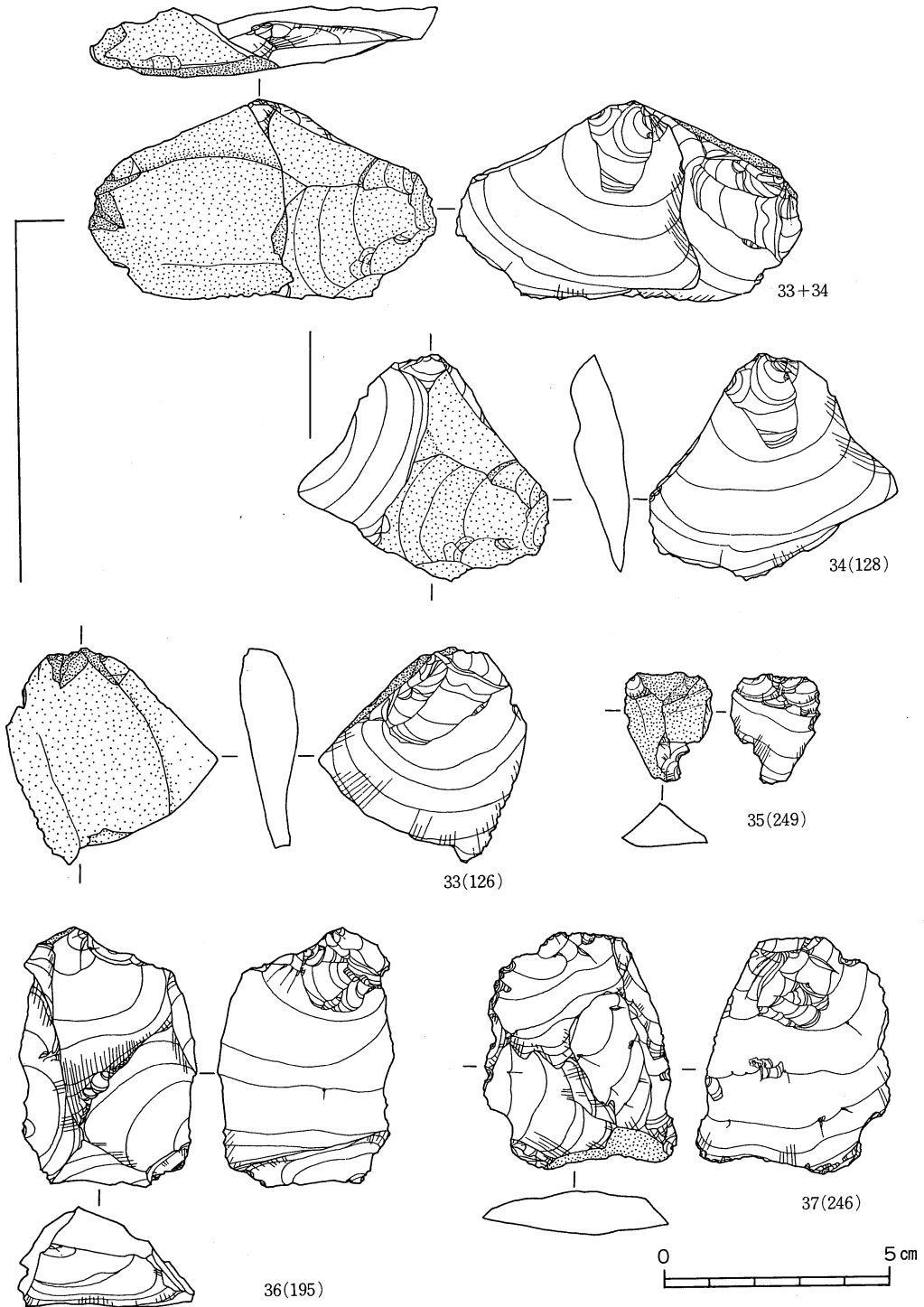
他の石核としては、分割面を有する大形品と、賽子状の小形品がある。

第1～第3ブロック石器群（ジャコッパラNo.8遺跡下層石器群）の様相

本遺跡第1～第3ブロックは、平面的に近接し層位にも差異がなく、出土石器の内容にも共通点が見られるため同一時期の石器群と考えられる。ただしこれらは被破壊の石器群であり、道路



第 29 図 ジャコッパラNo. 8 遺跡出土遺物 その 4 (S=2/3)
 カッコ内の数字は遺物取上げ時の番号 (注記No.)



第30図 ジャコッパラNo.8 遺跡出土遺物 その5 (S=2/3)
 カッコ内の数字は遺物取上げ時の番号 (注記No.)

敷の外にもブロックが広がっていることは確実であるため、出土石器は石器群の有する本来の性格をそのまま反映したものではない。この点に注意を喚起しながら、破壊地点からの採集資料も参考にして全体に共通する様相について概述しておくことにする。

はじめに石材選択に関しては、黒曜石のみが選択されているが質的には多様であり、和田峠を中心とする原産地帯の複数の露頭を供給源としていると考えられる。

次に剥片生産技術についてはおよそ次のような特徴が見られる。目的的に生産された剥片の形態は様々で、縦長のもの・横長のもの・寸づまりのもの・幅広の貝殻状のものが認められる。これらは剥片のまま、あるいは折断や二次加工を加えた上で使用されていると見られ、また一部は定形的な石器に加工されている。縦長剥片はその生産がある程度意図されていると思われるが、石刃のように連続的に剥離した痕跡は希薄である。横長剥片は一定量存在し、一部は定形的な石器の素材となっている。これらは様々な在り方を示す石核から剥離されたと考えられる。円盤形の石核を形成するような求心的に剥離が進行するような技術が存在する。その他、打面と作業面を固定して剥離するもの、打面と作業面を交互に入れ替えながら剥離するもの、両設打面を設定して剥離するものなど、きわめてバラエティーに富む各種の剥離技術が存在する。

石器の二次加工技術については次のようにまとめられよう。二次加工に際しては、折断技術・細かい平坦剥離・急角度の剥離などがしばしば見られ、また槌状剥離類似の剥離や、それぞれの剥離が深く粗いような調整もある。あるいは後者と関連があるかもしれないが、剥片に対して再度本格的な打撃を加える例が多く見られる。こうした打撃によって、大形剥片を縦に分割したり、打面部を除去したり、分厚い剥片を折断したりしていると考えられるが、剥片を石核として新たに剥片を生産しているように感じられるものも含まれる。

定形的な石器はきわめて少ない。わずかにいわゆる台形様石器など認められるにすぎない。台形様石器内の小形の1点は、関東地方の石器群にしばしば見られる形態の石器によく似ており、形式的に安定したものである可能性がある。もう1点の台形様石器とした石器は形態的に整っていない。またとりあえず「台形様石器の類品」と呼んだ石器類があるが、内容的には、素材・形態・加工ともにきわめて多様であって独立のグループを形成しているとする確証はない。ある種のナイフ形石器とも言える石器が2点あるが、1点は小破片、1点は類例の不明な独特の加工方法を有している。他に棒状のハンマーストーン1点があった。

以上、本石器群の特徴などについて気がつくところを述べた。部分的な資料であるため、以上の知見のみから編年的位置を確定することはできないが、総合的にみて、AT降灰以前の後期旧石器時代前半期に属するものであることは間違いないように思われる。また台形様石器などを取って関東地方のそれと対比した場合、武蔵野台地IV層やVII層に類例が求められそうであるが、編年についてはここでは見通しにとどめ、詳細な検討は正報告書に譲りたい。

なお本稿では上層石器群に関する記述を省略した。小剥片および碎片のみからなる石器群であるが、正報告書において改めて報告することとする。

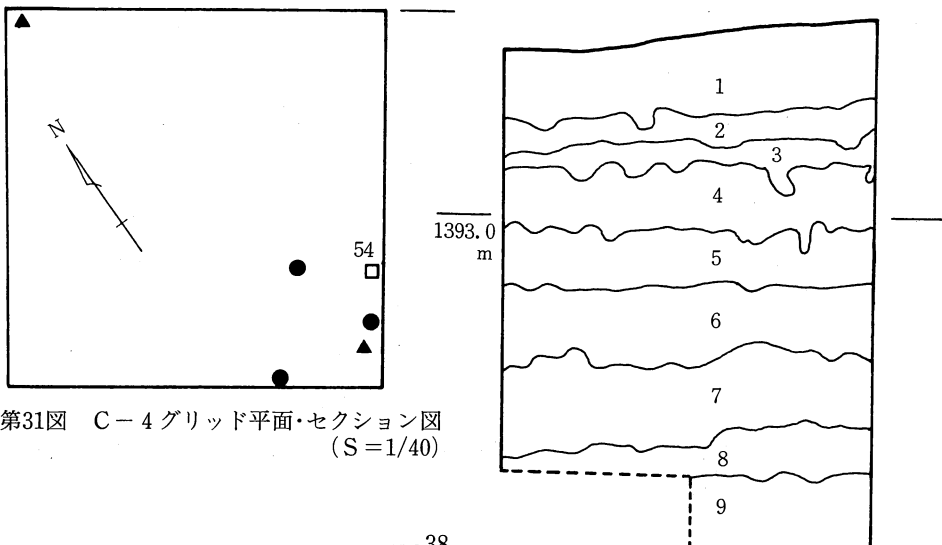
5. KR-C地区の調査

ジャコッパラNo.1遺跡の立地される台地は遺跡の下方南西方向の本沢沿いにその裾野を伸ばし鞍部を形成したのち、広大な平坦台地や独立丘を形成して南方向に緩やかに下る。今年度の分布調査はC地区のうちこれらの台地と斜面の一部を調査した。調査方法は過去の調査と同じ要領で、遺跡の有無、土層の堆積状況の確認を主目的に地形などを考慮しながら任意の地点に試掘坑（2m×2m・1m×2m・1m×3mなど）を設定し掘り下げを行った。試掘坑は77ヶ所に及び、内29ヶ所の試掘坑で遺物、遺構の検出を見た（第32図）。独立丘、平坦台地、斜面などのバラエティーに富んだ地形のなかで陥し穴状遺構や旧石器時代のブロックなども検出されている。以下、主要な試掘坑及び、遺物について記述する。その他の試掘坑については表にしてデータのみを掲載した（表2）。

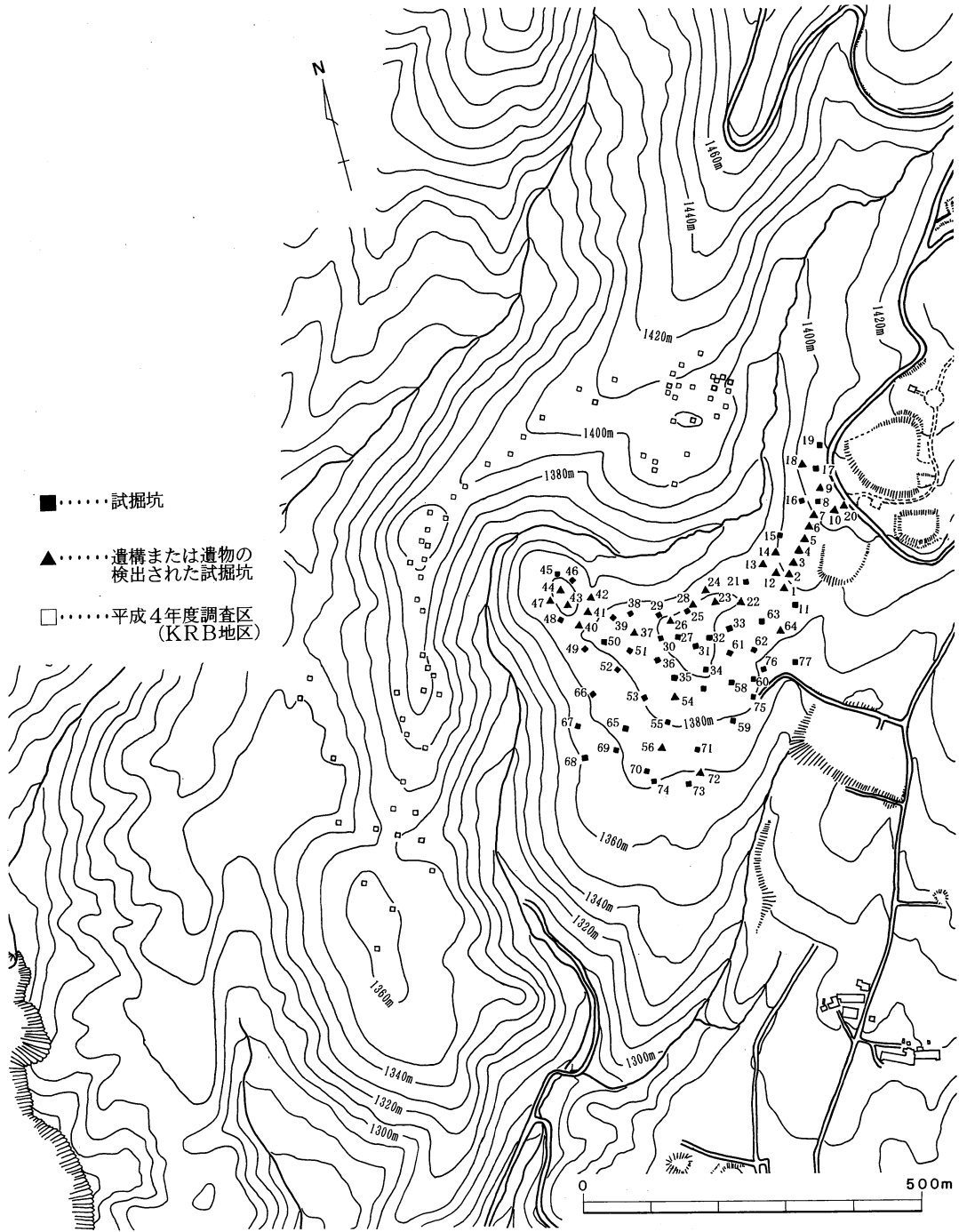
（1）試掘坑

[C-4グリッド]（第31図、第49図54）

ジャコッパラNo.1遺跡から繋る尾根筋状の台地上のやや中央部、標高1394mの地点に設定した。土層堆積状況が良好なため深掘と土壌のサンプリングを行った。層序は1層が黒墨土、2層黒色土で60cmと厚く、3層が暗褐色土の漸移層で15cm、4層がスコリア粒を微量含む黄灰褐色土（ソフトローム）で35cm、5層がスコリア粒を少量含む黄褐色のハードロームで30cm、6層以下もハードロームが続き、6層はスコリア粒を多量に含み、5層より若干暗めの黄褐色土で厚さ40cm、7層は6層とほぼ同じだがやや硬く、若干白色粒子（安山岩系統のものか）が混じった土で70cmと厚い。8層はやや白味があった粘りのある粘土質ロームで25cm、9層はやや砂質の暗褐色ロームでスコリア粒と赤色スコリア粒が多量に混入する。遺物は2層と3層上部より黒耀石剥片3点、特殊磨石1点（54）、土器片2点が検出されている。



第31図 C-4グリッド平面・セクション図
(S=1/40)



※ 番号は試掘グリッドNo. (各地区毎に通し番号を付したため、例えばC地区ならば「KR000」とするのが正しい—KRは霧ヶ峰の略—が、この図では「KRC」を省略してある。)

第 32 図 平成 4 年度分布予備調査 (KR-C 地区) 試掘グリッド分布図 (S=1/10,000)

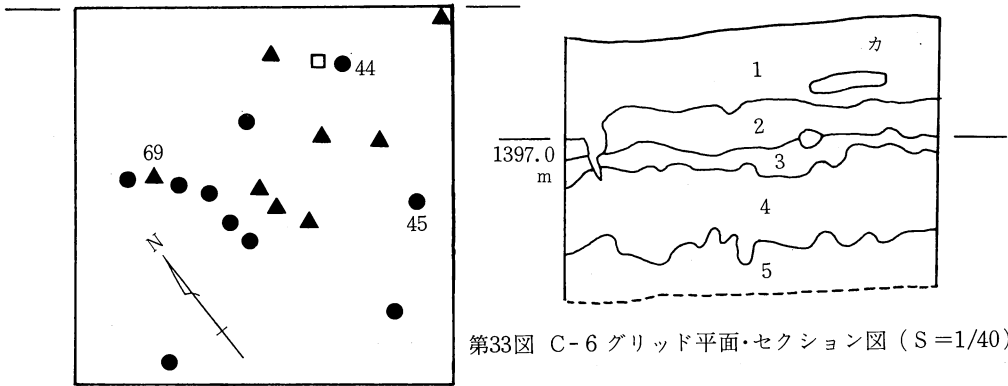
第2表 KR-C地区試掘坑一覧表

No	規模(m)	標高(m)	地形	出土遺物	備考
1	2×2	1,388.80	台地平坦	(縄) 黒耀石2点, その他石器1点	特殊磨石
2	2×2	1,390.20	台地平坦	(縄) 黒耀石5点, 土器片1点	
3	2×2	1,392.00	台地平坦	(縄) その他石器1点	
4	2×2	1,394.00	台地平坦	(縄) 黒耀石7点, その他石器1点, 土器片2点	深堀, 特殊磨石
5	2×2	1,395.80	台地平坦	(縄) 黒耀石8点, その他石器1点, 土器片5点	
6	2×2	1,397.60	台地平坦	(縄) 黒耀石13点, その他石器2点, 土器片12点	チャート製石匙, 原石
7	2×2	1,400.10	台地平坦	(縄) 黒耀石3点, 土器片10点	
8	2×2	1,401.50	台地平坦	なし	
9	2×2	1,402.90	台地平坦	(縄) 土器片1点	
10	2×2	1,399.70	台地平坦	(縄) 黒耀石14点, その他石器2点, 土器片6点	
11	2×2	1,387.70	台地鞍部	なし	
12	2×2	1,387.90	台地平坦	(縄) 黒耀石2点, その他石器1点, 土器片1点	
13	2×2	1,382.70	鞍部斜面	(縄) 土器片1点	
14	2×2	1,389.80	台地斜面	(縄) 黒耀石2点, 土器片1点	
15	2×1	1,391.00	台地斜面	なし	
16	2×1	1,398.70	台地斜面	なし	
17	2×2	1,405.80	台地平坦	なし	
18	(2×1)	1,401.90	台地斜面	なし	陥し穴状遺構検出
19	2×2	1,411.00	台地平坦	なし	
20	2×2	1,401.30	台地平坦	(縄) 土器片1点	付近表探多数
21	2×2	1,387.60	台地平坦	なし	
22	2×2	1,390.90	台地平坦	(縄) 黒耀石5点, その他石器1点, 土器片1点 (旧) 黒耀石剥片4点	
23	2×2	1,391.00	台地平坦	(縄) 黒耀石9点, 土器片15点	
24	2×1	1,388.00	台地斜面	(縄) 土器片2点	押型文
25	2×2	1,389.90	台地平坦	なし	
26	2×2	1,391.60	台地平坦	(縄) 黒耀石製石鏃1点, 土器片3点	
27	2×2	1,392.50	台地平坦	なし	深堀, サンプルング
28	2×1	1,389.10	台地斜面	(縄) 土器片1点	
29	2×1	1,389.20	台地斜面	なし	
30	2×2	1,390.20	台地緩斜面	なし	
31	2×2	1,392.20	台地平坦	なし	
32	2×2	1,390.40	台地平坦	なし	
33	2×2	1,388.30	台地緩斜面	なし	
34	2×2	1,391.10	台地緩斜面	なし	
35	2×2	1,389.10	台地緩斜面	なし	
36	2×2	1,388.40	台地緩斜面	なし	
37	2×2	1,387.60	尾根筋	(縄) 黒耀石1点, 土器片3点	
38	2×1	1,385.70	尾根斜面	なし	

No	規模(m)	標高(m)	地形	出土遺物	備考
39	2×1	1,383.50	尾根筋	なし	
40	2×2	1,380.10	尾根筋鞍部	(縄) 黒耀石12点, その他石器1点, 土器片9点	頁岩製石匙
41	2×2	1,378.30	尾根筋鞍部	(縄) 黒耀石1点, その他石器2点, 土器片2点	
42	2×2	1,375.80	鞍部谷斜面	(縄) 黒耀石1点, 土器片1点	
43	2×2	1,381.20	独立丘	(縄) 黒耀石1点, 土器片5点	
44	2×2	1,381.70	独立丘	(縄) 黒耀石4点, 土器片2点	深堀、サンプリング
45	2×2	1,379.80	独立丘斜面	なし	
46	2×1	1,377.50	独立丘斜面	なし	
47	2×1	1,379.50	独立丘斜面	(縄) 土器片1点	
48	2×1	1,376.20	独立丘斜面	なし	
49	2×2	1,377.80	台地緩斜面	なし	
50	2×2	1,381.70	台地緩斜面	なし	
51	1×2	1,385.30	台地緩斜面	なし	
52	2×2	1,380.90	台地緩斜面	なし	
53	2×2	1,382.00	台地緩斜面	なし	
54	2×2	1,386.20	台地緩斜面	(旧) 黒耀石剥片1点(4層排土中)	
55	2×2	1,381.70	台地緩斜面	なし	
56	2×2	1,375.10	台地緩斜面	(縄) 黒耀石剥片1点(3層漸移層)	
57	2×2	1,387.90	台地緩斜面	なし	
58	2×2	1,386.80	台地緩斜面	なし	
59	2×2	1,380.00	台地緩斜面	なし	
60	2×1	1,381.00	台地斜面	なし	
61	2×2	1,386.80	台地緩斜面	なし	
62	2×2	1,382.90	台地斜面	なし	
63	2×2	1,386.30	台地緩斜面	なし	
64	3×1	1,382.30	台地斜面	(縄) 黒耀石剥片1点	
65	2×2	1,374.50	台地緩斜面	なし	
66	2×2	1,370.00	台地斜面	なし	
67	2×2	1,364.20	台地斜面	なし	
68	3×1	1,362.60	小谷斜面	なし	
69	2×2	1,370.40	台地緩斜面	なし	
70	2×2	1,372.20	台地緩斜面	なし	
71	2×2	1,377.20	台地緩斜面	なし	
72	(3×3)	1,369.80	台地緩斜面	(縄) 土器片19点(同一個体)	縄文中期
73	1×2	1,368.30	台地緩斜面	なし	
74	2×1	1,370.40	台地緩斜面	なし	
75	2×2	1,381.40	台地斜面	なし	
76	3×1	1,378.70	台地斜面	なし	
77	2×1	1,371.50	谷底部	なし	

[C-6グリッド] (第33図、第48図44・45、第50図68)

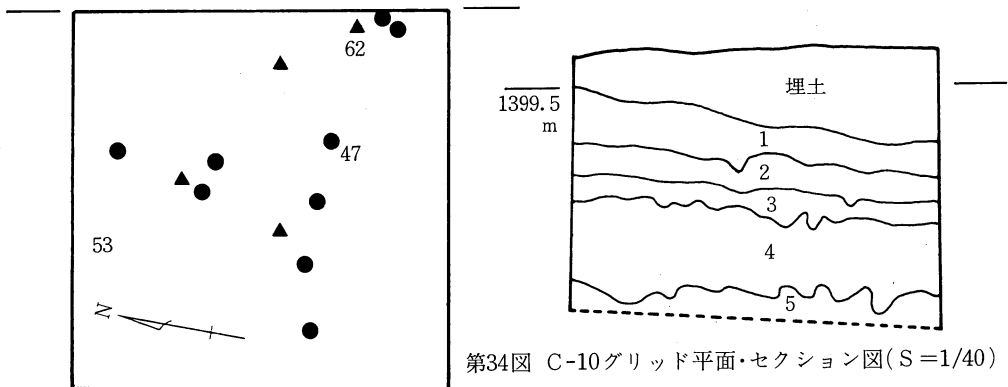
台地の中央部No.4グリッドから約40m山側に設定した。標高は1397.6mであった。層序は4グリッドと変わらず、1層が黒墨土、2層が黒土で層厚60cm、3層は暗褐色土で10cmとやや薄く、4層ソフトローム、5層ハードロームとなる。遺物は2層を中心に1層、3層上部から黒耀石製のピエス・エスキュー1点(44)、黒耀石剥片12点、チャート製の石匙1点(45)と原石1点、そして縄文土器片が12点(68)出土している。



第33図 C-6グリッド平面・セクション図 (S=1/40)

[C-10グリッド] (第34図、第48図47、第49図53、第50図62)

本試掘坑は台地の中央部やや東寄りに位置する、現状地形はほぼ平坦部が広がるが、東側は小谷を埋め戻しており、旧地形としては馬の背状の尾根の頂部に位置すると考えられる。標高は1399.7mである。層序は1層黒墨土のうえに流れ込みによるものと考えられるローム混じりの黒土が厚く堆積しており、他のグリッドに比べると1、2層がやや薄くなっている。また4層ソフトロームは40cmとやや厚く堆積している。遺物は黒耀石剥片が11点、特殊磨石1点(53)、頁岩製の石器1点(47)、縄文土器片4点(62)が2層より出土している。



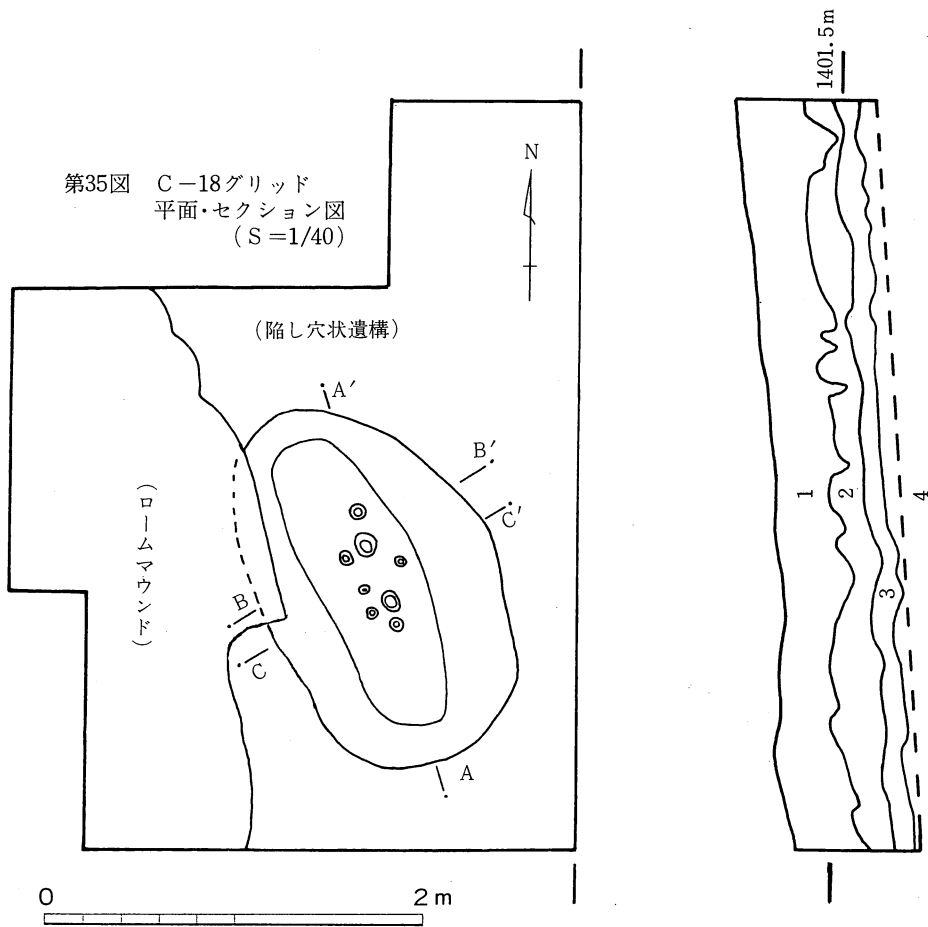
第34図 C-10グリッド平面・セクション図(S=1/40)

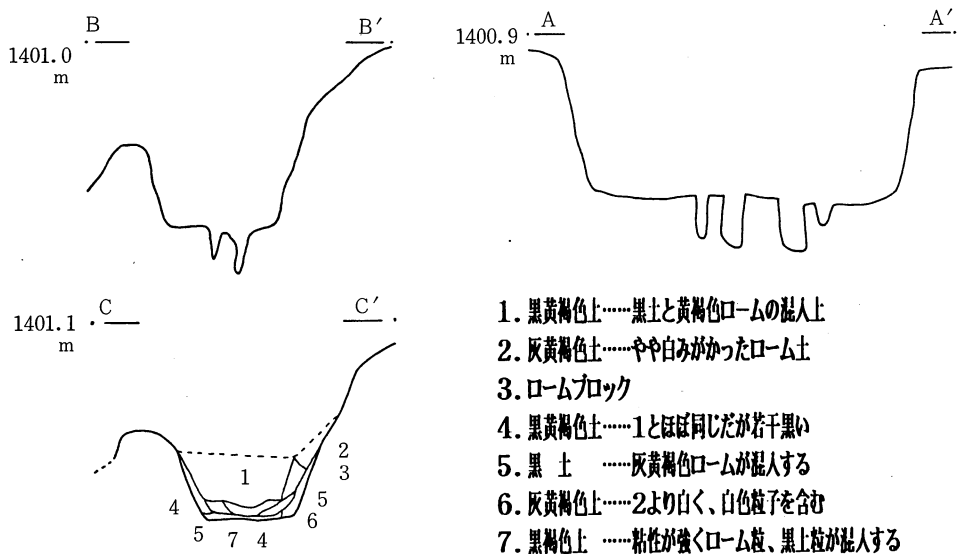
[C-18グリッド] (第35~36図)

本試掘坑は台地の本沢に下る西向き斜面に位置する。緩斜面から急激に傾斜がきつくなる落ち始めで、標高は1401.9mであった。当初1×2mの試掘坑で調査したが、西隅において黒色土の

落ち込みを確認したため拡張し全容の把握をしようとした。しかし確認面（ローム面）ではかなりの広がり認められ、覆土中にロームブロック等の混入も認められたためロームマウンド（風倒木痕）と判断し、拡張を中止、精査に移行した。覆土を若干掘り下げたところで複数の遺構の切りあいが確認され、さらに精査を進めたところ土坑（陥し穴状遺構）とロームマウンドの切りあったものであることが判明した。

陥し穴状遺構は確認面で長さ約2m、幅約1.4mのやや幅広の長楕円形で長軸方向は北から西へ25°であり、斜面に対し直交（いわゆる横向き）に構築されている。底部は長さ約1.6m、幅約0.6mと幅狭になり、直径5cm～12cm、深さ10cm～30cmの小Pitが8本、やや中央部に集中して検出された。確認面から底部までの深さは山側で約0.9m、谷側で約0.5mで、断面形は下半部（底部付近）がやや急峻で、上半部はやや開く形状になる。遺物の出土はないが、覆土の堆積状況等から、本遺構は縄文時代に属するものと考えられる。

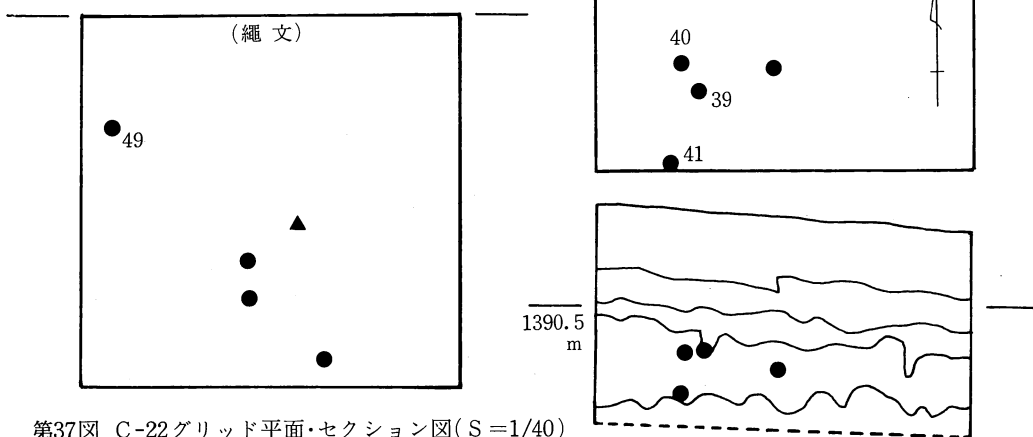




第36図 C-18グリッド陥し穴エレベーション・セクション図 (S=1/40)

[C-22グリッド] (第37図、第48図39~41・49)

本沢沿いに造る尾根筋は広大な台地を形成する。南向きの緩斜面が主体となるこの台地の頂上平坦部の中央付近、標高1390.9mの地点に設定した。土層堆積状況は1層黒墨土が35cm、2層が15cmとやや薄く、3層の漸移層が15cm、4層がソフトロームで35cmの層厚であった。遺物は、2層の黒色土から黒耀石の剥片が4点(49)と土器片が1点出土している。また4層ソフトローム中からも黒耀石剥片が4点(39~41)出土しており、旧石器時代の所産と考えられる。4層の上部と下部でレベル差があり、複数時期の可能性もあるが一応ブロックとして把握できよう。

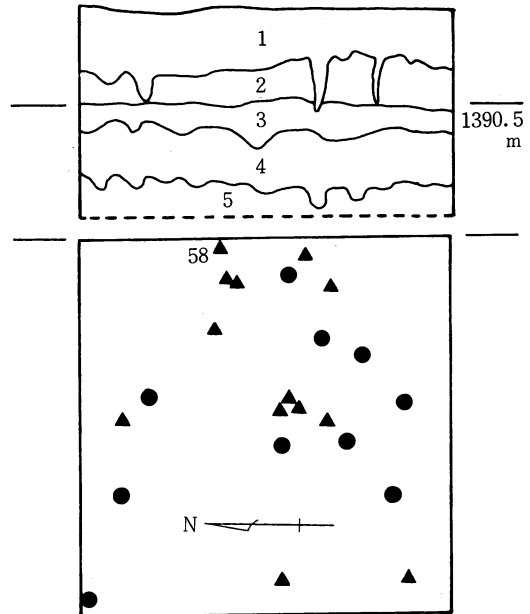


第37図 C-22グリッド平面・セクション図(S=1/40)

[C-23グリッド]

(第38図、第50図58・61)

22グリッドと同じ台地頂部の平坦部で22グリッドより35m西側に設定した。標高は1391mであった。土層堆積状況は4層ソフトロームが若干薄めであるが、22グリッドとほとんど変わらず、1層黒墨土が30cm、2層黒土が20cm、3層は暗褐色土で15cm、4層ソフトローム30cmとなる。出土遺物は2層を中心に黒耀石10点、縄文土器片15点(58・61)と多量である。

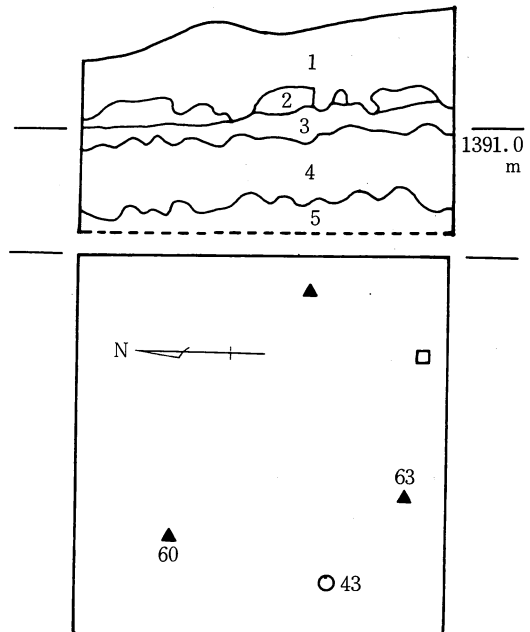


第38図 C-23グリッド平面・セクション図(S=1/40)

[C-26グリッド]

(第39図、第48図43、第50図60、63)

台地平坦部から繋る尾根筋は西へ緩やかに下り、北側は本沢にむけて急激に下るが、その手前の平坦部端に本試掘坑は位置する。標高は1391.6mで、層序は1層黒墨土が35cm、2層黒土はだいぶ木の根による攪乱を受けているが10cmほどの層厚をもつ。3層暗褐色土も10cm、4層ソフトロームが35cmとなっている。遺物は1層から3層上部にかけて出土しており黒耀石製の石鏃1点(43)と楕円押型文を含む縄文土器片3点(60・63)が出土している。

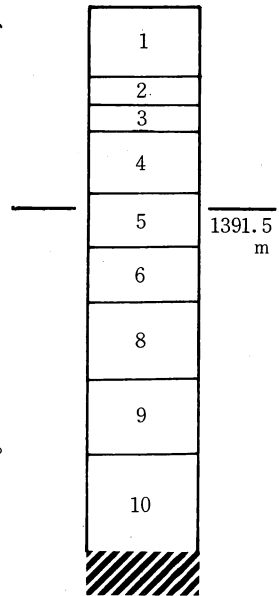


第39図 C-26グリッド平面・セクション図(S=1/40)

[C-27グリッド] (第40図)

台地上平坦部南西側に位置する。標高は1392.5mであった。遺物等の検出がなかったため深掘を行って土層堆積状況の確認と土壌サンプリングを行った。層序は1層黒墨土が30cmとやや薄く、2層黒土10cm、3層暗褐色土は15cm、4層はスコリア粒を微量に含む黄灰褐色土(ソフトローム)で層厚は35cm、5層はスコリア粒を少量含む黄褐色のハードロームで4層との境がかなり不整合の部分もあるが平均25cmの厚さをもつ。6層はスコリア粒を多量に含む5層より若干暗めの黄褐色土で厚さ40cmだが台地の傾斜

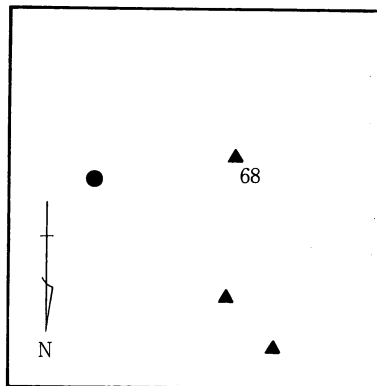
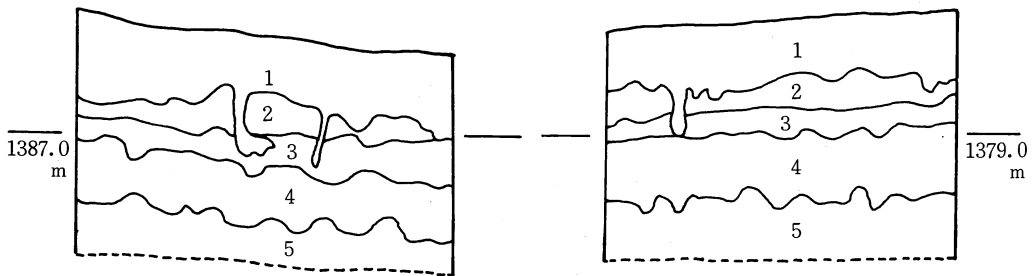
と同じ西方向に向かって層厚が増している。No.4グリッドで見られた7層に該当する層はなく、8層は白黄褐色の粘土質ロームで40cm、9層はやや砂質を呈した暗黄褐色土でスコリア粒、火山砂ブロックを多量に含んでおり、非常に硬質である。層厚は50cmと厚い。10層は9層の土の硬さが強くなったもので硬くよくしまっているが粘性は全くない土質である。本試掘坑の土層堆積状況はNo.4グリッドとほとんど変わらないものである。なお地表面から3m近くまで掘り下げたが岩盤と思われる礫層には届かなかった。



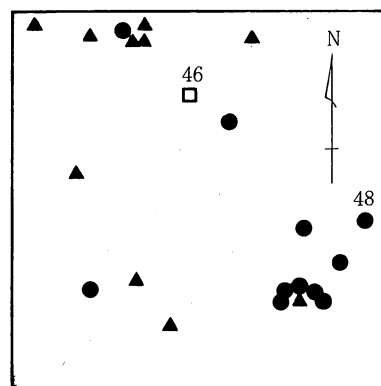
第40図 C-27グリッド
土層柱状図(S=1/40)

[C-37グリッド] (第41図、第50図69)

台地の西に下る馬の背状の尾根筋中腹、標高1385.7mに位置する。層序は1層黒墨土が30cm、2層黒色土15cm、3層暗褐色土が20cm、4層ソフトロームは30cmで5層ハードロームへと繋がる。遺物は黒耀石剥片が1点と縄文土器片が3点(69)出土した。これらはすべて2層黒色土からの出土である。



第41図 C-37グリッド
平面・セクション図(S=1/40)



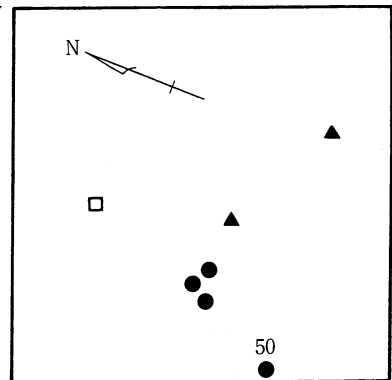
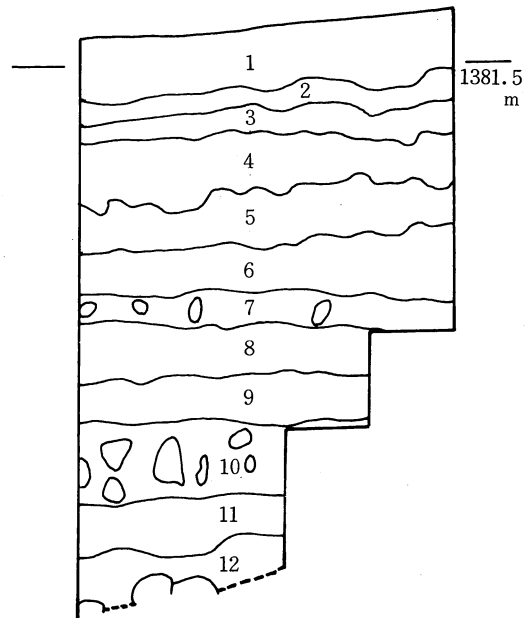
第42図 C-40グリッド
平面・セクション図(S=1/40)

[C-40グリッド] (第42図、第48図46・48)

台地の稜線が本沢に面した小規模の独立丘にぶつかり鞍部を形成するが、そのやや平坦部に本試掘坑は設定された。標高は1380.1mである。層序は1層黒墨土が30cm、2層黒色土が20cmと厚く、3層暗褐色土15cm、4層ソフトローム30cm、5層ハードロームへと推移する。遺物は2層黒色土を中心に3層漸移層からも出土している。黒耀石剥片12点、縄文土器片9点と多量で、これらのほかに頁岩製の石匙(46)が1点検出された。

[C-44グリッド] (第43図、第49図50)

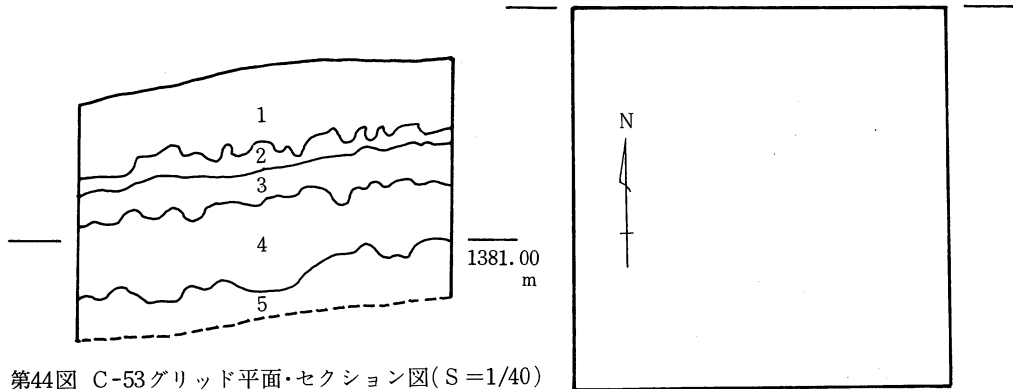
独立丘の頂部平坦面の中央付近に位置する。標高は1381.7mであった。本試掘坑も深掘を行っており、その層序は1層黒墨土が30cm、2層黒土が10cmとやや薄く、3層暗褐色土15cm、4層が暗黄褐色のソフトロームで30cmとつながる。5層は黄褐色土のいわゆるハードロームで硬質であるが粘性に乏しくブロック状に崩れる部分がある。層厚は30cmである。6層はスコリア粒を若干含む黄褐色ロームで20cm、7層は6層と同じ土であるがこちらはスコリア粒がやや多量で黒褐色調の火山砂ブロックを多量に含んでいる。厚さは20cmである。8層は6層と全く同質の土で30cmである。6層から8層については7層部分に火山砂ブロックを含む以外同じ土層といえる。9層は8層よりやや軟質で、白色粒子を含む黄褐色ロームで20cm、10層は黄褐色の粘土質の土でスコリア粒、白色粒子ともに非常に多量に含み火山砂ブロックの混入も多い。9層よりも軟らかく層厚は40cmと厚い。11層は10層と同質であるが火山砂ブロック、スコリア粒の混入が見られず、やや水つきの状態に感じられる。白色粒子は多量に含まれている。層厚は30cmほどである。12層は茶褐色土層で細礫、礫ともに多量に含む。土質自体はかなり軟質であるが岩盤層的なものと考えられ、水つきにより酸化されたためか赤みがかかっている。遺物は1層から2層にかけて黒耀石(剥片・コア)4点(50)縄文土器片が2点出土している。



第43図 C-44グリッド平面
セクション図(S=1/40)

[C-53グリッド] (第44図)

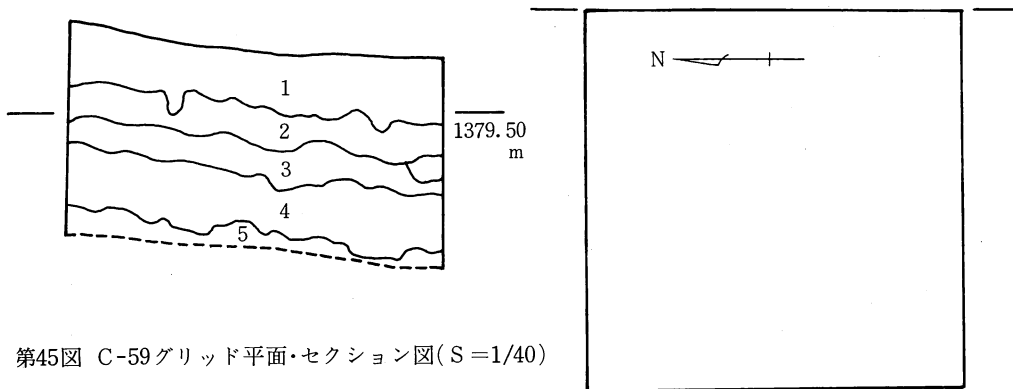
稜線から南方向に広がる広大な緩斜面のやや西寄りの中腹、標高1382.0mに位置する。層序は1層黒墨土40cm、2層黒土が10cm、3層暗褐色土(漸移層)20cm、4層がソフトロームで40cm、5層ハードロームとなる。遺構、遺物ともに検出されなかった。



第44図 C-53グリッド平面・セクション図(S=1/40)

[C-59グリッド] (第45図)

台地の緩斜面の東南の縁付近に位置する。東側は谷地形で本試掘坑から先は急激に落ち込んでいる。標高は1380.0mである。土層堆積状態は1層が黒墨土で30cm、2層黒土が20cm、3層暗褐色土が15cm、4層ソフトロームが30cm、5層ハードロームへと推移する。遺構、遺物の検出は見られなかった。

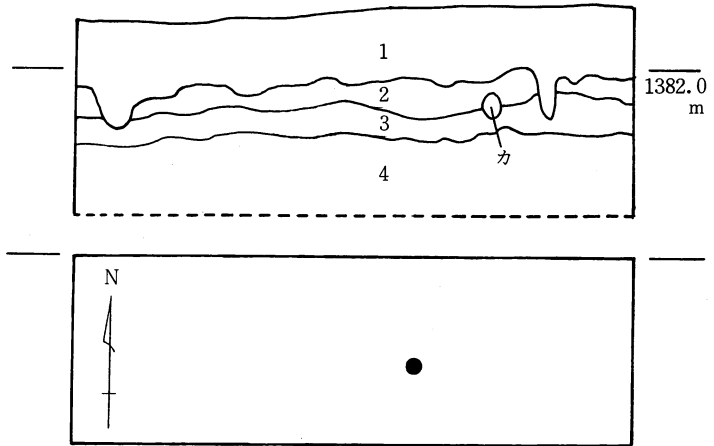


第45図 C-59グリッド平面・セクション図(S=1/40)

[C-64グリッド] (第46図)

台地の東側に位置する谷に落ち込む斜面中腹に位置する。陥し穴状遺構の検出の可能性もあったため1m×3mの幅広の試掘坑を斜面に対し直行させて設定した。標高は1382.3mであった。

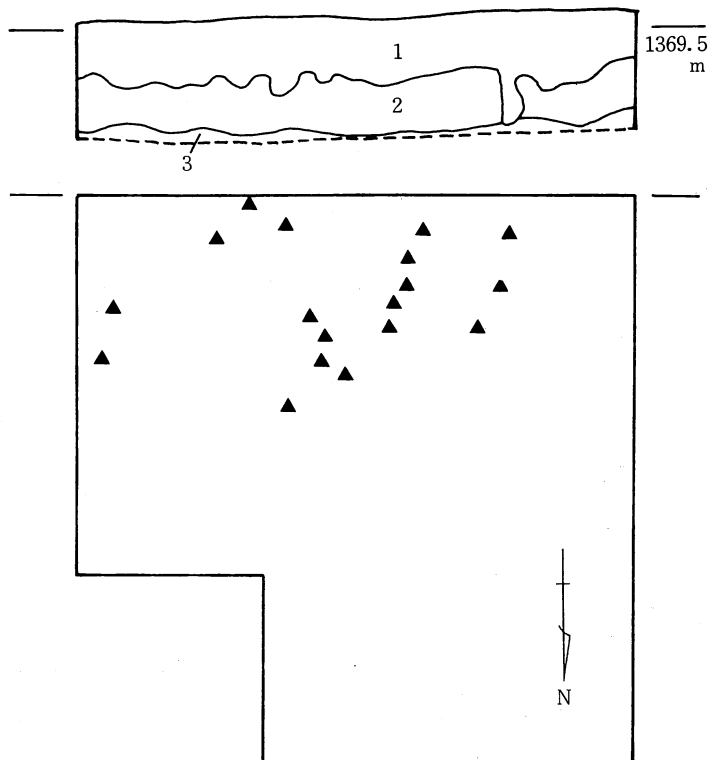
層序は1層黒墨土30cm、
2層黒土15cm、3層暗褐色土15cm、4層ソフトロームが30cmとなる。遺物は3層暗褐色土から黒耀石剥片が1点出土している。遺構は検出されなかった。



第46図 C-64グリッド
平面・セクション図(S=1/40)

[C-72グリッド] (第47図、第50図72)

南向きの緩斜面のほぼ中央部、やや上方寄りの標高1369.8mに位置する。当初2m×2mで調査を開始したが南東隅において遺物の集中が確認されたため若干拡張をして状況を把握しようとした。樹木等との関係もあり、拡張は1m程であったが、縄文土器片19点を検出することができた。これらはすべて同一個体の破片と考えられ、かなり砕け散った感じもするが他の試掘坑ではこのような出土状況を示したものがなく興味深い。遺物の出土状況から遺構の存在も考えられたが確認はできなかった。土層堆積状況は2層黒土において遺物が検出されたため3層暗褐色土上面までしか掘り下げを行っていないが、1層黒墨土が35cm、2層が25cmとやや厚くなっている。



第47図 C-72グリッド平面・セクション図(S=1/40)

(2) 遺物

a. 石器 (第48～49図)

今回のC地区の調査で得られた遺物は表採品も含めると黒耀石(石器・剥片・原石)104点、黒耀石以外の石製品(石器・剥片・原石)14点、土器片106点となり、昨年度のB地区に比べて多量である。このうち確実に旧石器時代に属するものとして黒耀石5点が把握される。その他の遺物はすべて縄文時代に属するものと考えられる。出土した遺物は微細なものも多いため、ここでは主要な遺物のみを報告する。

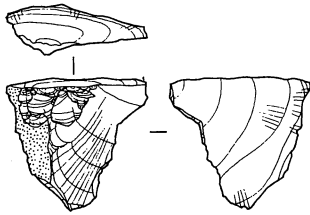
図示した39～41は22グリッド4層ソフトローム中から出土した黒耀石剥片である。4点出土したうちの3点を図示してある。39は現在長2.5cm幅2.8cmの剥片で、上半は折断によって失われている。折断面を打面とする二次加工が、剥片背面側にわずかに認められる。40は現在長3.3cm・幅2.6cmの剥片である。自然面を打面として剥離されているが、剥離時の破碎により右半が失われており、平面形態は整っていない。背面には左右方向からの打撃による剥離面が見られる。41は長さ2.9cm・幅2.4cmのやや寸づまりの剥片である。打面は複剥離打面で打点部付近にはパンチ痕が認められる。背面には一部に自然面が残り、右上方向からの打撃による2つの剥離面が見られる。

縄文時代の石器としては42以降が認められる。42は7グリッド、2層黒色土から出土した黒耀石製の石鏃である。基部は平基で、二等辺三角形に近い形状を呈し、長さは1.9cmである。裏面には素材の剥離面が部分的に残っている。43も黒耀石製の石鏃で26グリッドの黒色土から検出された。長さは2.2cmで基部には直線的な浅い抉りが入る。44は6グリッドで検出した黒耀石製のピエスエスキューで、剥片を素材とし、上下端につぶれとして微細な剥離痕が認められる。長さは2.4cmであった。黒耀石製のいわゆる定形的な石器は以上の3点のみである。

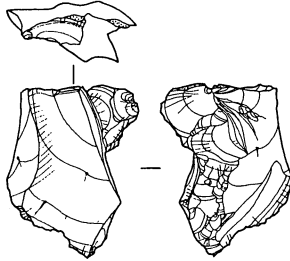
黒耀石以外の定形的石器としては、石匙が2点出土している。ピエスエスキューと同じ6グリッドでは45のチャート製の石匙が検出された。素材形状は不明であるが、つまみ部を有し、表裏面より縁辺に加工を施している。なおつまみについては2ヶ所認められ、当初から意識して加工したのか、再生の結果なのか不明であるが、2ヶ所つまみをもつ例も多いことからいわゆる縄文前期頃の定形的な石匙として捉える事ができよう。もう1点の石匙は図示した46で、40グリッドから多数の黒耀石剥片と土器片に混じって検出された。頁岩の横長剥片を素材とし、打面側をつまみ部として加工されている。片刃に加工された刃部には実際に使用されたことを物語る磨耗痕が認められ、刃角はやや急斜となっている。幅は4.9cmの、完形品である。

47は10グリッドから出土した頁岩製のいわゆる二次加工のある剥片で、横長の剥片を素材として、先端部分に表、裏の両面から加工を加えている。48も二次加工のある剥片で、こちらは黒耀石製である。剥片状の原石の一端を折り取り、その反対側の側縁の一部分を両面から加工を加えている。40グリッドから検出された。

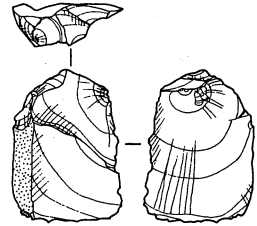
(旧石器)



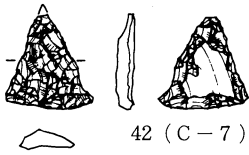
39
(C-22, No.9)



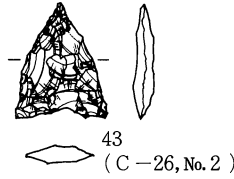
40
(C-22, No.10)



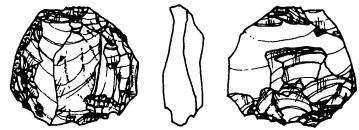
41
(C-22, No.11)



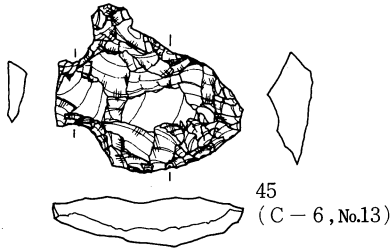
42 (C-7)



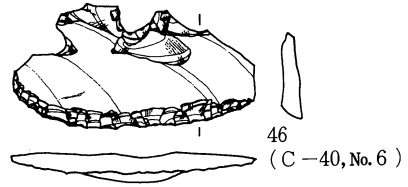
43
(C-26, No.2)



44 (C-6, No.16)



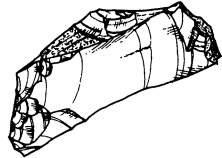
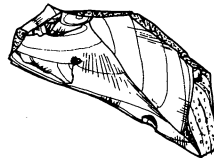
45
(C-6, No.13)



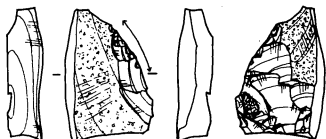
46
(C-40, No.6)



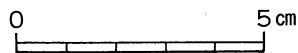
47 (C-10, No.8)



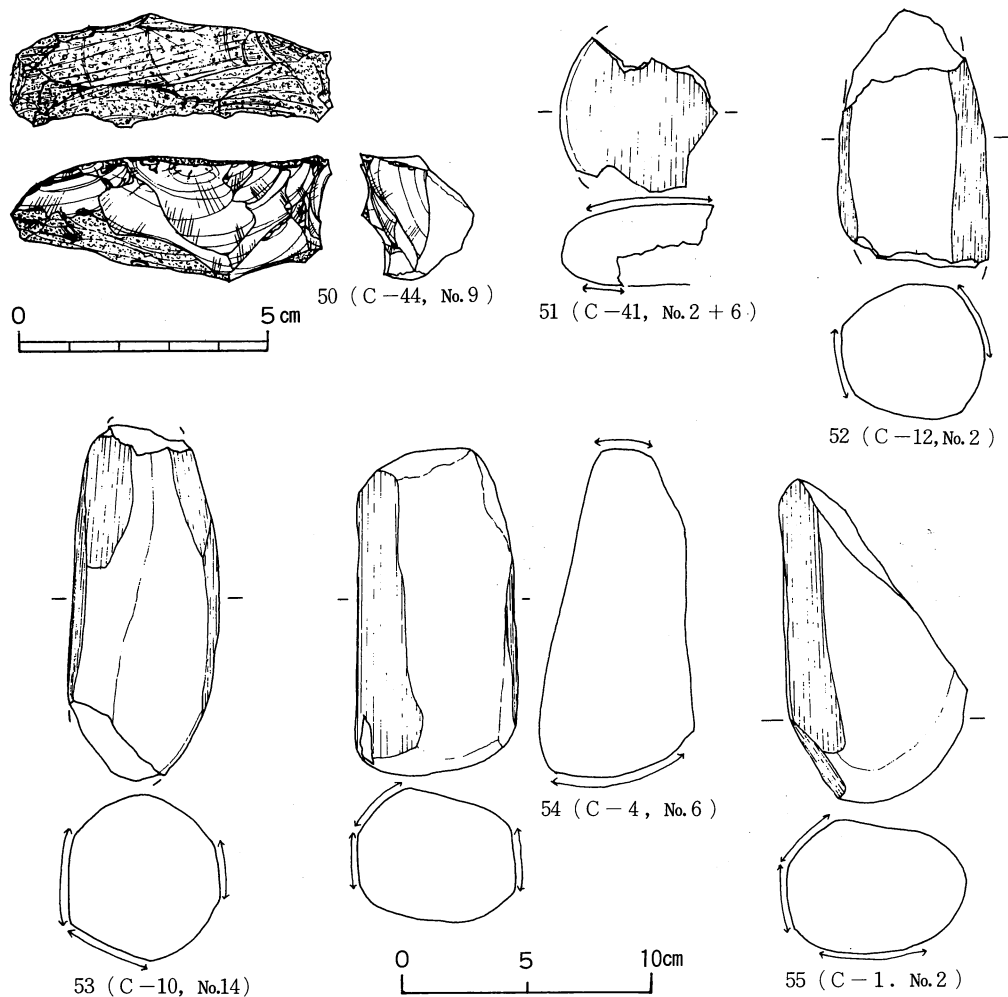
49 (C-22, No.5)



48 (C-40, No.9)



第48図 KR-C地区出土遺物(石器)その1 (S=2/3)



第49図 KR-C地区出土遺物(石器)その2 (50・S=2/3, 51~55・S=1/3)

次に石核については、全部で10点ほど出土している。その内の代表的なもの2点を図示した。49は旧石器時代の遺物が出土した22グリッドの2層黒色土から検出された石核である。黒曜石製の剥片を素材として、平坦な礫面に打面を設けている。そして複数回の剥片剥離作業を行った後90°の打面転移をして、剥片剥離作業が1回のみ行われている。50も板状の黒曜石を素材とした石核である。49と同じように平坦な礫面に打面を設け、複数回の剥片剥離作業を行う。なお側面の一部は折り取られている。

続いて礫石器についてであるが、今回の調査ではいわゆる特殊磨石(穀摺石)を中心に9点ほど出土しており、特に特殊磨石はNo.1遺跡からつながる台地の緩斜面のグリッドにかたよって発見されていて注意を必要とするところである。51は41グリッドで出土した安山岩製の磨石の接合資料である。2点の接合であるが、出土位置はさほど変わらず、埋没段階では分離していなかつ

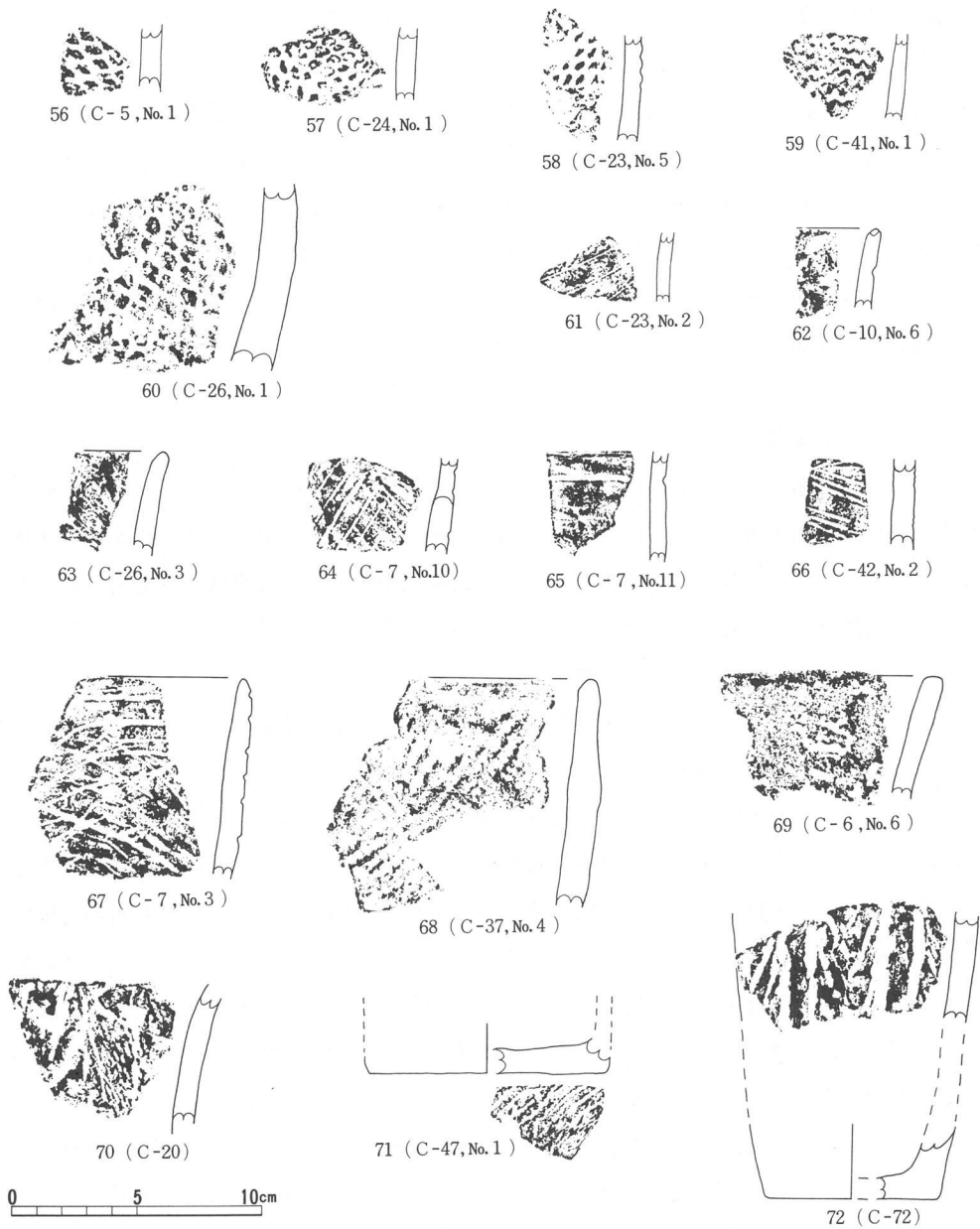
たものと考えられる。図を見ればわかるとおり、大部分を欠損しており、残りの破片の出土も見られなかったが、円盤状礫と想定される。なお、機能面は表裏両面に認められる。52～55はいわゆる特殊磨石である。すべて安山岩で作られている。52は12グリッドから出土したもので、礫上下端を欠損しており、現存長は10.2cmである。機能面は3面認められる。53は10グリッドから他の遺物とともに出土した特殊磨石である。礫上下端を欠損するが、機能面としては6面認められ、ほぼ全周近くに及んでいる。現存長は14cmである。54の特殊磨石は4グリッドから出土したもので、礫下端も含めた4面が機能面として認められる。さらに礫上端には敲打痕も認められ、いわゆる磨石としての機能のほかに敲石として使用されたことを物語っている。長さは12.5cmである。55は1グリッドから出土した特殊磨石で、上端を3分の1ほど欠損しており、現存長は13cmである。機能面は4面認められる。

b. 土器 (第50図)

今回の調査で出土した土器片は、前述したように106点で、そのすべてが縄文時代に属するものと考えられる。出土層位としては1層黒墨土、2層黒色土ともに出土しているがやや2層からの出土が多い。土器の種類としては押型文土器、沈線文系土器、貝殻腹縁にて施文されるもの、繊維を含んだ無文土器などバラエティーに富んでおり、その他に曾利系とみられる土器も数片見つかっている。以下、これらのうち主要なものを記述する。

56～60は押型文土器である。図示した5点の他に4点出土しており、文様としては楕円文が8点と多く、山形文は1点のみの出土であった。56は5グリッドから出土した楕円文土器で、小破片のため不明な点が多いが、おそらく長さ2cm程の原体を横方向に回転させ施文しているものと思われる。表面は赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には若干の砂粒、石英粒が含まれる。57も楕円文で、やや縦長の楕円と小粒の楕円の二種類の原体を使用した、異方向の密接施文である。破片中央部は文様がややつぶされている。胎土には砂粒と長石粒を含み、色調は黄褐色で焼成は良好である。58は横方向に施文された楕円文である。一見すると帯状施文のようにもみられるが、破片下部の無文部にもいったん楕円文が施文されたのち、磨り消したような痕跡が認められる。表面は黒褐色、裏面はやや赤みを帯びた褐色を呈し、胎土にはパミスと思われる白色粒子を多量に混入する。焼成はやや不良である。59は磨耗が進んでいるため文様が不明瞭であるが山形文土器の破片である。小破片のため断定はできないが3段1単位の原体を横方向に回転施文している。褐色を呈し、胎土には長石粒及び石英粒が含まれる。60はいわゆる高山寺式と考えられる押型文土器で、粗大な楕円文(1粒約8mm)にて構成されている。器壁の厚さは1.5cmと、大変厚く、胎土には長石や石英粒を多量に含んだやや荒い作りとなっている。また若干の繊維の混入もみられる。色調は褐色で、焼成は良好である。

61と62は貝殻腹縁により施文された土器片である。61は斜行沈線文と貝殻腹縁文により施文された胴部破片で、明褐色を呈する。胎土にはパミスと思われる多量に白色粒子が混入している。



第50図 KR-C地区出土遺物(土器)(S=1/3)

62は暗褐色を呈する口縁部破片である。器面の他に口唇面にも貝殻腹縁による施文が認められ、外面については察痕調整が施されている。長石粒及び石英粒を含み、焼成は良好である。

63から67はいわゆる沈線文系の土器片である。63は明褐色を呈する深鉢の口縁部破片で、口縁下部分に棒状工具により区画した後、その下にはやや細目の沈線文を斜行させている。胎土には

長石粒及び繊維を微量含んでおり、焼成は良好である。64はやや太めの工具を用いた斜行沈線による幾何学的モチーフが特徴的である。小破片のため全体を窺う事はできないが、羽状に施文されている。また表面にはややススの付着が認められるが、器面調整はなされておらず、凹凸が激しい。色調は黒褐色で、胎土には砂粒、雲母を少量含んでいる。65も64と同じ7グリッドから出土した沈線文系の土器であるが、こちらは太い丸棒状工具により横方向に施文されている。土器の上半と下半を区画するためとも考えられ、下半は無文となっている。胎土には砂粒と雲母が目立ち、色調は暗褐色で焼成は良好である。66は3本1単位の斜行する沈線を異方向に施文している。褐色を呈し、石英粒を胎土に含んでいる。67は黒褐色を呈する口縁部破片である。口縁部直下に横方向2本の沈線を施文し、胴部上半はやや深めの斜行沈線を交差させている。器面調整はなされていないため、表面は凸凹しており、やや荒い作りになっている。胎土には長石及び雲母を多量に含み、繊維も若干混入している。

68は深鉢の口縁部破片である。器形は口縁部付近で外反する波状口縁をもち、口唇部は丸頭状の断面形を呈する。器面は荒れが激しく調整は不明であるが、節の荒いLRの縄紋を施文しており、部分的に炭化物が付着している。胎土にはパミス様の白色粒子と粒の荒い砂粒が多量に混入しており、表面は黒褐色、裏面は褐色を呈している。焼成は良好である。

69は無文土器の口縁部破片で、平縁で口唇断面形状はやや角の取れた角頭状を呈する。器面調整については、内面はナデで比較的平滑であるが、外面はケズリによるとみられる擦痕が残る。胎土には微量の繊維が含まれ、パミス様の白色粒子及び粒の大きな砂粒が多く含まれていて、そのため器面には細かな凸凹が残っている。色調は暗褐色で、焼成は良好である。

70は20グリッド付近において、流水により裸地化し、黒色土が流されてローム面が見え隠れするような状況のもと、黒耀石剥片などと伴に表採された深鉢の胴部破片である。撚糸文を地文に持ち、角棒状あるいは筥状工具にて条痕文を縦方向に施文している。表面は赤褐色を呈し、胎土には長石粒及び繊維を含む。

71は47グリッドから出土した底部破片である。推定直径は9.5cmで、胴部等は不明である。底面には撚糸文が施文されている。胎土にはパミスと思われる白色粒子が多量に含まれており、明褐色を呈し、焼成は良好である。

72は72グリッドにおいて検出された中期の深鉢片である。出土したすべてが同一個体と考えられるが、接合関係にあるものは少なく図上で一部復元できたに過ぎない。底部の推定直径はおおよそ7.0cmで、やや小振りの土器である。胴部は隆帯による垂線で区画した後、沈線によるハの字文で充填しており、中期曾利式の典型的な土器として捉えられよう。色調はやや赤みがかかった褐色で、焼成は良好である。また胎土には長石や砂粒を多量に含んでおり、内面の一部には炭化物の付着したあととも認められた。

以上が今年度の調査で出土した主要な遺物である。記述した他にも沈線文や縄文、無文土器が見受けられる。

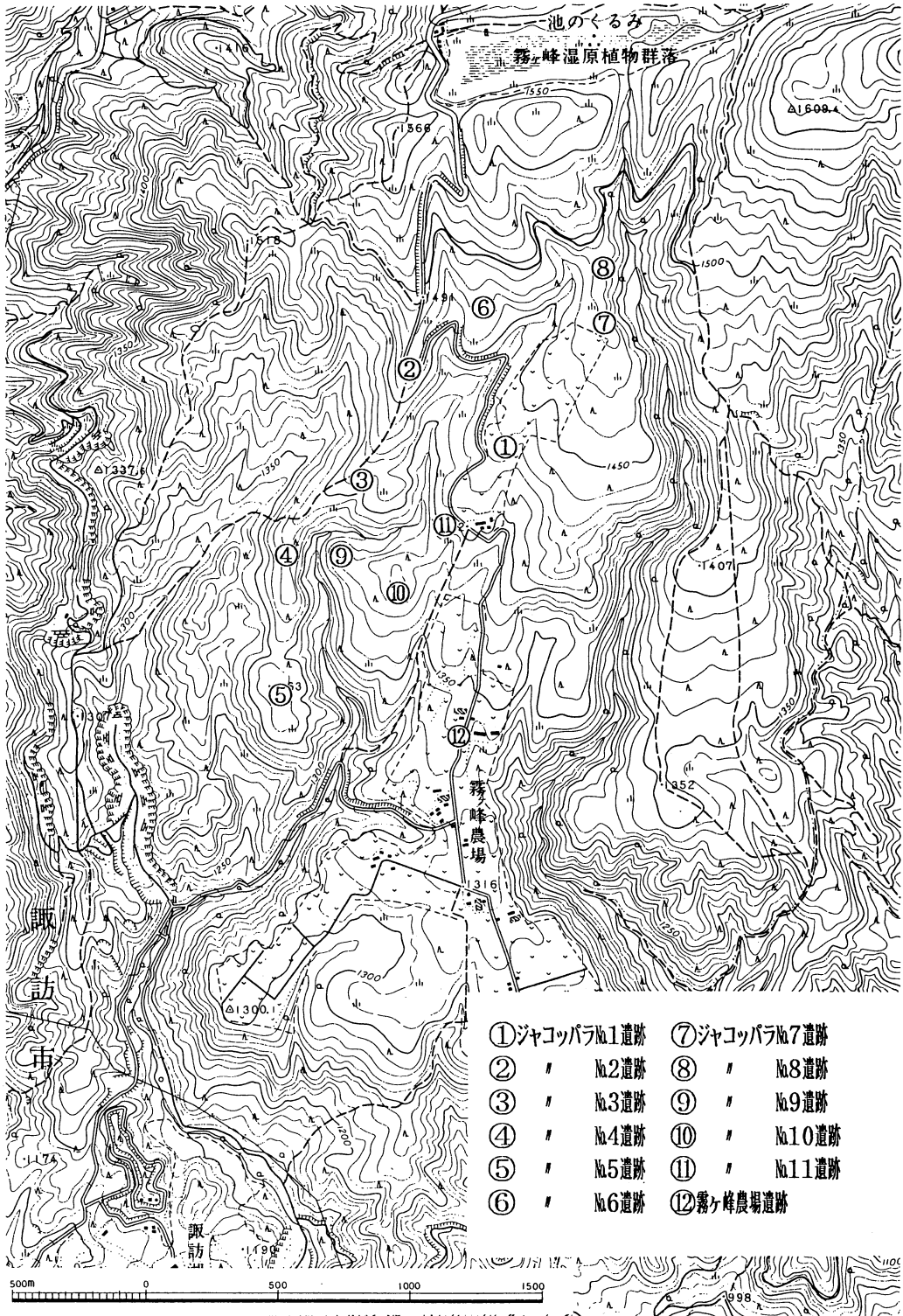
(3) KRC地区の調査のまとめ

今年度分布調査を行なったC地区は、昨年度調査したB地区の本沢(横川河)を挟んだ対岸にあたり、なおかつ昭和62年度に調査の行われたジャコッパラNo.1遺跡の立地する台地と同じ尾根筋である。合計77ヶ所の試掘坑を設定し、前述したように29ヶ所の試掘坑において、遺物・遺構の検出をみた。全般的に昨年のB地区に比べると、表土および2層の黒色土の堆積が厚く、基本層序としても昨年度は1層で把握していた黒色土であるが、今回は黒墨土と黒土の2層に分離して把握している。この要因については不明な点が多いが、B地区に比べて緩斜面が多いこと、瘦せた馬の背状の尾根の稜線沿いだったB地区に対し、広めの平坦部をもつことなどが考えられよう。また、黒色土が深いいため今回の調査においては縄文時代に属すると思われる遺物・遺構が数多く検出されている。昨年の調査に於いては2片しか発見されなかった土器片も多量になり、逆に旧石器と思われる遺物の出土は減っており、対照的な状況である。まだデータ的に少ない状況ではあるが、C地区における時代の中心が縄文時代に下ってきている可能性もある。実際に多種多様の土器片の出土および生活用具である石匙や特殊磨石の出土など、定住性あるいは集落の存在すら窺える資料を得ることができている。

以上の結果から、今年度の調査においては3ヶ所の遺跡を新たに確認した(図51)。表3は遺跡別にデータをまとめたものである。それぞれの遺跡について考察すると、ジャコッパラNo.9遺跡は本沢に突き出す形で形成されている小規模の独立丘の頂部平坦部とそのまわりの鞍部を中心とする。頂部平坦部は約500㎡程の広さであるが、計3つの試掘坑から黒耀石剥片や縄文土器を検出している。土器は山形押型文をはじめ沈線文及び無文土器が出土している。周辺の鞍部では40グリッドに於いて多量の遺物が検出され、チャート製の石匙も1点出土している。

ジャコッパラNo.10遺跡は広大な台地及びそれに伴う緩斜面をその範囲とする。遺物の検出のあったグリッドは台地頂部の平坦面とNo.9遺跡に繋がる尾根筋のグリッドで、南向きの緩斜面については遺物出土が少ない傾向にある。緩斜面については調査の都合上、全面をカバー出来なかったため今後の調査によって出土量が増加するものと考えられる。なお緩斜面において注目されるのは縄文中期曾利式の土器が出土していることで、これらの破片は同一個体のものと考えられ、また縄文中期と考えられている霧ヶ峰農場遺跡が沢を挟んで対岸の台地に展開していることなどからジャコッパラ遺跡群にも縄文中期の時期に人間がいた事を物語っている。台地の平坦部については、C地区では唯一ローム層中から黒耀石剥片が検出され、旧石器時代のブロックとして把握される。縄文時代については、土器では沈線文、縄文、押型文、無文、貝殻腹縁文などが検出されている。押型文は高山寺式期の楕円文で、諏訪市内では西山地区の3遺跡(湯の上、本城、御屋敷)で確認されているのみで、東山地区においては初めて検出されたものである。

No.11遺跡は、No.1遺跡から繋がる台地の裾の平坦部と本沢に面する斜面をその範囲とする生業の跡として陥し穴が検出され、No.1遺跡において検出された陥し穴群との関係が注目される。遺物を伴っていないため時期の確定は出来ないが周辺のグリッドにおいて出土した土器に関しては、



第 51 図 ジャコッバラ遺跡群遺跡分布図 (S=1/25,000)

縄文早期と前期の年代観をもっており、No.1遺跡の陥し穴について縄文前期という時期を得ていることからさほど違いはないものと考えられる。遺物は押型文や沈線文系の土器で、細久保式及び田戸系の土器が主体となっている。石器については頁岩製の石匙に前期的な様相がみられるが、特殊磨石の出土量などから考えると、本遺跡が押型文期に拠点的な意味合いを持っていたことを窺わせるもので、早期における生業活動を知る貴重な資料である。

遺 跡 名	立 地	対応グリッド名	年 代	遺 構	遺 物
ジャコッパラ No.9遺跡 (第51図⑨)	小規模の独立丘及びその周辺の周辺	K R C 4 0 ~ 4 4 4 7	縄文 早期 ~ 前期	なし	(縄) 黒耀石剥片 土器片 ・沈線文 ・縄文 ・無文 石匙 (チャート) 磨石
ジャコッパラ No.10遺跡 (第51図⑩)	台地平坦部及び緩斜面	K R C 2 2 ~ 2 4 2 6 ・ 2 8 3 7 ・ 5 4 5 6 ・ 6 4 7 2	旧石器 ・ 縄文 早期 ~ 中期	ブロック (1)	(旧) 黒耀石剥片 (縄) 黒耀石剥片 土器片 ・沈線文 ・縄文 ・押型文 ・無文 ・貝殻腹縁文 ・曾利式土器 石鏃 (黒耀石)
ジャコッパラ No.11遺跡 (第51図⑪)	台地裾平坦部及び緩斜面・斜面	K R C 1 ~ 1 0 1 2 ~ 1 4 1 8 ・ 2 0	縄文 早期 ~ 前期	陥し穴 (1)	(縄) 黒耀石剥片 土器片 ・沈線文 ・縄文 ・押型文 ・無文 ・貝殻腹縁文 石鏃 (黒耀石) 石匙 (頁岩) 特殊磨石

第3表 K R C 地 区 遺 跡 別 デ ー タ ー

V ジャコッパラ遺跡群のテフラ

山梨文化財研究所 河西 学

1. はじめに

霧ヶ峰高原一帯は黒耀石原産地に近く、旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く分布している。ジャコッパラ遺跡群周辺には、遺物の分布が濃密である。今回発掘されたジャコッパラNo.8 遺跡からは、旧石器時代の黒耀石製石器が褐色ローム中から多数出土している。この地域での石器がテフラ層序学によって位置づけられた例はまだ多くない。ジャコッパラNo.8 遺跡の石器の層準をテフラ層序学によって明かにし、広域的な石器の比較を可能にすることを目的としてテフラ分析を行った。

2. 地質

ジャコッパラ遺跡群の地質は、ジャコッパラNo.8 遺跡において上位より、黒色土層(I層)、黒褐色～暗褐色漸移層(II層)、褐色ソフトローム層(III・IV層)、褐色ハードローム層(V・VII層)から構成される。石器は主としてIII～IV層から出土している。VII層は青灰色安山岩片赤褐色軽石質粒子などを多く含む降下テフラ層である。

3. 試料・分析法

ジャコッパラNo.8、ジャコッパラNo.7 遺跡および試掘調査KRC27グリッドの試料を分析した。ジャコッパラNo.8 遺跡とKRC27グリッドの分析試料は、5cm幅で連続的に採取された試料の中から原則として奇数番号の試料を、一部では偶数番号を含めた連続試料を分析に供した。

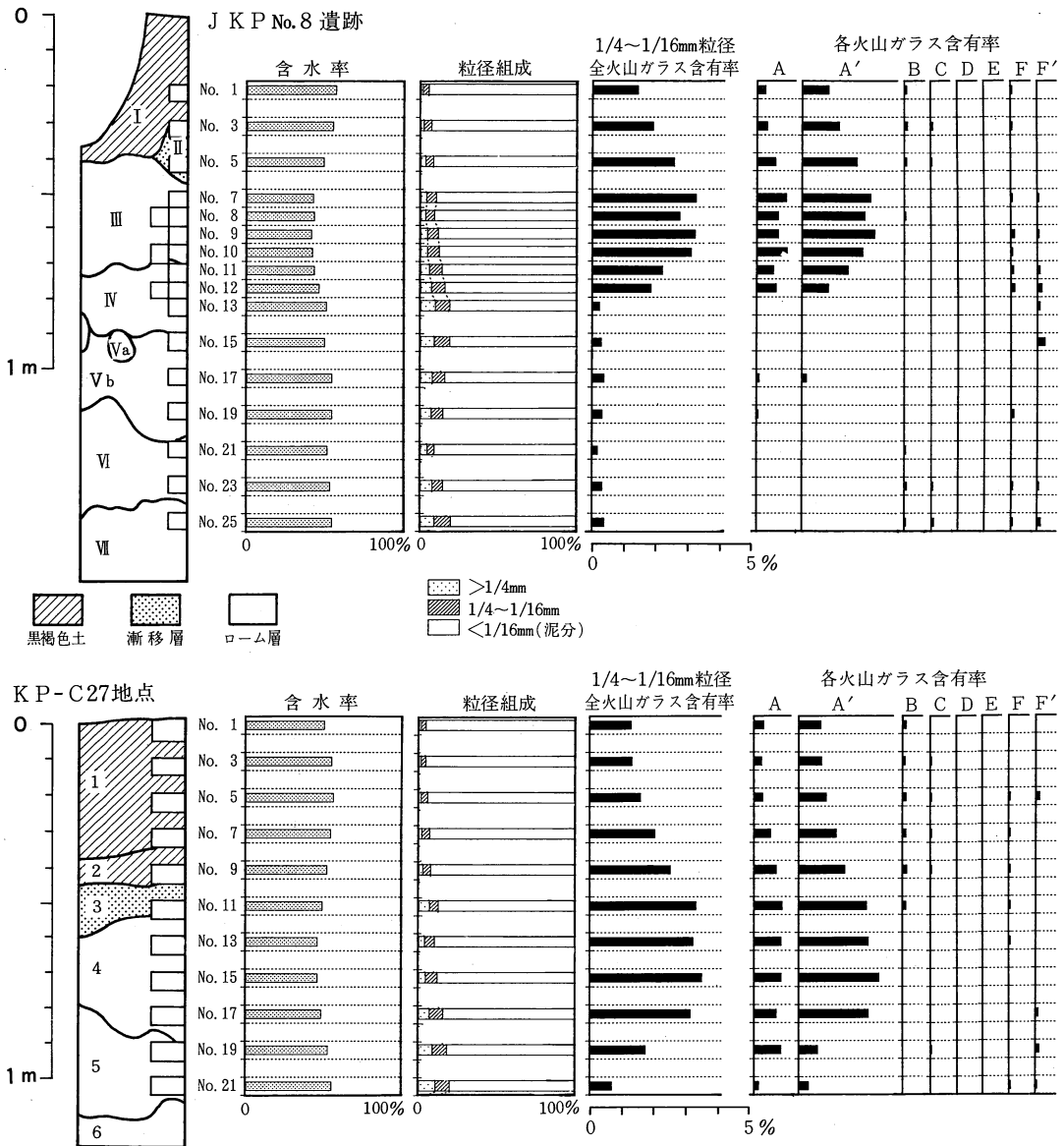
試料は、湿ったまま約20gを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩(#250)で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩(#60, #250)を用いて>1/4mmおよび1/4～1/16mmの粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析に用いた試料の乾燥重量および含水率

地点	試料番号	火山ガラスの形態	色調	屈折率(モード)	対比されるテフラ
JKP-No.8 KRC27 JKP-No.7	No.9	バブルウォール(A・A')型	無色	gl: 1.499-1.501 (1.500)	始良Tn火山灰(AT)
	No.15	バブルウォール(A・A')型	無色	gl: 1.499-1.501 (1.500)	始良Tn火山灰(AT)
	スコリア			opx: 1.706-1.710 (1.708)	八ヶ岳起源テフラか?

gl:火山ガラス opx:斜方輝石

第4表 テフラの屈折率測定値と対比

は、別に同一試料約5~10gを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105℃、5時間乾燥して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4~1/16mmの粒径砂をスライドガラスに封入し偏光顕微鏡下で行った。1試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が500粒以上になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木(1980)の方法に従った。細粒結晶を包有するF型火山ガラスはF'型として区別した。また火山ガラスの屈折率は、位相差型偏光顕微鏡による浸液法(新井,1972)で測定した。



第52図 ジャコッパラ遺跡群試料の含水率、粒径組成、火山ガラス含有率

4. 分析結果

火山ガラスの屈折率測定値を第4表に示す。偏光顕微鏡下での計数結果を第5表に示す。これをもとに含水率(註1)、粒径組成、1/4~1/16mm全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第52図に示す。なお1/4~1/16mm全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1/4~1/16mm粒径の火山ガラスの割合で表示した(註2)。

(1) ジャコッパラNo.8 遺跡

無色バブルウォール型(A・A'型)火山ガラスは、No.12で増加しはじめ、Nos.9~10で極大に達する。No.9での火山ガラス屈折率は、1.499~1.501、モード1.500である。これらの無色バブルウォール型火山ガラスは、形態的特徴および屈折率から始良T n火山灰(AT:町田・新井,1976)に同定される。ATの降灰は、約2.1~2.2万年前とされている。ATの降灰層準は、No.10を中心とするNos.11~9の範囲に推定される。

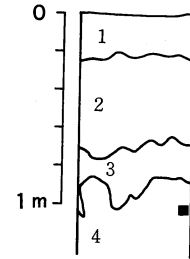
Nos.3~5付近を中心にNo.8から上位で塊状(B型)~中間型(C型)火山ガラスがきわめてわずかに検出される。これらの火山ガラスは、形態的特徴および層位的にATの上位であることから立川ローム層中のUG(約1.2万年前)に対比される可能性が高い。

第5表 計数火山ガラス粒数 (+は計数以外の検出を示す)

地点 試料番号	J K P No. 8											K R - C グリット 27															
	No. 1	No. 3	No. 5	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 15	No. 17	No. 19	No. 21	No. 23	No. 25	No. 1	No. 3	No. 5	No. 7	No. 9	No. 11	No. 13	No. 15	No. 17	No. 19	No. 21
A 無色	39	39	57	76	62	51	67	34	37	3		6	4			49	38	36	57	69	76	67	56	42	49	12	
A 褐色																+											
A' 無色	112	130	161	174	172	161	132	90	48	2		11	2	1	1	1	116	111	110	139	151	191	181	170	133	38	27
A' 褐色	2			1									1			2	1	2							1		
B 無色	15	15	11	4	6	2	3	1	2	2	2	2	1	9	9	4	22	14	18	16	15	12	4	2		1	2
B 褐色													1														
C 無色	8	12	6	2	1	3	2		1			2	3	3	5	4	7	13	9	7	7	3	3		1	3	2
C 褐色		1	1		1	1	1	1	1	1	1	1					1	1		1						1	1
ガ C 緑褐色																											
D 無色	1						1															1			1	1	1
E 無色																											
ラ F 無色	10	6	1	6	2	8	4	6	8			2	5	4	5	3	7	4	7	9	7	6	4	2	2	1	1
F 褐色		2				2	2	1		1			2	1			1	3	1		1		1	1	1	1	4
F 緑褐色	1	1																									
ス F' 無色	7	4	4	4		6		4	3	4	5		1	5	4	5	2	5	11	1		2			1	4	1
F' 褐色		2		1			4	2	6	1	8	2	2	1	2	2		2	1		1				5	3	5
F' 緑褐色																			1	3							
その他	305	288	259	232	256	267	284	362	394	487	484	474	478	476	474	480	293	308	302	270	249	209	240	269	313	428	694
合計	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	530	750

(2) ジャコッパラNo.7 遺跡

ジャコッパラNo.7 遺跡の4層でテフラ試料を採取した(第53図、註3)。本試料は、No.25を含むジャコッパラNo.8 遺跡VII層に対比されると考えられる。このテフラ試料は、全体に褐色(7.5YR4/6)で粗粒砂~極粗粒砂大(最大径3mm)の赤褐色風化軽石粒子や青灰色安山岩片および鉍物粒子を多く含む1/4~1/16mm粒径砂分の実体鏡観察では、重鉍物量が多く、斜方輝石>単斜輝石・角閃石・不透明鉍物であり、斜長石も含まれる。斜方輝石の屈折率は、 $\gamma=1.706-1.710(1.708)$ である。厚い層厚をもつ降下テフラであることから八ヶ岳テフラの可能性はある。



第53図 No.7 遺跡試料採取層位

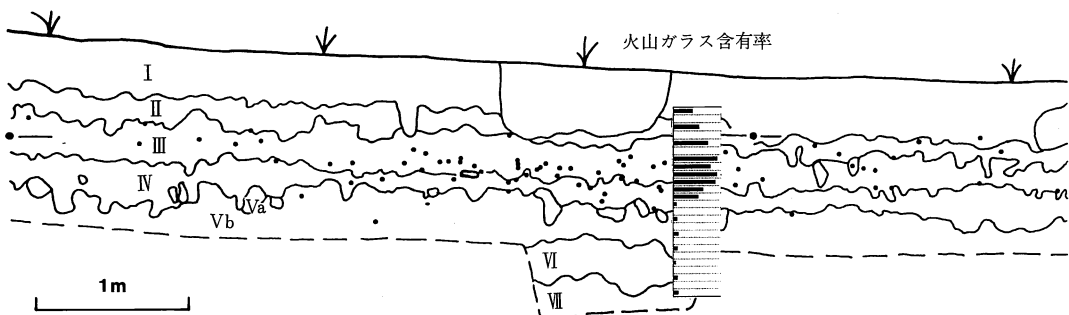
(3) KRC 27 グリッド

無色バブルウォール型火山ガラスは、No.19で増加しはじめ、No.15で極大に達する。No.15での火山ガラス屈折率は、1.499~1.501、モード1.500である。これらのバブルウォール型火山ガラスは、形態的特徴および屈折率からA Tに同定される。A Tの降灰層準は、4層下部のNos.17~15付近に推定される。

Nos.11~1で塊状(B型)および中間型(C型)火山ガラスがきわめてわずかに検出される。形態的、層位的特徴からジャコッパラNo.8 遺跡と同様にU Gに対比される可能性が高い。

5. 石器群とテフラ層位

ジャコッパラNo.8 遺跡での石器群は、主としてIII~IV層から出土している。III層は分析試料のNos.6~10に、IV層はNos.11~13に相当する(第54図)。



第54図 JKP No.8 遺跡の遺物分布と火山ガラス含有率(黒点は遺物)

一般にATにみられるテフラ粒子の分散は上方に大きく下方に少ない傾向を示す。したがって火山ガラスの含有率曲線は、下部で急激に立ち上がりピークから上方には緩やかに減少するいわゆるヴィーナス曲線を描く。山梨県高根町丘の公園第6遺跡、佐久市立科F遺跡などのハヶ岳周辺遺跡では、AT純層がレンズ状あるいはブロック状に識別された断面においてテフラ分析がなされている(河西,1990,1991)。これらの地点でのAT降灰層準は、火山ガラス含有率極大部下部に設定されている。これは早津(1988)の指摘とも一致する。

ジャコッパラNo.8遺跡でのAT火山ガラスの極大部はNos.7~10あるいはNos.9~10とみなせることから、降灰層準は前述のとおりNo.10を中心とするNos.11~9の範囲に推定される。これは、III層とIV層の境界部に相当する。本地点では、火山ガラス含有率曲線下部がKRC27グリッドと比較して緩やかであることから、堆積物の移動しやすい環境がAT以降に存在したと推定される。このことは火山ガラスばかりでなく石器も堆積後に移動したであろうと推測されることから、両者の関係の厳密な議論は困難である。III層下部に集中している多くの石器は、ATと同層準かあるいはATより上位と推定される。IV層下部からV層中に検出される遺物はATより下位と考えられる。またUGがII層(Nos.3~5)に検出されることから石器群は、UG(約1.2万年前)より下位と考えられる。

註1 全重量に対する水分量の割合。湿重基準含水率。

註2 形態X型の火山ガラスの含有率Axは、

$$Ax(\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$$

で算出される。ただし、

B: 試料の乾燥重量(g)

C: 1/4~1/16mm粒径砂分の重量(g)

D: 計数した1/4~1/16mm粒径粒子の総数

註3 ここでは定性的分析だけを行った。

引用文献

- 新井房夫 1972 「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11, 254-269
- 遠藤邦彦・鈴木正章 1980 「立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』13, 19-30
- 早津賢二 1988 「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー—ATにまつわる議論に関係して—」『考古学研究』13, 18-32
- 河西 学 1990 「丘の公園第5遺跡・第6遺跡のテフラ」『丘の公園第5遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第56集, 33-41

河西 学 1991 「立科F遺跡のテフラ」『立科F遺跡』

町田 洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—始良T n火山灰の発見とその意義—」『科学』46, 339-347

VI 調査のまとめ

【調査の意義】

霧ヶ峰高原およびその周辺は本州最大の黒耀石産出地である。黒耀石の利用は旧石器時代から始まり、旧石器時代人の使用する石器の材料として関東地方などの広い範囲で使用され、縄文時代においても交易などの主役であったといえよう。過去の調査で黒耀石の露頭や原産地直下の遺跡は徐々にその様相が解明されてきたが、それを取り巻く遺跡については山林や原野に阻まれ遺跡そのものの存在が不明であった。そんななか大規模リゾート開発の計画や県教育委員会の黒耀石原産地遺跡調査の話が持ち上がり、このジャコッパラ帯の分布調査が計画された。ジャコッパラ帯を含む霧ヶ峰南麓にはこれまで踊場湿原の周囲に形成された旧石器時代のナイフ形石器や黒耀石剥片を出土した池のくるみ遺跡群や縄文時代前期末に属すると考えられる陥し穴を14基検出したジャコッパラ遺跡（No.1遺跡）などの存在が確認されているが、それ以外の山間部や原野については不明な点が多く、分布調査等もほとんど為されていない状況であった。そのため市教委では平成3年度より調査団を組織して、遺跡分布予備調査を始めることとなった。

山間部の分布調査は平野部と違い、耕作などによって遺物等が表面に出てくるものが少なく、踏査だけでは不明な点が多いため、試掘を含めた分布調査を行った。その結果新たな遺跡を発見することができた。このことは今後の分布調査に対しても、この手法が有効であることを示すとともに、山間部における埋蔵文化財包蔵地の把握の一手段として評価されよう。

【調査の成果】

今年度の調査ではNo.6～No.11遺跡までの6遺跡を新たに発見した。これで昨年度から通算して9ヶ所もの遺跡を発見したことになる。時期別にみると旧石器時代が3遺跡、縄文時代が4遺跡で、両時代にまたがるものが2遺跡である。とくに大建工業の開発地域においては、工事立会いから新たに3つの遺跡を発見し、保護協議によって記録保存の処置が取られ、最悪の事態を逃れたのは不幸中の幸いであった。No.6遺跡では陥し穴群の調査が行われ、No.8遺跡においては黒耀石の加工場とも思わせる多量の石器および剥片類などが、面的に調査されたことはたいへん意義深いことである。

各遺跡の成果については、前述しているので省略するが昨年度と今年度の分布調査によって、いわゆる遺跡分布について今までいわれていた湿地ないしは水場の周辺に遺跡が分布するのは別に尾根筋や台地上にも人間の痕跡はしっかりと刻まれていることが判明した。これらの遺跡が湿地周辺に展開する遺跡と性格を異とするのかどうか今後の研究課題となろう。また黒耀石の供給基地として、これらの遺跡が意味するものを今後の調査研究で明らかにしていく必要がある。そしてそれが黒耀石原産地と消費地をつなぐ遺跡としてのジャコッパラ遺跡群の重要性を示すものであると思う。



1. ジャコッバラNo.1遺跡からB地区のNo.3遺跡周辺を望む



2. 作業状況

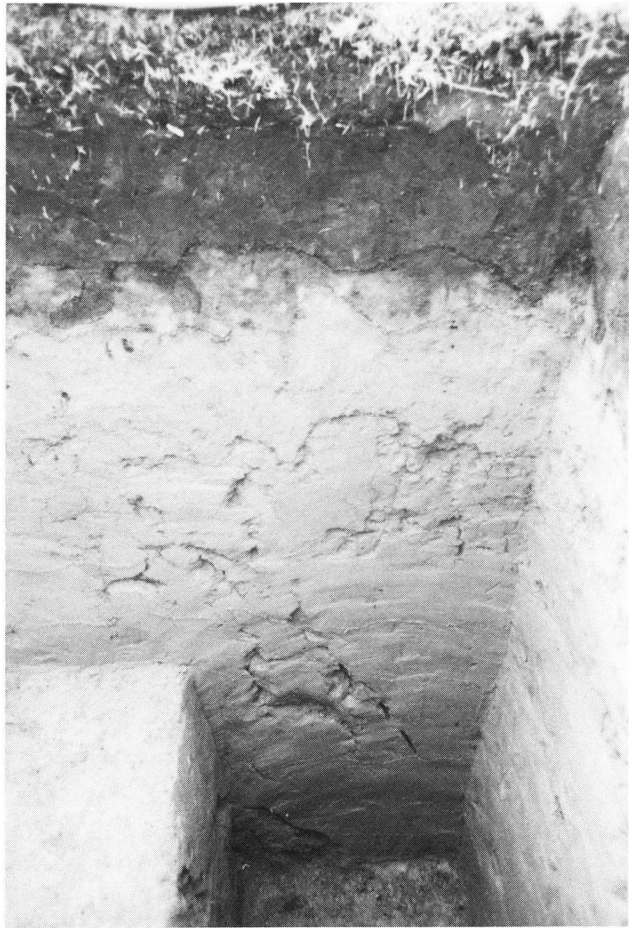


3. KRB-3グリッド遺物出土状況 (H3)

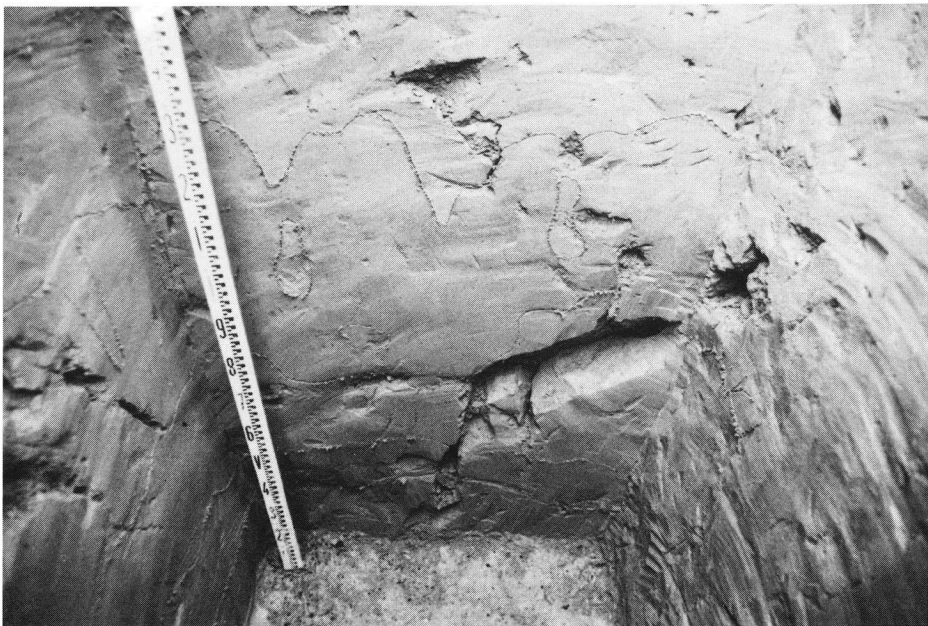


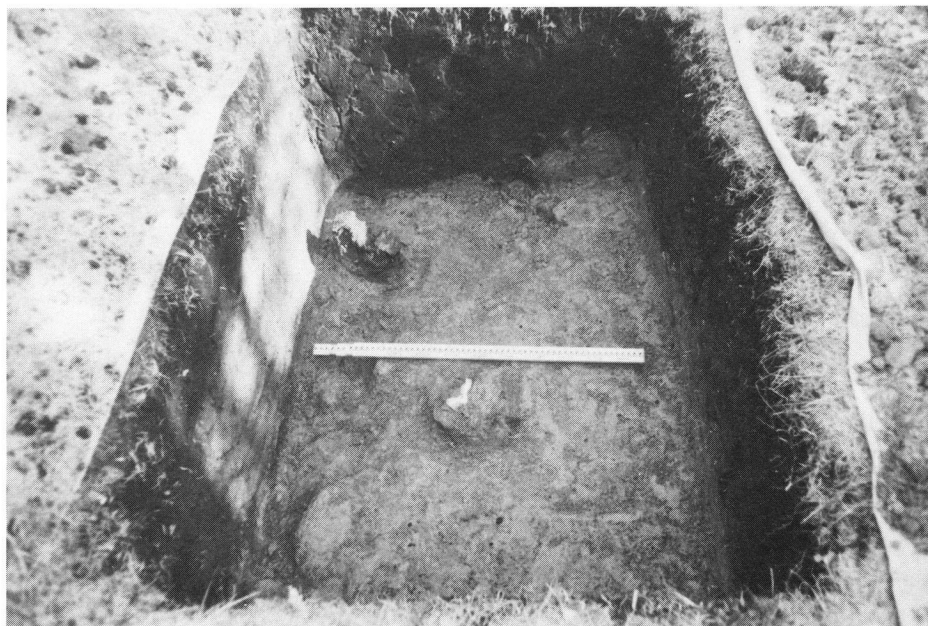
4. KRB-19グリッド風倒木痕断面 (H3)

5. KRB-37グリッド
土層堆積状況(H3)

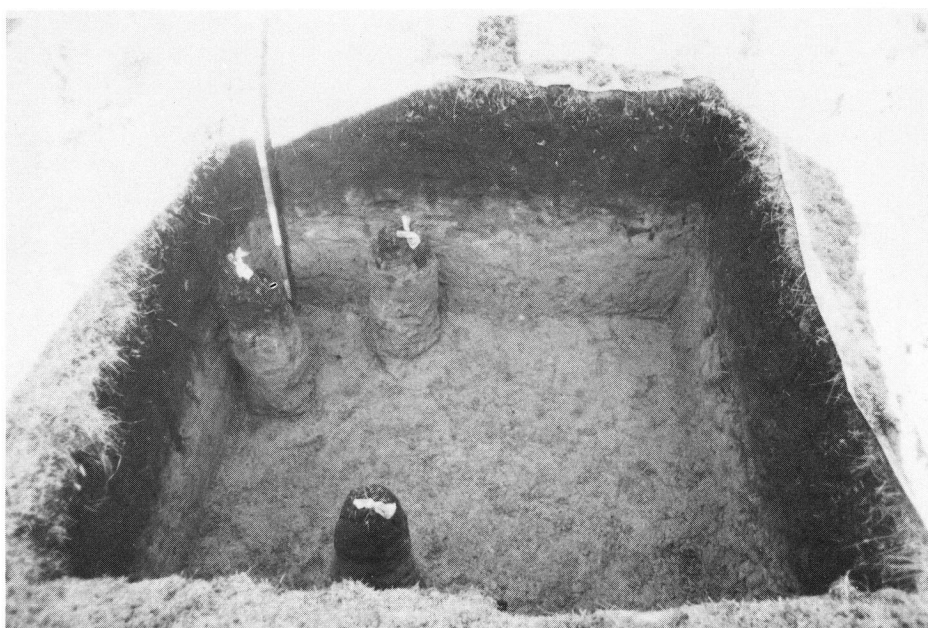


6. 同上 ハードローム層中
のクラック





7. KRD-45グリッド遺物出土状況 (H3)



8. KRB-47グリッド遺物出土状況 (H3)



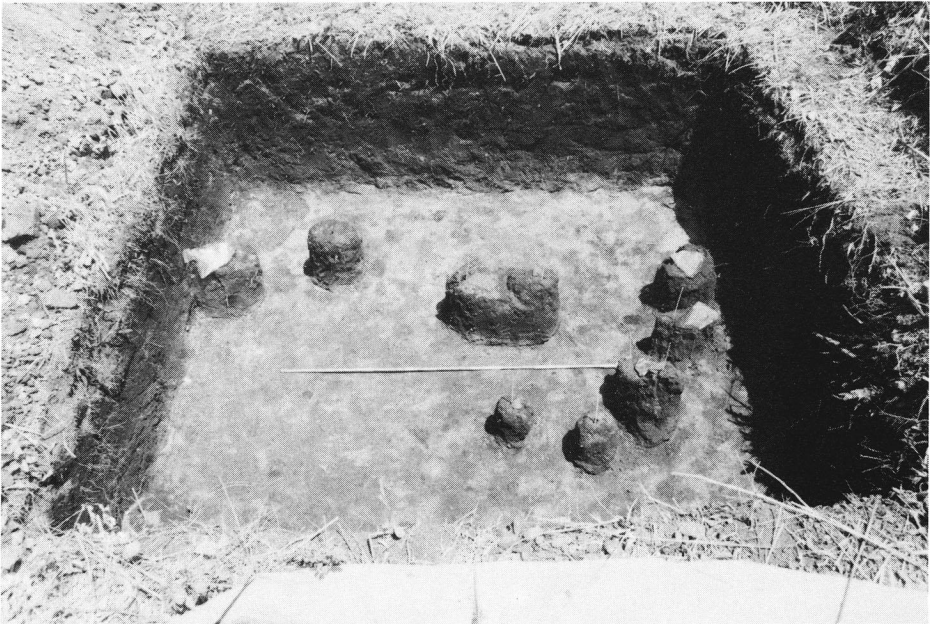
9. KRB-40グリッド陥し穴状遺構 (H3)



10. KRB-55グリッド遺物出土状況その1 (H3)



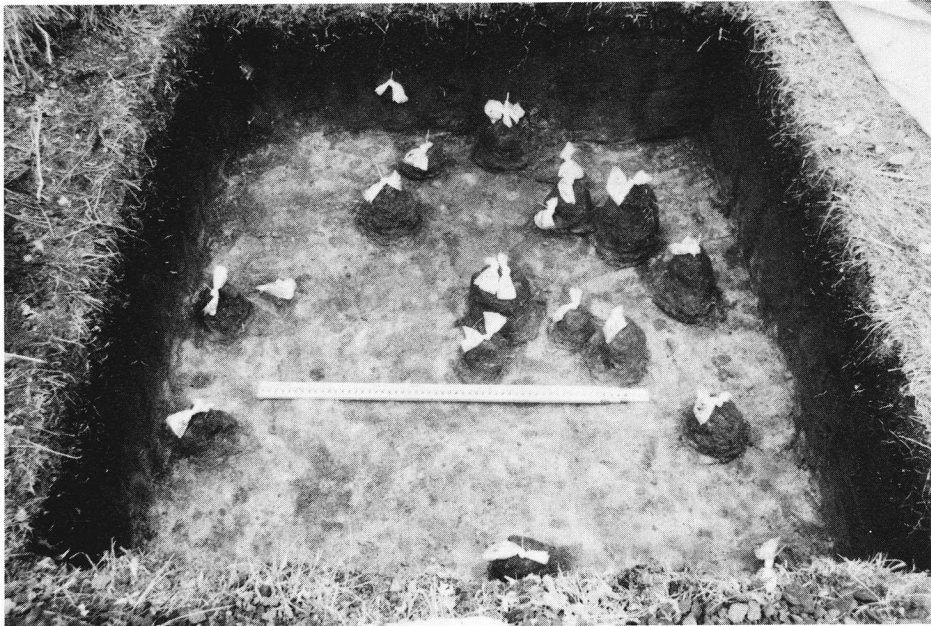
11. KRB-55グリッド遺物出土状況その2



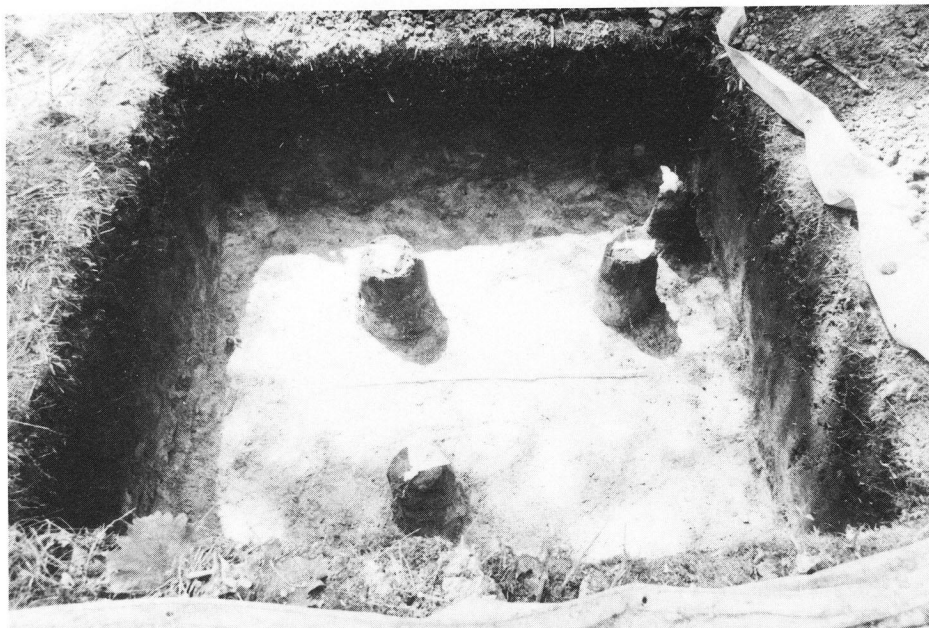
12. KRC-77グリッド遺物出土状況 (H4)



13. KRC-18グリッド陥し穴状遺構 (H4)



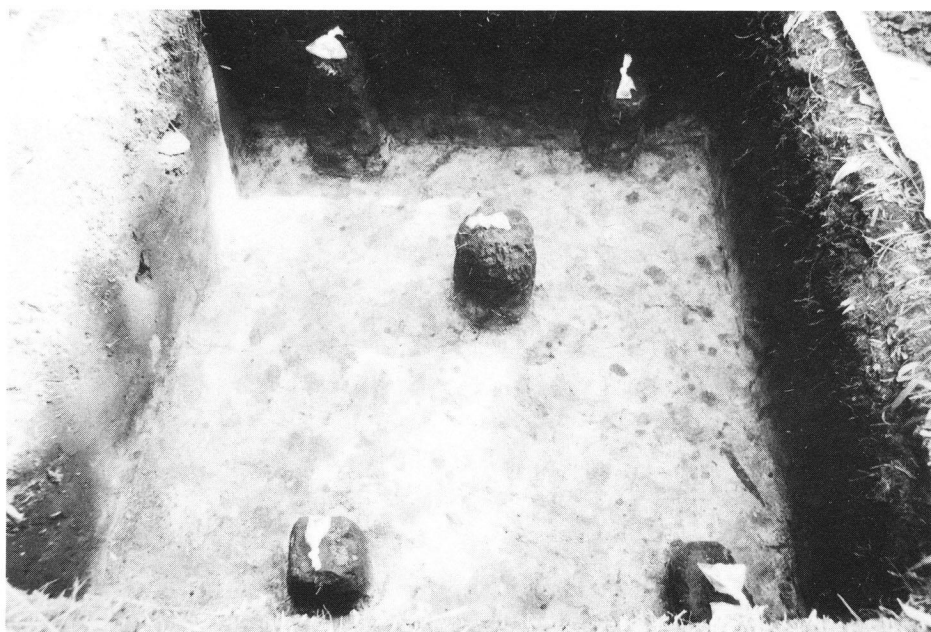
14. KRC-23グリッド遺物出土状況 (H4)



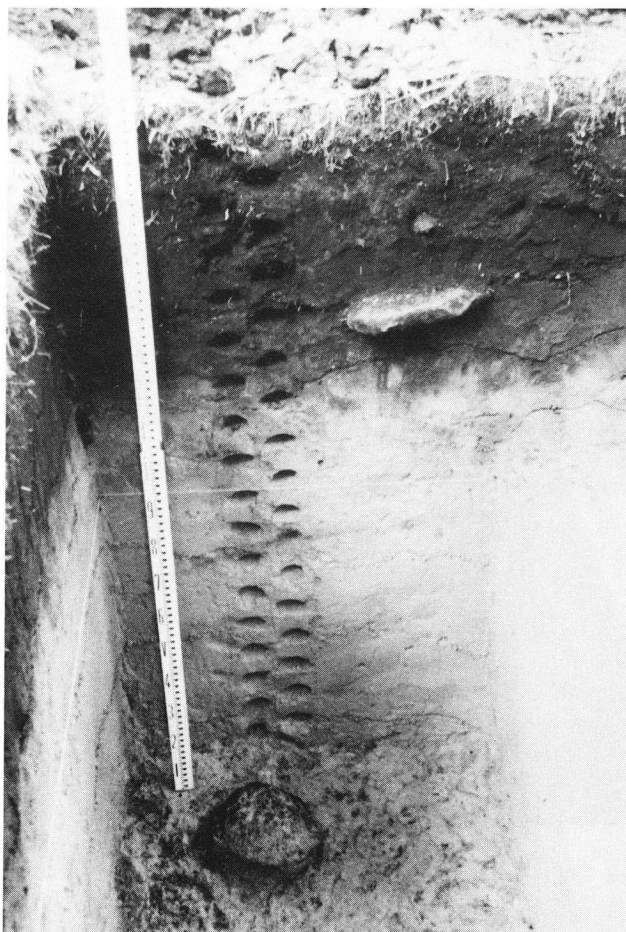
15. KRC-37グリッド遺物出土状況 (H4)



16. KRC-40グリッド遺物出土状況 (H4)



17. KRC-41グリッド
遺物出土状況(H4)



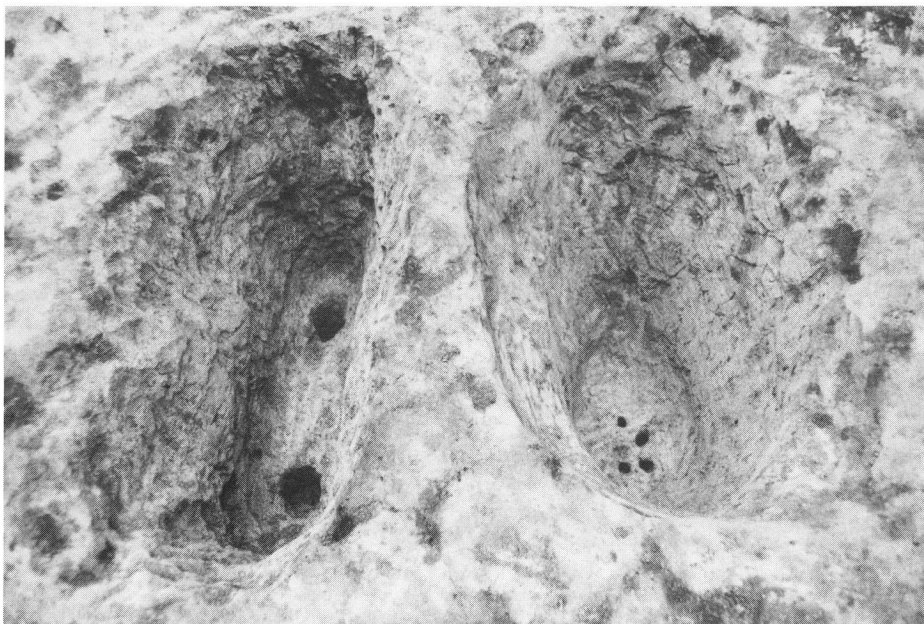
18. KRC-42グリッド
土層堆積状況(H4)



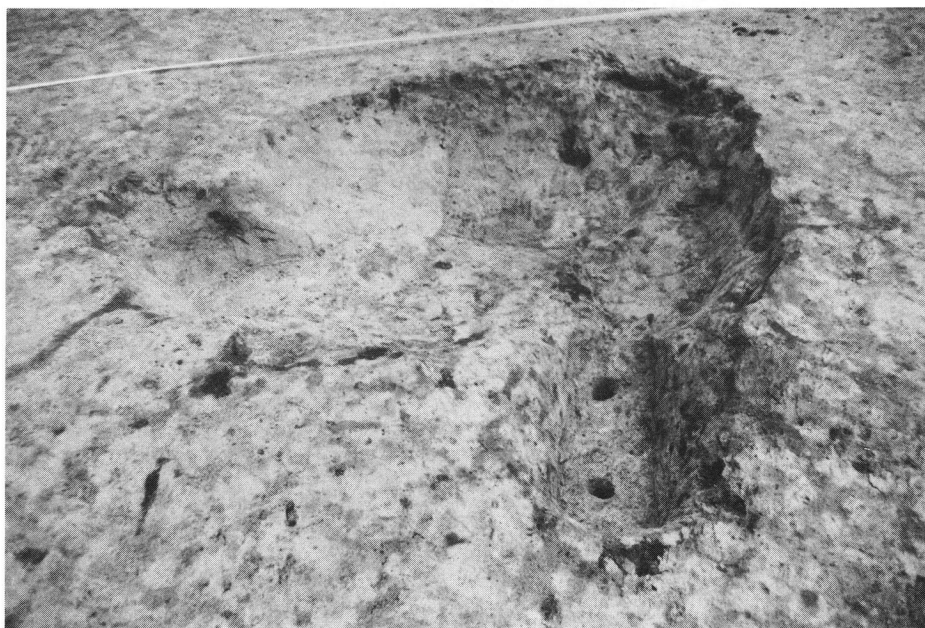
19. ジャコッパラNo. 6 遺跡
遺構検出状況(H 4)



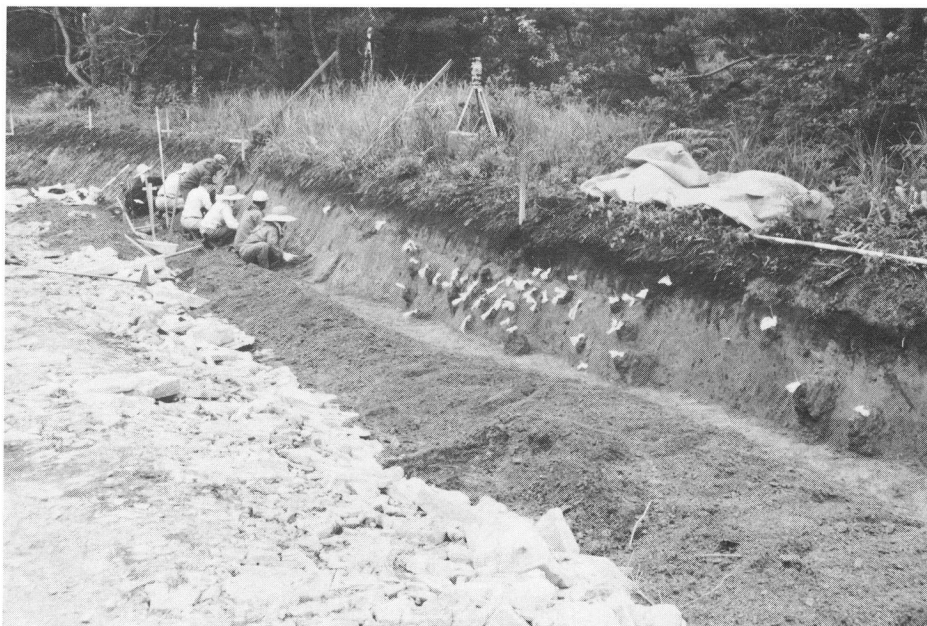
20. ジャコッパラNo. 6 遺跡
5号小竪穴土層堆積状況



21. ジャコッパラNo.6 遺跡2号(右)・3号(左) 小竪穴



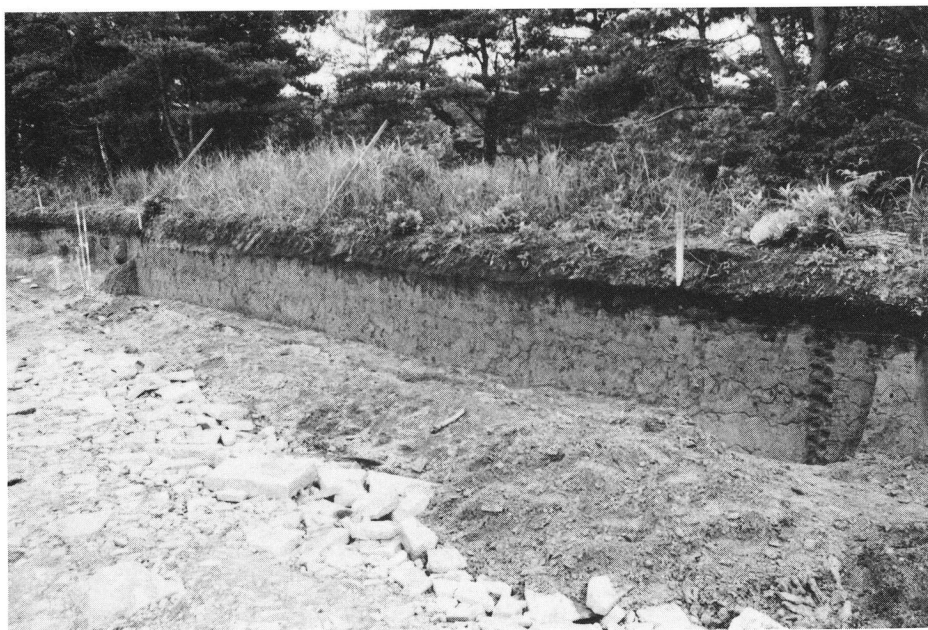
22. ジャコッパラNo.6 遺跡6号(風倒木痕)・7号(陥し穴状遺構)小竪穴



23. ジャコッパラNo.8 遺跡遺物検出作業 (H4)



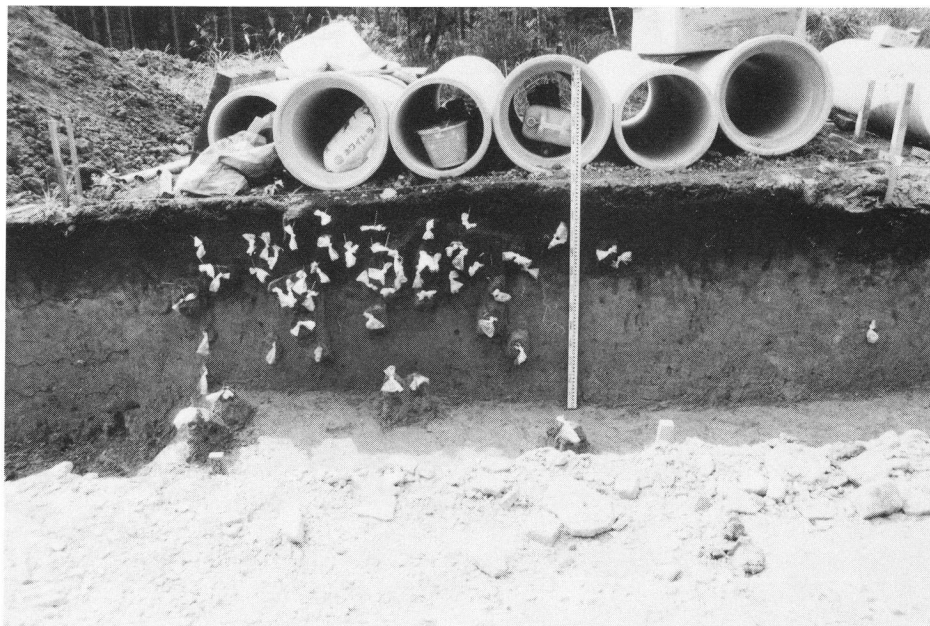
24. ジャコッパラNo.8 遺跡1ブロック



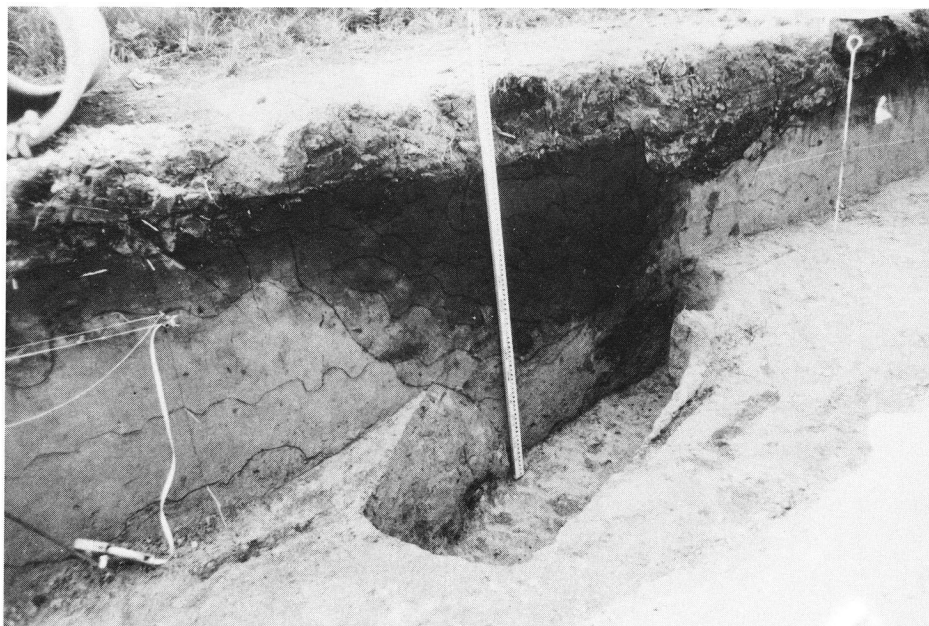
25. ジャコッパラNo. 8 遺跡土層堆積状況



26. ジャコッパラNo. 8 遺跡土層堆積状況



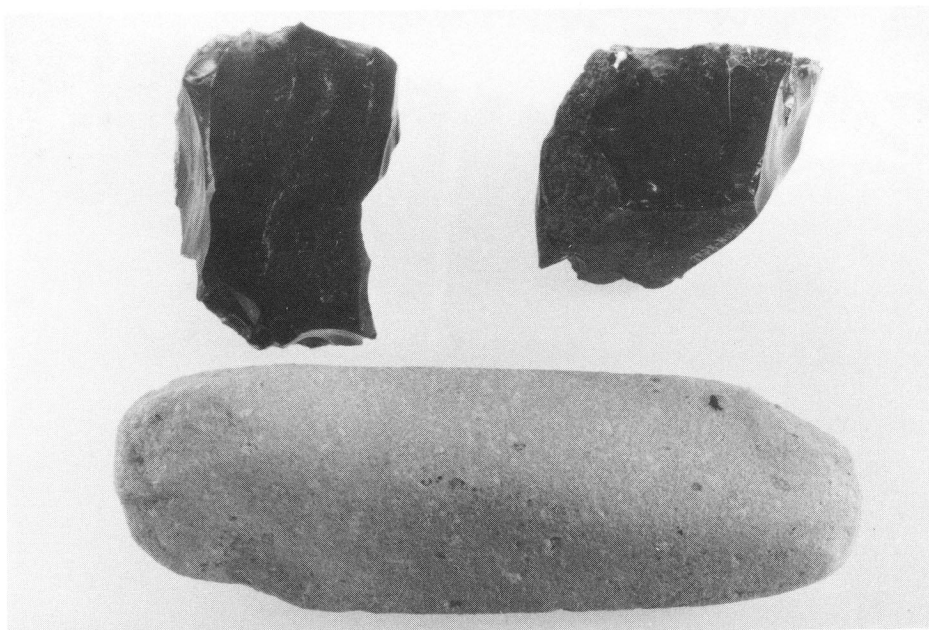
27. ジャコッバラNo.8 遺跡3ブロック・上層ブロック検出状況



28. ジャコッバラNo.8 遺跡1号小竪穴（陥し穴状遺構）



29. ジャコッパラNo.8 遺跡1号小竪穴（完掘）



30. ジャコッパラNo.8 遺跡出土遺物その1



31. ジャコッパラNo.8 遺跡出土遺物その2



32. ジャコッパラNo.8 遺跡出土遺物その2 (裏面)

ジャコッパラII

—平成4年度長野県黒耀石原産地遺跡分布調査概報—
(諏訪市霧ヶ峰ジャコッパラ遺跡群遺跡分布予備調査1)

平成5年3月20日

編集 諏訪市高島1-22-30
発行 諏訪市教育委員会
印刷 (株)マルジョー上田印刷
